

ては變化を受けて休むべしとも思はれず。彼は活潑なる悪戯者なりき。叔父の膝下を離れて宗教學校生活を送るに及び、彼は其嚴肅從順を主とする徒弟的修養に服する能はず。彼は善良なる生徒なれども、僧侶たるには餘に議論好なりき。右頬を打たれて左頬を差出す寛容を有せず。要するに彼は強情に過ぎたりき。是に於て彼の保護者の望も空に歸し、教師も彼の手強に手を焼き、改めて他に轉校を請求するに至れり。依りて彼は初めてカホールの中學に入學せしが、間もなく其明敏、勤勉、快活なる故を以て厚く同輩に推奨せらるゝに至りぬ。同校の半年報によれば、彼は情に激し易けれども、報復的舉動に陥らず。自尊心強けれども、倨傲に處る事なしと。此學習中彼は同學の生徒中最も羅甸語に堪能にして、又佛蘭西文學に精通せり。

然るに十六歳に至り、不慮の災厄の爲め左眼の明を失ひ、一時學業を廢せざるを得ざるに至り、殊に眼疾は動もすれば一眼より他眼へ害を移すの患多きを以て、萬一を慮りて、盲者用の凸文字の練習を初め、又音樂を學びき。然れども此間も知識慾に飽く事知らざるガムベッタは空しく斯かる事にのみ多忙なる少年時代

を徒費するの甚だ苦痛なるに堪へず、其代償として讀書を禁せられし一年餘は、叔母に書を讀ましめて黙聽するを常とせり。叔母は他くまで慈母の愛もて彼を介抱せり。

不思議にも眼疾の一ケ年は實に後年の彼の運命を規定するに至れり。彼の家に一八四〇年前後數年の佛蘭西議會議事録あり。彼れは眼疾中最大興味を以て傾聽せしは議事録中の埃及事件に關するチエール及びギゾーの辯難攻撃や國力平衡論、出版自由の問題等の政治問題なりき。就中埃及問題に關するチエールの鋭犀なる演説は痛くも此少年政治家の熱情を振起せしめたり。後年彼がチエールと種種意見を異にしつゝも衷心不斷の敬意をチエールに寄與せしは、蓋し此當時より老政治家に私淑する所多大なりしに因らすんばあらず。斯くて此一年間に彼は自己の執るべき本領に猛進すべく決心したり。病癒えて再び母校に通ひし時、彼は已に全く政治家を以て自任し、一八五五年、文部大臣の該校を視察せしや、其前に於て彼は首席者として一場の羅甸語演説をなしたるが、明かにナポレオン三世の非難を敢てし、且つ自己の政治的立場を明かにし、大に滿場を驚したり。

聽て彼は法律研究の爲め佛京巴里に遊びしが、彼は直ちに帝國警察の注意人物となれり、一派學生の首領として常に公衆示威運動の魁となるを以てなり。彼等は平和なる示威運動を行へり。彼等は不穩なる舉動によりて無用なる警察の掣肘を受けざる様に努めつゝ、隊伍を組み、或は共和黨の名士の墳墓に花輪を捧げ、或は政府保護の佛蘭西座の演劇に對してある悪作をなしぬ。ガムベッタは其首領として事に乘に先んじ、此頃同座に近きオテル・ド・コルネーユに宿泊せり。一夜皇帝皇后同列にて同座に臨幸の旨仰出され、警察は萬一學生の不敬なる騷擾あらん事を恐れ、豫め、若しガムベッタにして同座に入らんか、直ちに逮捕すべきを告げたり。カムベッタ之を聞き、昂然として曰く、好矣、われ劇場に赴き、而して靜謐を保持せん。余豈に徒に紛擾を好むものならんや。予は唯予が全學生を指揮する勢力を有するを信するのみ云々と。

學生社會に於けるガムベッタの勢力は斯くの如く偉大なりき。巴里に於ける放浪生活、中彼が毎夕を送りしはカフエーにして、初めはカフエー・ラシーヌ、後はカフエー・プロコーブなりき。當時にありては思想知識の交換を希ひ、又は討論、會合等により種

種の利益を追求せんとする青年は、皆カフエーを利用せざるを得ざりしなり。蓋し此頃青年學生の徒の政治的結社の檢束厳しく、濫に政治上の目的の爲めに十二人以上の集會をなすを許されず、急進なる自由論者が私邸に屢、交友を集むるは屢、嫌疑を招き易かりしを以てなり。ガムベッタは斯かるカフエーにありて文學政治等を討議する一會の首領となり、會員は法律、醫學、藝術家等の粹を集めし者にして、皆銳意勃々たる非政府黨なりき。彼がかの急進論者アルテュール・ランと相識るに至りしは此間の事なり。ラン氏は當時にありて、ブルボン黨、オレアン黨及び共和黨を打つて一丸となし、以て帝政黨に當らんとせし者、後大にガムベッタに服し、忠實なる輩下且つ友人となれり。

一眼を失ひし頃より此放浪生活を送るに至りしまで、彼は年一年其政治的立脚地を鮮明にしたり。曩日の赫々たる威權なきも、尙ナポレオン三世の帝政主義横溢を極めたる間、門地なく、金力なく、後援なき眇たる隻眼の一青年は、孤壘を堅守して、鬱勃たる胸中常に共和政治の理想實現に力を竭し、暫くも休む事なかりき。然れども彼は決して長く壯言放談の書生たるべからず。彼は此間に確乎たる地

歩をある職業の上に据ゑんとせり。是に於て彼は巴里法曹界にて錚々の聞え高きアドルフ・クレミュー(熱心なる共和論者)の秘書として孜々辯護事務に勵精し、常に師に法廷に隨行し、事件に深き注意を拂ひ、漸次其呼吸を覺え込みぬ。彼は益々師の信任を博し、一八六一年の辯護を初めとして愈々努力阻勉引續き數十の辯論をなししが、年少氣鋭の彼は動もすれば鋒尖銳利に過ぎて實効少きの憾あり。クレミューは常に懇到なる忠告を垂るゝを怠らざりき。彼は此老政治家兼辯護士の指導の下に十分雄辯の素質を玉成し、更に彼の共和主義を一層確實ならしめぬ。ガムベッタの名聲一時に揚り、且つ政治舞臺に上る先驅をなししが、實に一八六八年十一月七日に行はれたる「めざまし新聞(Rouvet)」の辯護にして、判事は帝政黨の爪牙を去て聞えたるデレヴナーなり。こは該新聞が一八五一年のクーデターの際慘死を遂げたるパウダンの爲めに、表彰紀念碑建設を企て、全國に寄附を募りし記事に關し、政府が主筆を起訴せしに始まる。此事件は事件自體は重大なるものにあらずれど其關係する所主義、人權、政治上の立場等に互るを以て、當時の注目を惹きしは固より當然なり。公判は午後より始まりぬ。傍聽者は市の雜誌新聞

記者を初め法律政治に關係ある人々を以て六室に埋めたり。一わたり審理終りてガムベッタ起立するや、デレボー曰く「思ふに汝多く言ふの要を見、燈を用ふるに及ばざらむ」と。ガムベッタ曰く「燈の用なし、予は此件に十分の光明を投すべければ、さて滿腔の確信を以て、滔々として其天才的雄辯を振ひぬ。彼は事件の成行を叙して皇帝ナポレオンに及び、十八年以前時の大統領ルイ・ボナパルトが誓約を無視して縦に破壊したる共和政府の憲法擁護の爲めに一身を賭したるパウダンの死を叙し、凄壯を極む。判事デレヴナー堪ふる能はず、發言を禁せんとせしが、傍聽人の一齊の反對に會ひて果さず。ガムベッタは尙盛に其雄辯を續けたり。聽衆は鳴りを鎮めて傾聽しぬ。時既に薄暮、廷内漸く暗し、唯彼の聲のみ著しく莊嚴の氣堂に滿つ。彼は進んで佛蘭西の凡ての自由を奪ひし皇帝の暴虐陰險を罵り、遂に結ぶに次の言を以てす。曰く「國君の皇位に上りし日を大祭として祝する能はざるは、獨り汝等佛民なり。嗚呼汝等は鮮血に穢れし王冠を捧げし日、パウダンの宛死せし日、十二月二日を恥辱とせずや。汝等の拒絶せし日は我等共和主義者の神聖なる日にして、殉教者の爲めに痛哭すべく、我等の凡ての希望の祝日なり。立て

共和主義の面々よと斯くて從來書生の空論とせられたる彼の政見は、此一舉によりて忽ち確定し、ガムベッタは全く共和主義の保護者となりぬ。

二 普佛戦争に於けるガムベッタの活動

此大演説後間もなく一八六九年立法議會の總選舉あり。彼は巴里及びマルセイユの兩地より選舉せられぬ。六〇年代も終を告げて、明くれば一八七〇年一月二日、新内閣オリグエーの自由黨内閣組織せられぬ。内外關係漸く急なり。ガムベッタ新内閣に告げて曰く、卿等が行ふ改革は凡て吾人は快諾す。尙予等はより以上を卿等に強ひむ。然れども斯くの如く卿等の與ふる凡て及び吾等の取らんとする凡ても要するに唯政體を他の形式(即ち共和政府)に導く單なる架橋として用ふるのみと。

吾人は今姑らくガムベッタを去りて彼の當面の敵、帝政黨の傀儡なるナポレオン三世に就きて略叙する所あらんとす。

二月革命以前のナポレオンは輕卒無邪氣の青年にして、稚氣寧ろ愛すべきもの

あり。丈低く、脊彎曲し、風采頗る上らず。訥辯にして多くは沈黙し、交際社會に立入らず。唯讀書を樂とするのみ。されば人多く彼を愚物となし、常に侮蔑の眼を寄せたり。されば四八年の成功は彼の手腕によりて大統領の地位を贏ちたるにあらずして、寧ろ無能の傀儡を奉戴して自己の懷抱を遂行せんとする野心家の推舉によれりと謂ふべきなり。固より彼の伯父大ナポレオンに對する熱烈なる佛蘭西國民の崇拜信仰が彼に幸せしは言ふを須ひず。

然れども彼も決して凡庸の人物にあらず。彼が大統領となりて間もなく股肱の謀臣と共に着々其勢力を扶植するに至り、野心家の心算全く齟齬し帝政以外の人々は漸く恐怖の念を生じたり。突如クーデター(非法的政變)は來り、内外齊しく眼を聳動せる間に帝位に登りぬ。大ナポレオンの繼嗣者たる彼は伯父に比すべき大功業を樹て、佛の歴史を飾らざるべからずとの信仰を有し、國民も敢て之を望みぬ。ナポレオンを欺き佛蘭西に禍したるは、此傷まじき空想なりき。彼は切に其似而非鵬翼を張りぬ。露土の事急なるや、平和調和、國際的親睦と外交の標語とせし彼は英吉利を誘ひてクリミア役に大成功を博しぬ。ナポレオン三世の全盛

を蒙りぬ。ライン地方割讓問題は膠なく峻拒せられ南獨との善隣の誼は離間せられて、反て南獨は敵國普と攻守同盟を結びぬ。次でリュクサンブルグ問題によりて又辱められ、遂に西班牙王位繼承問題に依て普佛戦役を醸成するに至りぬ。普佛戦争までの佛帝の失敗に對して名譽心強く感情に激し易き佛人、政變革命に慣れたる佛民は日を追うて皇帝咒詛の聲を増大せり。而して帝政黨其人に乏しく、反對諸黨中共和黨の勢力獨り盛なり。此頃皇帝は自己に對する信任投票をなさしめしに、七百五十萬票の多きに上りしが、不信任票を投するより亦百萬を數へ、就中政府の膽を寒からしめしは、二十萬の常備軍中五萬三千の不信任票ありし事とす。權勢の基礎を軍隊に据うる帝政黨に取り、こは最も恐るべきものなりき。

西班牙王位問題に關する佛帝の要求を普王の拒絶せしに對し、佛は國の體面上、一戦を賭せざるべからざるに立至りぬ。内閣諸相多く主戰論を唱へ、熱し易き佛人も普の傲慢に對し必ず膺懲の師を出さん事を期せり。自國の強盛を過信し、外國の優勢を妬む佛民は、今や政府の失態を聞却して、一途に敵國を怨憎し、前後の

思慮を失したり。一八七〇年七月十五日、外相グラモンが事件の經過を報じ、非常軍事費六千六百萬法を要求するや、ガムベッタ等は手痛く内閣を攻撃せしも、議會の多數は「吾人は普の挑戦に應せざるべからず」と宣言し、ガムベッタ、ジュール、フーブル等十二に對する二百四十六の大多數にて戦争を可決し、十九日宣戰の詔勅は發せられたり。

佛民は愛國心に富み、殊に戰勝は最大名譽となす所、大ナポレオン以來何れの王統も皆此國民の弱點に乘じたり。されば勝利の望なき此役に於ても當初に於ける國民の熱狂、敵愾心は非常の勢にして、皇帝に對する不満は一時忘却せられたり。ガムベッタは最初より此戦争に反對せしを以て、一時政府側及び民間の志士連より追跡せられ、一身の保全に力を用ひざるべからず、毎夜家を空にして睡りぬ。政府は國民の激昂を恐れ、努めて敗報を秘したるが、九月一日セダン陥落となりぬ。永き間屈伏に甘んじ、潛勢力を養ひたる共和黨は愈立ちぬ。ガムベッタは將に蹶起せんとせり。されど此紛亂に乗じ萬國社會黨の一派大に活動し、窃に彼を味方に引入れんとしつゝあり。彼は太だ之に累せられん事を恐れたり。蓋し彼は共和

政府建設を希望すれども、騒亂革命に依るを好まれざればなり。巴里に於ては九月三日午後漠然たるセダン陥落皇帝捕虜の報傳はり、人心激動を始めたり。其夕數萬の巴里市民は市民兵長官トロシーノ將軍を訪ひぬ。議會は同夜徹宵開かれぬ。佛帝國の代議院は死の如き沈黙に陥り、議員一同悲哀の極に達しぬ。唯ジュール・ファールブルの此寂靜を破りて皇帝廢止の宣言を朗讀せしあるのみ。

ガムベッタはセダン降服の報に接するや、如何なる手段によりて合法的に共和政府を打建つべきかに就き腐心したり。彼は賢くも直ちに老政治家チエールの門を叩きて假政府の大統領職を受くるや否やを確めたり。チエールは議會之を認むるならば受諾するを以てしたり。

明くれば九月四日、群衆は續々ブラス・ドラコンコルドに集合し、數分の後數十萬の人衆、潮の如く議會に侵入し、人民は四度チエール宮に入りぬ。午前中ガムベッタは東奔西馳共和黨員を激勵鞭撻し、新政府建設の爲めに各人の部署を定めしが事容易ならず、午後彼の議會に至りし時には數萬の群衆喧々怒號其極に達したり。ガムベッタ雄辯を振ひて聲を限りに民衆を慰撫して人心の鎮靜を計りしが、

此時既にブランキ等社會黨の一派先んじて新政府を組織せりと聞き、匆惶同士とオテル・ド・ヴィエに會して大英斷を以て急遽國防政府を組織し、チエール固辭して受けざるにより、トロシーノ將軍を假大統領とし、ジュール・ファールブルを外務長官とし、ガムベッタ自ら内務長官となり、全責任を帯びて國民の意志の結合に當れり。

セダン陥り、メッツ包圍せらる。佛京は全く軍事上の保護を失へり。普軍はソアソン及びシャロンより巴里に進撃せり。モルトケ以下の獨逸諸將以爲らく、今や最後の障礙は唯巴里府のみ。而も浮華輕佻なる巴里人何程の事をかせむ。一溜りもなく降服すべしと。誠に一八一四年及び一五年に於ては巴里は數日の包圍の後直ちに降服せり。普將が斯く信じて巴里占領即ち佛國占領なりと考へしは無理ならぬとなり。されど巴里は佛國の凡てにあらず。巴里人は輕薄才子のみにあざりき。巴里人は流石に歐人中の粹なるもの、此國家存亡の秋に當り狼狽する事なく、能く自己の地位を自覺して臨機の處置を誤らず、又持久苦節を守り、全佛の模範たるに愧ぢざりき。而して市民に歸趨する所を知らしめ、這般の自覺を與へしものはガムベッタ其人なり。今一々言説の違なれど、彼は天資の雄辯と熱誠とを以

て、一意國家の爲めに身命を賭して戦ふべく激勵し、其間も共和政治を謳歌する事を忘れざりき。又彼は逸早く巴里府外の諸邑を遊説して愛國心を鼓舞し、東西奔走、或は演説に或は事務の執掌に一夕の靜なる微睡も能はざる有様なりき。巴里包圍に先ち政府及び外交事務の一部をツールに移し(九月十九日)他方に於てチエールは諸外國の干涉若くは援助を得んが爲め、英露其他に使せしが功なく、フアイブルとビスマルクとの會見も雙方の互譲を缺きて不成立に終り、ストラスブルグは九月二十八日に陥り、エルサス地方の普の大軍一時に南進せり。佛軍の軍備も着々整ひ、ルフォールは九月末日ロアル地方に於て七十萬の應募兵を訓練し、銃砲彈藥の準備もなりぬ。全く包圍状態に陥りし巴里はツール分政廳の處置を迂遠なりとし、人を遣りて激勵せんぞす。初めクレミューとグレーベゾアン之に擬せられしが、顏齡の故を以て辭し、内務長官ガムベッタ自ら出發するとなれり。この舉や彼の傳記中殊にロマンチックのものにして、今日を距る四十年前、一のツラペリンなく、ライトなき當時に於て、ガムベッタは十月七日十重二十重の圍を衝き、風船高く飛揚して眼下に敵軍の動靜を見つゝ、九日ツールに着し、直ちに熱血

迸り精彩躍如たる宣言を發し、國家の防禦と共和政府保護の爲めに滿腔の胸懷を披瀝して餘蘊なし、曰く「巴里市は既に十七日間包圍状態にあり、二百餘萬の市民同心協力一の睽離なく、共和政府の旗下に集まり、内部の紛争を豫想せし侵入軍の先見を無功に了らしめたり。洵に革命は巴里に於て何等大砲も武器もなく行はれたりき。現時に於ては武装せる四十萬の國民兵、十萬の新動員兵及び六萬の常備兵あり。鍛鐵所に於ては大砲を鑄造し、婦女は擧つて日に百萬に達する藥筒を製造し、國民兵は一大隊毎に各二門の機關砲を具へ、又世界最良の砲手によりて組織せらるゝ野戰砲は準備せらる。……人民は狂せん許りの熱心を以て自己の防禦職務に盡瘁し、義勇兵は日一日と其防禦力を増大せり。人民は悉く靜肅と秩序とを保持し、熱誠事に當れり。巴里市は決して攻陥せらるべからず。巴里市は暴力或は脅迫によりて奪はるべからず。各州同胞の救援すべき期を與へんが爲めに、市は男性的持久力を以て凡ての困厄に打勝てり。これ洵に矯飾なき巴里の實情なり。

斯かる状態は汝等地方州民に多大の義務を負はしむるものなり。諸君等は先づ

第一、戦争の外他の何事にも心を動かさざるにあり。第二、同胞的親愛を以て共和政府の命令を遵守し而して、帝政の爲めに陥れられたる危難より佛蘭西を救済するの外何等の功名心、欲望心をも有せざるにあり。斯くの如くにして初めて共和政府の基礎永に鞏固に、凡ての謀叛人、反動主義者の壓迫を防ぐを得む。……故に吾人は能ふ限り巴里救援力を増大せざるべからず。吾人は地方人士の感覺を鋭敏ならしめ、此不條理なる恐怖に反抗せざるべからず。又別動義勇兵を盛にし、更に又陷穽と伏兵とを以て敵の心魂を脅さざるべからず。一言以て之を蔽へば、吾人は一大國民戦争を開始せざるべからず。實に共和政府は全國民の共同動作に基礎を置くものなり。……斯くて天は吾人の敵を恤むとなく、我等に收穫の雨は降らむ。巴里の守を全うせむ。遠く故國を離れ、吾等に脅されて敵は吾人の武器と彼等自身の飢と自然力によりて遂に退却せむ。……願はくは我等をして一齊に立たしめよ。佛蘭西瓦解の屈辱を忍ばんよりは死するに如かず。如何なる不幸に瀕するも吾人は佛蘭西共和國の統一と不分の感情を保たむ。巴里は重圍の中に在りても不朽の企圖により一層の光輝を放てり。全佛國は當に之に倣ふべき

なり。國民萬歳。一にして分つべからざる共和政府萬歳！

此宣言が國民全般に甚深なる感激を興へたるや論なし。ガムベッタは佛を幾多の防戦地區に別ち、各獨立に軍隊を置き、自由行動を取らしめんとせり。既にして彼は人間以上の活動を以て南佛到處遊説激勵些の休息なく、ブルバーク將軍メッツの圍を衝きてリュに北佛軍を整頓し、又ガリバルヂー伊の義勇兵を以て來援せり。是に於てガムベッタは之をリュ、ルアン、ブールヂ、ブザンソンの四區に別ち、就中ブールヂを中區とする。ロアル軍最も優勢にてル・フール之を率ひ、ブザンソン軍はブルバーク之を率ゆるに至り、益々優勢となり、ガムベッタの所謂佛全國に渉る國民戦争となりて、獨軍は一々之に兵を向くること至難にして、モルトケの目算大に齟齬せり。メッツ以下未陷の城塞尙多く、巴里救援軍漸く近づけり。モルトケ大に驚き、萬一必要迫らば、二十四時間以内に巴里包圍を解きて新戰略を執らんとす。で考へ、ビスマルク亦戦役永引きて外國の干涉あらんとを恐れたり。佛の軍氣愈々振ひ、巴里將に救はれんとす。突如十月二十七日メッツ開城し、メッツ包圍軍南進して佛軍を壓せり。ツールに於るけガムベッタ大に怒り、バゼーンを謀叛者となして、慥

慨淋漓たる宣言を發し、別に四軍に向け、悲壯なる訓辭を垂れて、一死國恩に酬ゆるを以てしぬ。此時の彼の失望推察するに餘あり。此際ガムベッタ自身にも過あり。彼は性急にて且つ自信厚く軍事晦きに關せず、常に之に干渉し、忠實なるブルバキの言を用ひずして戰機を誤り、一方獨軍は破竹の勢を以て襲來し、ガムベッタの激勵も諸將の努力も寸効なく著々破られ、斯かる間に年は改まりて七一年一月を迎へぬ。其十八日普王ウイヘルムはヴェルサイユ宮に獨逸皇帝の位に即き給へり、巴里國防軍は屢、突出を試みしも其都度擊退せられ、糧食全く絶え、二百四十萬の巴里市民將に餓死せんとする運命に迫り、フールは焦慮煩悶遂にビスマルクと休戰するの休むなきに至り、遂に四月二十八日巴里開城は實行せられたり。

此休戰條約は必ずガムベッタの極力反對すべきを知るを以て、閣議は談判結了まで之を秘密にし、調印後二十八日夜中ポルドーなる彼に通告せり。ガムベッタ已むなく服従し、令を各軍に傳へて砲火の中止を命じ、以て條約全文の到着を俟てり。然るに休戰期日の開始は地方により其日時を異にせしに關らず、其事通知に洩

れし爲め軍備を撤せし佛軍に對し、獨逸軍は此の容赦なく攻撃を繼續せしかば、ガムベッタ苦心の地方國防軍は忽ちにして甚しき大損傷を被り、ガムベッタの下に集りし報告は巴里政廳の電文にあらずして、最愛なる軍隊大敗の報のみなりき。彼の激怒知るべきのみ。彼は敵軍の侮辱と國民の安固の爲めに最早不信なる巴里政府の意嚮を省る迫あらず、再び激烈なる宣言を發し、此休戰期を利用して新兵を練り、和議條件が佛の名譽境域を害するものなれば、敢て戰爭を繼續すべきを以てし、夫れが爲めに一大國民的共和的議會により去就を佛國民全體に問ふべきを以てせり。

又彼は分政廳に迫り、國會召集を布告すると同時に、帝政黨一味の者は被選權なことを布告したり。然るにこは内治外交上一の困難を來し、ビスマルク先づ之を詰問し、巴里政府之が撤回を迫りしが、分政廳以下之を拒絶し、事態愈、紛糾、衆皆ガムベッタの叛旗を翻さんことを恐る。然れども彼や佛の名譽と安寧を以て一身を賭するもの、事爰に至り獨力外敵に當り難きを見、萬斛の恨を吞んで辭職し了んぬ。

普佛戰爭に際するガムベッタの行動は幾多論議すべき所あらむ。單に利害問題の

みより論せば、セダン陥落後、佛は直ちに媾和すること最も安全なり。ガムベッタ、フアンブル等あり、全國を糾合して尙數ヶ月に亙る佛全體の戦争を惹起し、却つて多大の身命と財産を損ひしは事實なり。然れども一國には他の何物を以てしても換へ難き其國の歴史、名譽、生命、理想あり。ガムベッタは最も鋭敏に之を意識せしもの、而して佛國民能く彼の言を理會し、坐ながら不名譽なる媾和をなすに忍びず、萬事を抛擲して苦戦したり。究竟戦は全敗に了りぬ、されどそは名譽の戦敗なり。今更ながら佛國民の偉大なること證明せられ、殊に戦敗の惨害、莫大の償金が數年ならざるに恢復せられしは、實に全世界を驚歎せしめしものなりき。然れども當時の情勢上獨が土地と償金を要求するは當然不可避の事たり。強ひて之を拒まば、益、慘劇を重ね、又列強の同情に反くは明かにして、チエールが是等要求を覺悟せしは自然なり。然るにガムベッタの自己の理想信念を固執すること急にして、屢、内紛を醸し、同僚と乖離するに至り、又外交上の困難を惹起せしは寔に惜むべく、更に軍事上の知識缺乏の爲め、却つて、佛國に不利を招きし事實など、幾多非難せるべきものありと雖、而も彼の衷心祖國忠愛の念の外更に何物をも

有せざりしは、彼が辭職の際些の反抗的態度なかりしを以ても知らるゝなり。

三 ガムベッタと共和黨 彼の晩年

三週間の休戦期間に和戦の決を取るべく國民議會の總選舉は二月八日に行はれぬ。國民の輿望が七十餘歳の老政治家チエールに萃まりしは至當にして、彼は二十六ヶ所より選出せられ、ガムベッタはトロシユと共に九ヶ所なりき、議員の總數六百三十、其中兩王黨(ブルボン黨及びオルレアン黨)約四百、共和黨二百、其餘はポナバルト黨之を有てり。土地の大半を兵馬の蹂躪に委ねられし佛國は當時平和を希ふの念切に、ガムベッタ等の主戦論は多くの國民の希望に反せしは尤と云ふべく、又彼と共和政府の人々との意見の衝突は共和黨に對する國民の疑惑を高め、彼此合して共和黨の勢力を殺ぎたり。ガムベッタは時運非なるを見、自ら去りて數ヶ月を西班牙に過しぬ。其間に議會はチエールを大統領に舉げ、次でヴェルサイユ、フランスと和議成立せり。

對獨關係一先局を告げたり。次に來るべき大問題は將來の佛國の政體如何に存

す。ナポレオンの没落は急遽国防共和假政府の樹立を見しが、これ固より一時的のものに過ぎざりき。されば新議會開設後は各黨領袖互に其秘術を悉して自己の所思を貫徹せんとしぬ。當時の政黨中鼎立の勢力を有するをブルボン黨、オルレアン黨及び共和黨とす。而して各の主義綱領とする所、ブルボン黨は大革命前の政治即ち専制君主制を夢想し、且つ同黨の白色旗を國旗とせんと主張し、オルレアン黨は立憲君主制とし、三色旗を用ひんとするにあり。而して共和黨は勿論共和政治を確立せんとす。第一のが實行せられざる固より明白地と云ふべく、殘る所は立憲王政か共和政かに存す。オルレアン黨の主張は温和にして、黨に老功なる有力者少からず、チエールなど元來之に屬するものなり。共和黨は時に矯激なる分子を含有するあるも、銳氣潑刺たる進取の性に富み、歴史的偶像に拘束せられず、ガムベッタは實に其中特に急進派の首領たり。

翻つて歐洲一般の政界を見るに、自由進歩の氣勢益々其勢力を増し、獨塊の立憲君主制となりしは勿論、露の如き東歐に僻し、數百年來獨裁權を振へる帝國すらアレキサンデル二世即位以來、僕農解放、司法改革等の自由政策行はるゝ有様にし

て加之社會主義運動は年と共に其氣焰を高め、巴里は普佛戰後一時共產主義者に占領せらるゝ如き情態なり。されば因襲の破壊を得意とする佛國は今や大なる障礙なき限り、禍亂を再びせざらんが爲めに根本的に鞏固なる政體を建設せざるべからず。國利民富に意を用ひ、國家百年の計を慮る政治家は大なる熱考を要したり。されどガムベッタは少しも遲疑する所なかりき。理想と信念に忠實なる彼は最初より全心身を共和政の爲めに傾注し、極左黨の首領として、間斷なく全國を巡歴し、天稟の雄辯を振ひて共和主義の爲めに猛烈なる奮闘を續けたり。彼は現議會は憲法制定の權能なきものにして、真正なる共和主義の憲法は之を解散し、新議會の召集を俟ちて初めて得らるべきものなりと絶叫せり。かの新聞佛蘭西共和主義を發行せしも、此頃(七一年十一月)にして演説と相俟ちて新に主義傳道に供せられたり。其功空しからず、補缺選舉の結果は殆ど常に共和黨の勝利に歸したり。チエールも國家の將來が共和政治を措きて他に最良のものなきを見、七一年末には自己の共和黨に屬するを公言し、翌年十一月の敎書に於て更に佛國將來の政體は共和政體たるべしと宣言せり。

然れどもガムベッタが憲法制定權なしと怒號する當時の議會の多數を制するものは兩王黨なり。由來ブルボン、オルレアン兩黨は一致し得ざりしが、今や王政と共和政との瀬戸際に迫りて尙相闘ぐの不利なるを覺り、屢、妥協を計り、其一として兩王黨は共和主義を公言せし大統領チエールに不信任投票をなして辭職せしめ、代るにマクマホンを以てし、オルレアン黨のプログリー公首相たり、斯くて彼等は、一舉に共和政府を仆して君主制を復興せんと計りぬ。抑、何故に彼等が斯く成功を急ぐやと云ふに、彼等は現下の議會に於てこそ多數を制すれ、共和黨の勢力日に強大にして、次期の選舉に於ては到底勝算覺束なきを知れり。現に七三年初めより七五年一月までの補缺選舉二十九中共和黨員の選ばれしもの二十三名、ボナパルト黨六名てふ形勢より推す時は、彼等の地位頗る危しと云ふべきなり。彼等は議會内に於て連合すると共に、外部に於ては同國に於て常に政治上に跋扈する舊教僧侶と握手せり。蓋しガムベッタ等が舊教徒の國政干渉を大攻撃せしを利せしなり。七三年七四年の兩年は實に共和政、王政の孰れなるかを知らざる有様なりき。

時勢の進運は遂に區々たる術策を許さず、左黨の勢力は益、擴張せられ、チエール一派に次ぎ、カシミール、ペリエー一派亦共和黨に與せり。ガムベッタは愛國の赤誠と理想の把持に堅く、一般政治家の如く妥協や術略に拙に、屢、自黨の人々に誤解せられ、他黨と衝突して不利を招くこと往々なりしが、今や少時より欽慕措かざりし老政治家が自己の主張に相近づくに及びて屑々たる小事に彼と争ふを欲せず。且つ自己の地位愈、高くして愈、自重せざるに至り、加之彼の率ゆる急進派中往々社會主義者の相混じて、頗る累を彼に及ぼすあり。是等の事情は漸く彼を温和派に親ましむるに至り、七四年末には、彼は現議會の憲法制定權を否定し、解散を主張せしを休め、證めて中央左黨より議會に提出すべき共和政體の確立を目的とする議案に賛成するの宣言をなしぬ。

兩王黨の妥協聯合は一時太だ有望なる如く見えたり。然れども根本問題に至りてブルボンの嫡流シャンポー伯は其守舊的主張を枉げず、兩黨策士の苦心慘憺たる對共和主義聯合策も全く蹉跎し了んぬ。佛國民は三四年の間十分省慮の期を得たり。最早永く不定なる政體の不安に堪へず、其の確定を希望すること切なり。

しかば、ブルボン黨と調和し難きを見たるオルレアン黨員中共和黨に傾くもの漸く多く、七五年一月議會開會に至り共和政體確定の動議となり、王黨及びボナパルト黨百方反對の効もなく、月の二十五日極右黨及びボナパルト黨の二百五十四に對する左黨全體及び舊オルレアン黨の一部四百二十五を以て共和政體は永久に確定せられたり。ガムベッタの宿望は遂に達せられたり、固より此度の成功が直接彼の勢力に依るとなすは甚だ當らざらむ。然れども多くの他の人々が政體の選擇に迷ひ、彼此彷徨の餘り、遂に共和政に到着せしに反し、彼は終始共和主義の保護者として惡戰苦闘を續け、最後の勝利を博したり。彼は少くとも共和政の开拓者たる名譽を荷ひ得べきなり。

秩序整然たる共和政治の運行は實に七六年に始まる下院の新選舉に於て三百六十名は共和黨の占むる所となり、ガムベッタは隱然其首領として佛國の政界に雄飛せり。此以後共和黨の勢力は日に月に増進し、ガムベッタの勢力從ひて愈、大に其間の出來事頗る興趣多けれど一々叙するの遑なきを憾む。

七七年、大統領は一時共和黨内閣を止め、オルレアン黨の保守派ブローグリー公をし

て内閣を組織せしめたり。依りて三百六十三名の共和黨議員は大に大統領違憲の罪を鳴らし、内閣は又議會を解散し、共和黨員の官吏を罷免し、集會俱樂部を閉鎖せしめ、殊に新聞に對し甚だしき壓迫を加へたり。是に於て四派の共和黨は聯合して政府に肉薄し、ガムベッタ實に其牛耳を執れり。八月十五日、リュに於る演説は將に大統領及び政府全體を吞了せるもの、諸君、疑ふ勿れ、佛國が一度其主權者の叫を揚げん時、彼大統領は服従か辭職か其一を選ばざるべからずと。この一句彼に三箇月の禁錮、三千法の罰金に値し、又ベルヴィユに於て、佛國は獨裁專制の政略を許容せず、將に之を責罰せむ。佛國は其行政長官をして服従か辭職か其一に處らしめんと。此言亦禁錮三ヶ月、罰金四千法に當りしが、政府は人民の憤激を恐れて刑の強行をなし得ざりき。ガムベッタは到る處歡呼と喝采とを以て迎へられ、之に反して大統領が閣員を從へて國內を巡遊し、演説するや、徒に共和黨萬歲、三百六十三人の議員萬歲、チール萬歲、彼は此時共和黨總理なりきの聲を以て妨げらるゝに過ぎざりき。新總選舉は共和黨の勝に歸し、内閣は更迭し、大統領マクマホン、ガムベッタの公言通り屈服せり。而も辭職せずして服従し、全部共和黨員

より成る内閣(陸相を除く)は組織せられたり。
 是より先き九月四日、チール歿し、ガムベッタ愈々人望を一身に萃めぬ。斯かる共和黨の勝利はガムベッタの勝利なり。彼は權勢の増大につれ態度益々慎重となり、漸進温和、國熱の境に近づき、努めて輕躁矯激を抑制せり。されば急進派の人々は彼を目して豹變者、投機者と爲せども、國民の尊信は益々加はるのみ。彼の地方遊説に赴くや、其狀凱旋式に彷彿たり。七八年の秋、彼が暫時漫遊をなせしや、其行恰も戰勝の行列の如し。彼の劇場に入るや、觀客は一齊に起立し、爲めに演技は一時中止せられ、滿場の群集期せずして國歌「マルセイユ」を唱ひたり。斯かる際も彼は機に應じて自己の主義公表と舊教徒に對する辛辣なる攻撃をなすを怠らざりき。七九年、事によりマクマホン遽に辭職するや、ジュール・グレヴィを大統領とし、ガムベッタは即ち九十一府三百十四票の大多數を以て下院の議長となりぬ。議會は彼の主張により議會をヴェルサイユより巴里に移すの儀を可決し、次に所有反抗に打勝ち、遂に舊教徒の手より教育及び學校管理の權を褫ひて之を文部大臣の下に置き、又ジュニエットを放逐するの案皆通過し、翌年より着々實施せられたり。これ實に

ガムベッタの最盛期なり。さればオルアン派の新聞「ソレーユ」(太陽)は彼を評して「宰相は木偶なり。大統領は傀儡より尙下れり。ガムベッタは共和政府の皇帝なり。否、皇帝以上ならむ。彼は彼自身共和政府なり」と。過激派も同論鋒を用ひたり。思ふに當時敵味方となく爾か信じたるなるべく、外人亦同様なる思想を有し、彼の外交上の演説は少くとも佛の半官的演説を以て目せられたり。されば其の頃軍旗式ありて四百餘旒の軍旗盛儀を以て授與せられ、國民一般敵愾心興奮せし頃、即ち八年八月、シエルブルに於ける佛は好機に乗じて會つて失ひし地方を恢復せざるべからずとの演説は非常なる反響を列國殊に獨乙に與へ、爲めに大統領及び外相は力を竭して他意なき旨辯解せざるを得ざりき。
 ガムベッタの此間に於ける行動の中には議すべきものも少からざりき。反對黨をして共和政府の皇帝なりと罵らしめし如く、彼は自信厚きが爲めに我意を通じ、又慎重なる態度を缺きて前述の如き外交問題を惹起せし等、敵味方の非難の種となりしもの少からざれど、而も彼の衷心未だ會つて熱誠の精神を缺きし事あらず。彼既に共和政府を牢乎不拔の基礎に置きぬ。普佛戰爭以後瞬時も彼の念頭

を去らざるは、如何にして普魯西亞に對する復讐をなすべき、如何にして佛の領土を擴張せしむべきにありき。不幸にして其機容易に至らず。斯くて彼は其希望を達せんが爲めに、遂に八一年十一月内閣を組織し、自ら外務の任に當り、列國の耳目を聳動せしめたり。

彼は其以前よりチニスに着目し、既に先鞭を着け居たる伊太利を出し抜きて遂に保護國となし終りぬ。初め失費多く不評判なりしが、今日に於ては佛の屬領中須要なるものゝ一とす。彼は又眼を埃及に馳せたり。埃及は宗主國土耳其に對する獻金、スエズ運河開鑿費等の爲めに外債を募集し、其債權國は主に英及び佛なりき。然るに同國の國債山積して其利子すら支拂ふに由なく、財政状態日に危険に陥りしかば、英佛兩國は人を遣りて財務の監督、政治の容喙をなし、動もせば暴慢に馳するに至りぬ。埃及の志士大に憤激し、八一年には排外的運動漸く猖獗なり。カムベッタ即ち一舉に高壓手段を之に加へんとし、英を動かして聯合軍は將に出兵せん準備まで成れり。然るに不幸にして憲法改正問題が内閣瓦解の因をなし、八二年一月二十六日遂にカムベッタは其職を辭し、爲めに佛は埃及より手を退

けたり。此間に英は益々其高手を埃及に加へ、遂にアラビトパシヤの亂を平げて埃及は全く英の附庸國となりぬ。若しカムベッタの政策を繼續せしめば北亞弗利加一體の地は永く佛の有に歸し、スエズ運河は佛の管理に屬したるやも知るべからざりしなり。惜むべき限りと謂つべし。

一八八二年十二月三十一日佛蘭西共和國の大恩人レオン・カムベッタは舊創を病みて、溢焉として逝けり。時に年僅に四十四歳。

四 彼の人物、辯舌、主義

伊太利人の血を享けたるカムベッタは南歐人士の特質たる溢るゝ許りの熱情と傲岸にして自信自尊の負けじ魂最も強かりき。これ彼の長所即ち短所にして、成功と失敗と皆之に基けるは上來の事實是を證せり。彼は質實正直にして、嫌味なく、親切に、又性寛容にして偏僻の心なく、衆人に愛せられき。これ蓋し早く母を失ひしと雖、叔母の限なき慈愛を十分に味ひ、稍、長じては彼の非凡なる才幹は衆友の敬慕を得、圓滿純潔なる性情を養ひ得たる故ならむ。可熱質にて激し易き爲め

に、其勢力増大につれ幾多の敵を作りしと雖、彼は夫等に對し毫末も惡感讐敵の念を有せず、自己の主張と合するものに對しては敵味方の別なく、常に喜んで事を共にするを辭せざりき。彼の勤勉と好學とは容易に匹儔を見ざるものにして、學生時代の勉學は更にも言はず、普佛戰爭當時の活動は殆ど一夕の微睡をも與へず。又晩年の數年間の運動は人力以上にして、毎夜四時間以上の睡眠を取りし事なく、祖國と主義の爲め、體力健康を省るの違なかりき。されば彼の友人は皆斯かる不斷の勤勉、持久力の偉大なるに驚歎の眼を睜りぬ。然れどもこは徐々彼の身體を蝕み行き、僅少なる銃創は可惜、此壯者の致命傷となり、遂に恢復すべからざるに至りぬ。而も彼は最期の際まで幼時よりの讀書癖を廢せざりき。彼は又特に孝心厚く、早死せし母に對する愛慕の念止む時なく、叔父母の恩を忘れず、老いたる父に對する孝情甚だ切に、最後の息を引取る時、尙生殘れる父の健康と幸福とを祈りて止まざりき。彼は飽くまでも愛すべき人間なり。

彼は佛京に於ける法學研究中盛に各方面の書を涉獵し、殊にミシユレー、ブルードン、デイデロー、モンテスキュー等は彼の思想に大影響を與へたり。彼はコムトの哲學

を修めて實理派の傾向を具へ、又歴史を好み、殊にテームス、ルナンの著を喜びたり。又彼は科學にも興味を有し、ラマルク及びダーウインの進化論をば彼の友人に鼓吹する甚だ力めたり。されど彼は形而上學には不得手にして、又彼の宗教は教條に存せず、國家市府の崇拜にして、夫等は彼の祭壇、神格なりき。

凡てに堪能なる彼の特に勝れしものは辯舌なり。ガムベッタは彼の在世中歐洲最大の雄辯家なりとは英の新聞、デイリー・ニュースの云ふ所にして、内外一般之を許容したり。雄辯は彼の天賦にして、毫も準備を要せざりき。私談に於ても、議會の壇上に於ても、委員會席上に於ても、卓上演説に於ても皆然りき。何等の努力もなく、滯滯もなく、自然に金玉の辭は發せられ、聴く者をして其色彩、音調、抑揚加ふるに其熱誠に魅せらるゝなり。

彼は丈高からず、頸太く、強健肥滿にして、横溢せる氣力眉宇に漲る。容美に、毛髮黒くして豊富なり。彼の壇場に上るや、太き低き調を以て嚴肅に口を開き、其漸く佳境に入るや、獨眼もて四方を睥睨して、意氣滿堂を呑み、或は春光融々たる佳調となり、或は風雨凄々たる怒號となり、自己の主張を述べて餘蘊なく、敵を攻撃して

完膚なからしむ。されば敵味方となく恍然として彼の演説に引入られ、彼の軍門に投せざるを得ざるに至る。下院に於て大多數を制し、國內遊説毎に歡呼喝采到らざるなく、遂に共和政府の確立を見たるもの實に之に因るなり。彼の演説が毫も準備なく當意即妙に出るの例は甚だ多し。ガムベッタ嘗つて曰く、予は辯論を準備せしこと嘗つてなし。演説は予に何物をも値せず。唯予は予の確信を披瀝し機に應じて其論歩を進むるにありと。これ彼の眞の面目なりしなり。

彼は其短生涯を全く共和主義の爲め捧げたり。彼の眼には共和黨は單なる一政黨にあらず。實に佛蘭西國其者にして國民即ち共和黨員なりしなり。彼が共和主義者となりし所以は固より巴里遊學中の倜儻不羈なる自由討究の餘に出でしもの、前述の文學者、思想家、哲學者、科學者の諸説何れか傳説を打破し、束縛を脱したる最新の學説ならざるものかある。ガムベッタが是等を取り入れて共和主義に赴きしは寔に所以ありと謂ふべし。而して當時の政治思想中、最も新奇にして、熱烈慷慨の青年を刺戟せしものをブルードンの社會主義乃至無政府主義とす。ガムベッタ亦頗る其諸著を愛讀せり。但し彼は之に心酔せず、其弊を知りき。彼の如き

愛國家は到底斯かる破壊主義に堪へざるなり。そは彼が其友に向ひて、ブルードンを讀め、されど用心を怠る勿れ、彼は到る處係蹄もて滿さるればなりと云ひしによりても明かなり。されば彼が動もすれば過激に馳せ、又社會主義と誤られしは原因を之に有するならむか。

彼の政治上の主義の共和主義なる事は反覆之を陳べたり。唯尙一言言ふべきは彼が極端なる愛國者なるとなり。此點に於て彼はガリバルディーに相似たり。而して國を憂ふるの赤誠が時に非常識の行動に立至りし事も兩者相似たり。彼が夙夜佛國の膨脹に腐心して止まざりしも、實に此愛國心の致す所なりとす。チュニス事件、エチプト事件に盡瘁したりしも亦此爲めのみ。就中彼が夢寐にも忘るゝ能はざりしものは、對獨復讐戰なりき。されども天壽を假さず、不幸短命にして終る。彼の遺恨察すべきなり。若し彼をして壽あらしめば歴史は再び獨佛戰爭の活劇を繰返せしやも知るべからざりしなり。又ガムベッタの如き青年が社會主義に赴かざりしもの實に此切なる愛國心ありしが爲めならむ。彼が共和主義には稍背馳するが如く見ゆる中央集權を主張するは實に鞏固なる國家存立に缺くべか

らすとなしたるが爲めなり。又彼が力を竭して教會殊にジエスイットに打撃を加へしは舊教僧侶の動もすれば國政に容喙し、國論を誤り、國家政府を危殆に陥らしむるを恐れたればなり。ナポレオン三世の政策動搖は實に之に因す。ガムベッタの眼を茲に注ぎしは洵に當を得たりと云ふべく、今日佛國政府が教會以上に立たんとするに至りしは實にガムベッタの恩惠によるものと云ふべし。さればガムベッタを以て十九世紀後半佛蘭西共和國の最大人物なりとは云はず、其名譽を荷ふべきはチェール其他にあるべしと雖、少くとも彼を以て現共和政府の大恩人の一人となすを憚らざるなり。

第十章 クレマンソー

一 在野のクレマンソー

ジョージクレマンソー(George Clemenceau)は佛國に於ける共和黨左黨の領袖なり。常に自由と正義とを標榜して共和政の爲めに努力し、祖國の爲めに畫策せし所も亦尠からず。彼は今を去る六十八年前、一八四一年九月二十八日を以て佛國バンデーなるムイエロンに生れぬ。少壯時代より夙に政治の趣味を有し、十九歳の折には共和政の恢復を唱へ、ナポレオン三世の帝政主義に反對したるが爲め、縲紲の辱を受けて獄窓に呻吟するの身とはなりぬ。其後幾もなくして青天の身となり、にしかば、暫く政治界を絶ち、巴里に遊び、醫を學びて生業となし、一八六九年にはモンマルトルに居を卜し、只管貧民の施藥に従ひ、仁慈の道に勤むるに至りぬ。時ありては小説を筆にし、戯曲を草し、常に社會の改善と正義の擁護とを計れり。さはれ覇氣に富み、縦横の才を抱けるクレマンソーは永く此平和の社會に其足を止むるを好まざりき。彼は漂渺たる大西洋を航して海の彼方北米大陸の光景

に嘯きぬ。四年の間は彼地の學校に在りて教鞭を執り、文學史等を講せり。斯くて米國の一婦人を娶りて其偶となし、普佛間に戰雲亂れ、三軍の貔貅一鼓將に動かんとする比ひ、再び故國なる佛國の人となりぬ。セダンの防禦保ち難く、巴里城頭白旗を掲げ、慘憺たる戦後の佛國は又もや社會黨の争亂に惱みぬ。此時クレマンソンは其調停者として暴亂を鎮めん事を計りしも、成效を見るに至らずして止めり。幾もなくしてマクマホン將軍の率ゆる大兵は一舉にして、是等の叛徒を誅し、反賊の首魁たりしルコムト、クレマン、トマス等の如き何れも其戮に就くに至りぬ。其後オテル・デ・ヴィエなる中央委員會クレマンソンの叛徒に係れるあるを疑ひ、之が逮捕を命じ、遂には審問の結果、暴動を抑へ得しに係らず、傍觀せりとの理由をもて科料に處じ、二週日の禁錮を命ずるに至れり。而も彼は飽くまでも其の無罪なるを争ひ、漸くにして其罪名を免るゝを得たり。之より後は同僚なる社會黨員の爲め、切に其大赦を望み、一身を以て難局に處じ、遂に一八八〇年を以て其目的を達するに至れり。

一八七〇年、彼は全市疲弊の後を受けて之が整理に任せんとし、巴里の第十八區

なるモンマルトルの市長に擧げられぬ。由來同區は難治の聞え高かりし處なるが、其非凡なる頭腦と巧妙なる手腕とは最も平穩に之を治め、彼をして良尹の譽あらしめたり。實にこれクレマンソンが壯時の經歷にして、政界に於ける活動の序幕は斯くの如くして開かれたりき。

二 政治家としてのクレマンソン

囊中の錐は早晚穎脱せざるを得ず、活氣縱横雄心磊々たる政界の偉人は、茲に其搖籃を離れて議政壇上に立てり。一八七一年二月の總選舉は彼をして此榮冠を擔はしめたり。彼はセーヌの選舉區より選まれ、下院の急進派(左黨)として名乗を擧げぬ。

クレマンソンは風采温雅なりと稱すべからざるも、其高き額骨、爛々たる眼光、濃厚なる眉毛、何れも一種の威嚴を示し、時に粗奔の舉動なきにあらざるも、確固たる信念と平靜なる心情とは常に眉宇の間に往來せり。彼にして一度壇上に立たんか、其堂々たる風采は忽ちにして滿場を壓し、口を開けば、明々たる音吐、聽く者

をして壯快の念に撃たれしむ。彼は其文學に於けるが如く、辯論家としても極端なる苛酷派に屬し、決してコンスタン・フーブルの如く秀麗の句彫琢の語を用ひず。一語一句簡潔を旨とし、亂麻を絶つが如きの快辯は聽客の肺腑を刺さずんば止まず。彼は常に平穩なる生活を好まず、活動的の奮闘を持續す。彼は政界に於ける如何なる人とも完全なる融合を保つを得ざるなり。優者に對しては愈、反抗の力を強うし、短才怯懦の人に對しては之を遇すること極めて酷なり。彼は口舌の間に幾多の内閣を斃し、又之を作れり。而も自ら内閣を造れる事は一回を出づることなかりしなり。實にヤクレマンソンは破壊的の偉人にして、創業的天才にはあらざるなり。

一八七一年三月二十日彼は急進派(左黨)の議員を代表し、八十人の巴里市會議を起すの議をベルサイユなる議會に提して其通過を見るに至りぬ。而も彼は自ら其議員たるを得ざりし爲め、他の區長等を誘ひ、議會と市廳との間に周旋せしむ。遂に其目的を達するを得ざりき。斯くてクレマンソンは斷乎としてモンマルトル區長の職を辭し、遂には下院に於ける其議席をも抛擲せり。

其後一八七一年七月二十三日には幸にしてクリニアンクール區より巴里市會議員に選ばれぬ。斯くて一八七六年まで常に其職を失ふことなく、其間或は市會の書記官となり、副議長となり、遂には市會議長の榮職に進めり。一八七六年には再び代議院に入りて國政を議せんとし、熱心なる運動の結果、巴里の第十八區より選出せられぬ。彼は再び立法府の議員として起てり、其偉大なる勢力と辛辣なる辯論とは、遂に急進左黨の代表者として彼の名を成さしめたり。クレマンソンは絶對の自由と正義とを愛し、共和政の運命に係はる問題の起る毎に、或は國會議場に立ち、或は新紙の上に過激なる政論を試み、此兩主義の爲めに奮闘せり。絶對的にして直接的なるは彼の標榜せる所、決して人に譲るが如き事をなさざるなり。姑く寛假して徐に時機を俟たんと欲するが如きは彼の性情の許さざる所なり。是を以て彼は屢、内閣を攻撃して、之を斃せり。最初に彼はブローグリー内閣に向つて痛撃を加へぬ。

初め一八七三年マクマオン將軍の選まれて大統領となるや、僧侶の一派は特に不平の情を以て之を迎へぬ。嚮に彼等はコムト・デ・シャムポールを推して大統領た

らしめん事を計りしが、事の成らざりしを見、法王の俗権を復して、其失敗を償はんとを期せり。當時の内閣はジュール・シモンの率ゆる所なりしが、彼は自由黨に其籍を有するを以て、マクマオンは彼の職に在る事を好まざりき。シモンは議會の意見に動かされ、内閣の意嚮を定め、斷然教會に責罰の態度を執るに至りぬ。マクマオンは之を以て内閣を斃すの口實となし、一八七七年五月十六日、半官報に於てシモンの失態を咎め、彼が内閣にありて議會の意嚮に左右せられしは、其信認を失へるものなりと宣し、彼をして遂に其大任を抛たしめたり。所謂五月捕獲事件と稱するもの是なり、茲に於てデュク・ド・プログリーは大統領マクマオンの意に基づき、非共和政の内閣を作りぬ。更にマクマオンは一八七五年に定まれる大統領の權威に依り、議會の開會を一ヶ月間延期するに至れり。議會の開かるゝや、三百六十三の共和黨員過半数は非共和主義を標榜するプログリー内閣を襲ひぬ。クレマンソーは急進共和黨の先鋒として盛に政府の非共和主義に痛撃を加へ、五月捕獲事件は此恐るべき思想の表徴なり。此主義にして佛國全土に横溢せんか、憲政共和の美何れにか之を求めん。ブルボンの暴逆は踵を周らして至らんと

叫べり。大統領は決議會の解散を命せり。斯くて總選舉の行はるゝや、政府は百方策を講じて共和黨員を斥け、之に代ふるに自黨を以てせんとするに至りぬ。然れども議員の多数は依然として共和黨の掌握する所なりき。斯くて一八七九年クレマンソーは再び急進共和黨の首領として、盛にプログリー内閣の頹廢を叫び、之をしも斃さずんば、佛國の前途寒心に堪へざるべしと、鋭利なる論法は敵をして面を背けしむるに至り、流石頑強なるプログリーも其地位に安んずる能はず、遂に其職を去り、ロシユブエー將軍之に代りて新内閣を造らんとせしが、熱心なる共和黨員の反對に依り、穩和共和黨なるデュフォー内閣を組織し、共和國の政務に當れり。同年正月マクマオン又大統領を辭し、ジュール・グレビー之に代りぬ。當時の内閣は自由共和派の領袖ワッヂングトン主宰のものなりしが、上下兩院も亦共和黨の優勢を示すに至れり。一八七九年十二月ワッヂングトン總理の職を辭し、フレシネー内閣を経て、フェリー内閣(共和黨)に至れり。

一八八〇年急進派の驍將クレマンソーは出でて同派の機關新聞たる「ラヌスチス」に其筆を執りぬ。犀利なる論旨、明快なる斷案、正義の爲め、人道の爲め、共和制の隆

運に努力せり。斯くてグレビー大統領の一代を通じ、彼は常に政治に對する批評家として、内閣に對する破壊者として其名聲を成すに至りぬ。

一八八二年正月、フレシネー内閣再び起り、フレシネー自ら首相となり、且つ外相をも兼ねたり。翌年デュクレルク其後を受けて内閣を組織し、其後フリエール内閣を経てフエリー内閣に傳へぬ。フエリーは其政見に於て非加特力教徒なれば、ゼスイット教徒の育英事業に當るを禁せんと欲せり。フエリーはガムベッタの政敵なりしに係らず、今やガムベッタの遺圖を繼ぐ者に結び、所謂オポルチニスト、臨機派なる一派を生ずるに至れり。斯くて當時の佛國政界に於ては極端王黨に對する共和派に三派を生じ、中央左黨(穩和派)、臨機派、急進派互に對立するの形勢を示したり。フエリーが二ヶ年以上の任期間に憲法の修正は徐々として行はれ、政府の共和的方針は決して變更せらるることなく、嘗つて佛國の首權者たりし家は決して共和國の大統領たるを得ずと定め、同案下院を通過して未だ上院を過ぎざるに、一八八五年三月、早くも内閣の瓦解となりぬ。之より先、一八八二年、東京に於て鑛山探掘に従事せる佛人は、圖らずも土民の襲ふ所となり、大なる損害を蒙り、司令官リ

ビエール亦其襲撃に斃れたりき。清國と佛國との和議は斯くし、破れ、清の陸軍先んじて東京に入り、佛軍良、敗衄の色あり。是に於てか國民の憤激大に昂まり、争うて政府の植民政策の失墜を詰り、特に議會に於ては極端保守黨を始め中央左黨、急進黨の如き、一團となりてフエリー内閣に肉薄し、クレマンソー自ら攻撃軍を督して政府の堅壘に突撃せり。斯くの如くしてジュール・フエリーの内閣は無慙にも其最後を遂ぐるに至りぬ。

同年ブリッソンの内閣成り、共和黨に對する反動期は漸く近づきぬ。此年に行はれたる總選挙は極端王黨の勝利に期し、議員の四割五分をして悉く王黨たらしむるに至れり。此際クレマンソーは共和急進派を代表して巴里の選挙區並にヴァールの選挙區より選まれ、彼は遂にヴァールの選挙區を擇みたり。十二月グレビー再び大統領に選まれ、翌年フレシネー立ちて第三回の内閣を組織せり。彼は元王黨なりしも、共和黨を率ゐて王黨に當り、皇族を悉く軍籍より除きぬ。クレマンソーの如きも常にフレシネーを助けて其畫策に力を致せしこと大なりき。當時フレシネーを助けて陸相の職に當れるブーランジェー將軍あり。將軍は一八五六

年を以て軍職に就き、アルゼリア、伊太利、交趾支那に於て其軍役を濟し、一八七〇年の普佛戰役には祖國の爲めに奮闘して赫々たる名聲を輝したりき。後官位頻に進みて旅團長となり、常に共和急進黨の助を借りて、オルレアン及びボナパルト王黨を攻撃せり。一八八四年にはチニスなる軍司令に拜せられ、中外の輿望頻に加はりぬ。茲に於てかクレマンソー等の如き主として將軍の共和的傾向を喜び、之を推してフレシネー内閣に陸相たらしむるに至れり。將軍も亦出處進退一にクレマンソーの忠言に聽くべきを約せり。

斯くの如くして彼は常に軍備の改革に努め、機を見て獨逸に復讐的戰爭を試みんことを欲せり。従つて佛人の將軍に對する輿望は一時に昂まり、次第にフレシネーの穩和政策を排斥するに至りぬ。クレマンソーの如きは實に此民心を指導して内閣を斃すの具に供せり。ゴブレー其後を襲ひて内閣を組織し、ブーランジェー軍務の局に當りぬ。將軍の名聲は愈々昂まりぬ。佛人は祖國の救世主の如く將軍を仰ぎぬ。共和急進黨の如きは將軍を奉じて益々其黨勢を張らん事を企てぬ。クレマンソーは將軍を以て其共和的精神を貫くの具たらしめんとせしに、其企は將

軍の虛榮心より果敢なくも失敗に歸し終んぬ。

此時に當り將軍は潜に王黨に其助を求め、王黨も亦之を奉じて共和政の顛覆を計れり。クレマンソーは之を聞いて、且つ驚き、且つ怒りぬ。是に於てか將軍の有力なる保護者は忽ちにして恐るべき仇敵となりぬ。クレマンソーは共和政の顛覆を恐れぬ。王黨の再興を恐れぬ。彼は憤然として立てり。彼は直ちに軍務省を訪ひて將軍の違約を詰り、將軍は我に計らずして王黨に款を通せり。我は最早將軍に忠言を呈するの義務なし。死力を盡して將軍の没落を計るべしと。時に急進黨の多くは尙將軍を援け、王黨と相和して之が辯護に努めぬ。民衆は何れも、勇敢なる將軍と叫びて益々愛慕の念を昂めぬ。斯くの如くして共和政は一時其危急に瀕せしむ。クレマンソーの攻撃は愈々盛に祖國の爲め、共和の敵を斥けざるべからずと叫べり。彼が熱誠は果して其効を奏し、ルーヴィー内閣を組織するに及び、遂に將軍を軍務の局より退け、之を貶してクレルモン・フエラントに司令たらしむるに至りぬ。されど將軍に對する尊敬の心は愈々加はり、王黨特にボナバルト黨の如きは英姿颯爽たる黒馬將軍を夢み、之を擁して大統領たらしめんと欲せり。

一八八七年ルーヴィー内閣を辭するに及び、グレビー大統領はクレマンソーを擧げて總理たらしめんと欲せしも、彼は敢て其請に應ぜざりき。同年大統領の姻戚ダニエル・ウィルソンに關する勳章の疑獄起りぬ。彼が其犯罪を行ふに當り、大統領の役宅に於てせるを、公にせらるゝや、大統領に對する論難極めて喧しかりき。クレマンソーは決然として此疑獄の解決に任じ、遂にグレビー大統領をして其職を抛たしむるに至りぬ。當時大統領たらんとして熱心に運動を試みたるもの、フレシネー、フロッケー、ブーランジエ等極めて多かりき。フレシネー及びフロッケーは急進派(少しく王黨の傾あり)の推す所とあり、ブーランジエは王黨の戴く所となり、將軍も亦虚榮の念に驅られ、縦にクレルモンを去りて巴里に至りぬ。クレマンソーは此危急の際に當り、熱誠を以て共和政の辯護に任じ、遂に共和黨の領袖サデー・カルノーを推して大統領の榮職に就かしめたり。カルノーは革命時代佛國の軍制を整理して共和政の爲めに努力せし大カルノーの後なり。隠然として共和制の柱石を以て任せしが、今やクレマンソー等の推戴する所となり、遂に之が重任を拜せしなり。カルノーの施政は一八八七年より一八九四年に涉り、

誠心誠意恭儉の心を以て國家の難局に當りぬ。一八八八年、下院に於ける議長選舉の際、クレマンソーはデュール・メリューと共に同一の得票を得たりしが、年長者の故を以て、メリュー遂に其職を辭せり。當時下院に於けるクレマンソーの勢力は隆々として聲望日と共に加はるの様ありき。是を以て同輩中彼の成功を嫉むもの尠からず。欺罔の策を以て彼の名譽を傷けんとし、彼を誣ふるに佛國の機密を外國に賣らんとせしを以てし、文章を偽造して其有罪を證せんと試みぬ。而も機敏なる彼は驚くべき鋭利なる眼光を以て、文書の偽物なるを摘發し、人をしてクレマンソーの清廉に感せしめたり。

後チラール及びフロッケーの内閣を過ぎ、一八九〇年フレシネーの内閣となり、ルービー尋いで其後を受けぬ。斯くて一八九二年の秋に至り、有名なるパナマ不正事件は暴露せられぬ。初めイム・ド・レセップのパナマ運河の開鑿に志すや、之が事業を援けんが爲め、新に會社の成立を見るに至り、佛國上下の民衆争うて資金の融出に應じたりき。而も一八八六年の頃より、會社の活動衰運に傾き、其支拂能力すら不完全なるに至り、會社創立の際佛人より募集せる五千萬、ステルリングの資

金さへ用途不明の中に葬り去られぬ。尋いで知名の政治家等がレセップと共謀して不正事件を惹き起すに至りしを傳へぬ。クレマンソー亦世人の嫌疑を蒙るに至りしなり。當時彼は自ら辯護して曰へり、余の贅澤は管に馬を御し射獵に趣味を有するのみ。余は未だ年少時代の負債を償ふこと能はず、如何ぞ不義の財貨を貪りて一身の偷安を求むるあらんやと。斯くして彼の汚名は遂に雪がるゝに至りしも、之が爲め其進路は一時閉塞し、一八九三年の總選舉に於ては同じ極左黨(共和急進派)の候補者なるゾルダンの爲めに一籌を輸するに至れり、クレマンソー既に逆境に立てり。而も堅忍にして不拔なる精神は彼をして益其奮闘を続けしめ、遂にドレフュー事件に乘じ、其名聲を復せしむるに至りぬ。當時歐洲諸國に於てはセム人種排斥の氣焰頗る盛に、佛國に於ても亦其表現を見るに至りぬ。一八九四年十月、カシミール・ペリエー大統領たるの時、猶太人にして陸軍大尉たるドレフューは佛國の軍事的秘密を獨逸に賣れりとの罪名の下に流刑に處せられたり。抑、ドレフュー審問の事たる、セム人種排斥の僻見に基づくものなれば、正義を唱へ、人道を濟はんとするの士は、競うて當局の失態を詰りぬ。當時の小

説家たるエミール・ゾラの如き憤慨禁せず、想を文筆に托し軍務局の不正を詰りぬ。カシミール・ペリエーは一八九五年を以て大統領の職を辭し、フェリックス・フォーレ選まれて其後を襲げり。當時クレマンソーは下院に於ける錚々たる名士なりしが、初め多數の者と同じく彼の有罪なるを信せり。而も其後ドレフューが猶太人なるより彼の同僚たる佛人が殊更に冤枉を構へたるにあらずやとの疑を起し、全力を注ぎて其探査に従事し、初めて事の真相を知るを得たり。正義を愛し人道を重んずるクレマンソーたるもの豈に黙して止むべけんや。彼は心血を注ぎて無辜の冤を注がん事に努力せり。即ち筆をヂュスチス新聞に執り、次でオロール新聞を刊行してドレフューの無罪なるを辯じ、巧に隱微を發き、重要な反證を示し、人をして此事件と僧侶社界並に陸軍部の間に横はれる秘密なる關係を知了せしめぬ。加之ゾラの如きは益、其論鋒を鋭くし、政府の牙壘に肉薄して人道の爲めに闘へり。クレマンソーは夙にゾラの文名を慕へり。彼の未だ志を得ずして巴里の一雜誌なるトラバイユに其筆を執るや、ゾラも同じく寄書家の一人として其盛名をなしつつありき。正義を重んじ自由を愛するはクレマンソーの資質なる

が如く、ゾラも亦此傾向を有したりき。今や兩者は力を併せてドレフューの辯護に努め、正義の爲めに活動せり。クレマンソーの主宰せるオロール新聞はゾラの有名なる彈劾狀即ち「ヂャッキューズ」を掲載せり。之が公開狀に對し「ヂャッキューズ」の稱あらしめたるは實にクレマンソー其人なりき。華麗なる文詞の中包むに鋭利なる論鋒を以てす。慄然として敵黨を恐れしめたる固より怪むに足らざるなり。

一八九六年、穩和共和黨なるメリューの内閣成り、轟々たる輿論を抑へてドレフュー事件の再審を拒み、尋いでエミール・ゾラを追放に處せり。是に於てかクレマンソー等一派の共和黨は愈盛に政府の方針を攻撃し、政府にして其見を改めずんば大なる波瀾を惹き起さんとするに至りぬ。ドレフュー問題は茲に一轉して政治問題とはなれり。共和左黨及び社會黨は政府をしてドレフュー問題の再審を行はしめんとし、王黨並に軍人派は飽くまで初審の結果に依るべきを唱へ、ドレフューの辯護に努むる共和黨には愛國心の認むべきなことを叫べり。共和政體と君主政體との興廢は方に此一舉に決せられんとするの様なりき。王黨は此機に乗じて共和政の顛覆を計りぬ。革命の慘禍は踵を接して至らんとす。

此時に當り幸にしてメリューの保守黨内閣終を告げ、一八九八年、ブリッソンの急進共和の内閣起れり。斯くて反亂の禍漸く姿を潜め、ドレフュー再審の議も用ひられ、之を以て通常裁判所の審議に委ぬるに至りぬ。幾もなくしてヂャッピーの保守黨内閣起り、ドレフューの再審を以てランヌなる軍法會議に附托せり。審問の結果は再び有罪を宣せられ、十年の禁錮に問はれぬ。是に於てか内外の志士は相依り、相俟つて盛に佛國政府の非行を詰り、人道の爲めに絶叫せり。一八九九年六月には共和黨なるルーベール選まれて大統領の榮職を拜し、ドレフュー問題に對しては無干渉の方針を執れり。尋いでワルデック・ルソー總理となり、共和黨の内閣を造るや、愈其再審を行ふに決し、一八九九年九月を以て再審の宣告を公表せり。此宣言に依れば特赦を以て禁錮の刑を解除せしむ、尙有罪の意義を含めり。是に於てかドレフュー並に彼の無罪を信するものは、政府に對し飽くまで論辯するを期せり。

斯くてクレマンソーの主宰せるオロール新聞はドレフューの宣言と稱すものを載するに至りぬ。共和國の政府は余の自由を還附したり。然れども名譽なき自由は余に取りて何等の價値なきなり。余は尙裁判上の過失の犠牲たるものなれば、

今後と雖宣告の正誤を追求して措かざるべし」と。同志の熱誠は之に伴へり。クレマンソー等は此憐むべき犠牲の爲めに同情の涙を惜まざりき。斯くて一九〇六年フリエール(共和黨)大統領となり、サリアン共和派の内閣を造るや、無辜の罪囚ドレフューは初めて無罪の宣言を得、青天白日を拜するの身となりぬ。ドレフューの疑獄たる前後年を閲する十二年、論難攻撃暫くも絶ゆるとなかりき。而も冤枉の雲晴れて、人道の光再び輝き始めたるは、實に志士クレマンソー等の努力與りて力ありと謂ふべきなり。斯くの如くして隆々たる彼の聲望は愈々重く、將來彼をして宰相の榮冠を戴かしむるに至りぬ。

ドレフュー事件はクレマンソーの名聲を舊に復するに於て、大なる効果を止め得たり。再審の事一度決せらるゝや、彼の勢力は舊に倍し、一九〇二年遂に選まれて元老院議員となり、忽ちにして同院中の有力者たるに至りぬ。此年ワルデック・ルン(ルーベール)大統領の時、内閣を去り、コンブ入りて其後を襲ふ。此時代に當り佛國の政界を惱ましめたる大問題は、所謂國家と宗教との分離問題なりき。ナポレオン一世が羅馬法王ピウス七世と訂結せるコンコルダートの協約は幸にして政

教兩者の調和を計るを得たりしも、第三共和政の時代に至りては教會の勢力愈々盛に、青年の教育すら其大部は僧侶の干與する所にして、恐るべき政教の衝突は踵を接して將に至らんとするの様なりき。斯くてワルデック・ルン内閣の時、是等の禍を未然に去らんが爲め、政府の教會に對する法律權を愈々確實ならしむるに至りぬ。クレマンソーも斯かる形勢を見、陰に共和國の前途に懼を懷けり。彼は願へり、宗教をして國家と分たしむるにあらずんば共和國の前途を誤るべきものは實に此宗教たらざるべからずと。言論に文章に鋭氣を鼓して政教の分離を唱へぬ。コンブ内閣(共和黨)はクレマンソー等の所論に聽き、先づ前内閣の方針に従ひ、宗教同盟を解散し、政權をして宗教權を壓せしめんと計りぬ。斯くて次第に其歩を進め、加特力教徒が政治上に其權力を行ふべき手段たる普通教育權を沒收せんを計れり。即ち地方の情況に應じ、五箇年以内に各地方教會設立の小學校を鎖すの案は議會に出でぬ。此景況を見、教會と利害を一にする君政黨は盛に反對を試みたり。而も此後教會小學の廢止案は廢止年限五箇年を十箇年に修正し、一九〇四年三月を以て議會を通過するに至りぬ。

一九〇五年一月、コンブ内閣其職を辭し、ルーヴィー之に代りて共和黨の新内閣を組織し、教會に對しては全く前内閣と同一の政策を行ふに至りぬ。此年十二月六日、政府は教會をして國家より分立せしむるの法案を出せり。同法案により(一)教會は國家より分離し、各宗の信徒は公の信仰の爲めに同盟を作るとを得べく、(二)國家は僧侶に對し俸給を支拂ふの要なきことを宣言し、翌年七月に至り大多數を以て下院を通過し元老院亦之を迎へて賛成を表せんとするに至りぬ。更に政府は軍隊の援助を借りて寺院の財産目録を調査するに従事し、寺院に對し俗權を及ぼさんとするに至りぬ。クレマンソーの畫策せし所は斯くの如くして今や漸く其所期に近づかんとす。實にや政教分離案の成功はクレマンソー等に負ふ所多きを思はずんばあらず。彼も亦政界の一偉人なるかな。

一九〇六年二月を以て大統領ルーベールの在職は方に其満期に達せんとす。是に於てか激烈なる選舉競争は早くも佛國の政治家を驅りて混亂の渦中に投せり。クレマンソー等共和黨の諸士は上院議員フリエールを推して競争場裡に立たしめんとし、君政黨即ち王政復古黨共和政體を變更せんとする一派にしてボナ

パルト黨並にブーランジエ黨等を含むはルーベールを推して中原の鹿を争はしめき。茲に於てかフリエール並にルーベールの紛争は殆ど其極度に達せり。フリエールは共和の主義を體して佛國の國事に當らんとするの士なり。ルーベールの後を襲ひて大統領たらんは獨り其派の希望たるに止らず、實に國民一般の翹望する所たりき。翻つてルーベールを見るに、彼は素と共和黨に屬し、コンブ等と其出を同じうせり。嘗つてメリュー(共和穩和黨)内閣の時大統領フリュク・ス・フォルを助けたるの功に依り、印度支那總督に任せしが、其還るに及び、國民黨に款を通じ、陰に詭計を設けてコンブ内閣を占有せん事を計りぬ。而も志達せずしてルーヴィーの内閣となりしかば、別に其針路を轉じて大統領の地位を窺ふに至りしなり。此時に當りクレマンソーは盛にルーベールを排してフリエールを擧げん事に努力せり。彼は論じて曰へり、ルーベールは王黨に款を通じて共和の親友に離れたり。實に彼は右黨僧侶派の傀儡なり。斯くの如き人をして大統領の榮職に當らしむるは、徒に共和政體の前途を危うする者なりと。ペルタンの如き又之に和して盛にルーベールを攻撃せり。斯くて一九〇六年一月十七日、佛國ベルサイユなる王宮

に國民の會議を開き、大統領の選舉を行へり。開票の結果幸にしてフリエールは多數を以て當選の榮を擔ひぬ。彼は衆人の慶賀に答へて曰へり、余は共和黨員の範たるべきルーベールの如きに襲ぐを榮とす。實にや吾人は彼の方針を守り、ブーランジエムの如き一切の反動を防止し、極力共和政府の防禦に任せざるべからずと。斯かる偉人をして佛國の元首たらしめしは、固より彼の人格の高潔に依る者ありと雖、實に亦クレマンソー等の鞠躬盡瘁其宜しきを得たるが爲めなりと謂はざるを得ず。斯くてフリエール大統領も深くクレマンソーの盡力を多とし、遂には之を擧げて總理の地位に置くに至りぬ。

三 宰相としてのクレマンソー

佛國に於ける内閣の交迭は頻々として宛然走馬燈の感あり。第三共和政府の成立後未だ僅に三十餘年、其間内閣の新陳代謝するもの四十餘回、其中最も長命なりし内閣も三年を出でず。尤も短命なる者に至つては僅に四旬に過ぎざるものあり。一九〇六年三月、共和黨のサリアン、ルーゲイに代りて内閣を組織す。斯くて

クレマンソーも臺閣に列して内務卿たるに至りぬ。暫に大統領フリエールの爲め盡瘁せし所尠からざれば、一躍して此要職に置かれたるなり。閣内に於ける彼の聲望の隆々たる固より怪むに足らざるなり。

而もサリアン病弱にして政務に當るを得ず。十月二十五日を以て辭職の決心を示すに至りぬ。彼の辭職たる毫も政治に關係する所あらざるに依り、暫に首相と首相の兼任たる法相の新任を見るべきのみ。決して内閣全部の更迭を見ることなかるべしとは一般の想像する所なりき。然れどもサリアン内閣の組織せられて以來、内閣の主力は常にクレマンソーに歸し、クレマンソーは永く他人の配下に立つべからざるの風ありき。而もクレマンソーにして總理たらんか、決して従來の閣員を以て満足すべきにあらず。是を以てサリアン職を辭し、内閣全部の改造を見るに至りしなり。斯くてフリエール大統領は新内閣の組織をクレマンソーに命じ、クレマンソーは命を奉じて内閣の構成に力を盡せり。彼は北京に公使たりしビションを擧げて外務に置き、ドレフュー事件に彼と其進退を共にせるピカール將軍を陸軍に、デゼーヌを司法に、カイヨを財務に、ブリヤンを教部に、トム

ソンを海軍に、ドーマルグを商務に、ルアウを農務に、バルトを工部に、ミリエラクロアを植民に當らしめ、新に設けたる勞働省には社會黨なるリウイヤニを置けり、クレマンソーは斯くの如くして其理想の新内閣を造りぬ。實にや彼は初めて宰相の榮冠を拜せるなり。而も上には彼と其見を一にするフリエール大統領の職にあるあり。下には彼の理想の閣員を率ゆ。彼が一大飛躍を期せんとする寔に其所なりと謂はざるを得ず。

クレマンソー總理として國務を宰するに當り、主として彼の心血を注げる問題は葡萄の栽培並に混成酒醸造に對する法案なりき。一九〇七年の頃佛國南部の葡萄栽培州に於ては葡萄の耕圃頗る増加し、従つて葡萄酒の醸造も亦盛に起れり。加ふるにアルゼリア産の葡萄多量に輸入せられしかば、葡萄並に葡萄酒の價格は大に下落し、ヘロー州の如きは、殆ど全部其地方産の酒類を齧ぎ得ざるに至りぬ。更に一方に於ては混成酒の醸造頻りに起り、之を用ふるもの日を追うて愈加はり、葡萄酒の醸造家並に葡萄栽培者は甚だしき打撃を蒙れり。斯くて彼等は殆ど日常の生計をすら營むを得ざるに至り、相率ゐて流離せんとするの形勢

を示せり。遂に此年五月に至りては、ナルボンヌ、ベジエ、ベルビニアンの方面に於て暴亂の徴見はれ、政府に對する反抗は益々大ならんとするの傾ありき。マルセラナル、アルペールは實に是等不平の暴徒を聚め、佛國南部に新共和國を峙立せん事を計りぬ。米國南北戰役の如きは踵を接して方に臻らんとし、人心恟々たるの態なりき。

首相クレマンソーは斷然として救済の策を講せり。五月二十三日に至りては混成酒醸造禁止案出されぬ。而も暴亂の勢は日を追うて益々甚しからんとし、南部諸州の各市尹は相踵いで其職を辭せんとするに至れり。斯くてクレマンソーは更に救助の令を出して民の疾苦を濟はんとし、先づアルゼリアの葡萄輸出商と商議して同地方よりの輸入に制限を加へ、六月に至りては混成酒醸造禁止の案を出して議會の協賛を得、遂に七月の初めより之を實行するに至りぬ。當時内閣の施設にして若し一步を誤りしならんか、實に國運を左右するの危運に會せしやも未だ知るべからざるなり。而もクレマンソーの經營其宜しきを得、幸にして暴亂を大ならざるに阻み得たりしは、深く佛國共和政の爲めに慶せざるを得ず。

クレマンソー内閣は列國に對して平和の主義を標榜せり。當時彼の幕下にありて親しく外務の局に當りしものをステファン・ピションとなす。ピションは嘗つてクレマンソーの主宰せる「ユスチス」に其筆を執りし事あり。同紙は急進派の機關新聞にしてピションはクレマンソーと同じく自由の精神と共和の思想とを懷抱し、飽くまで正義と人道との爲めに力を致せり。ピションの内閣に入るや、首相と同じく平和の主義を唱導し、一九〇七年六月十日を以て日本と日佛協約を結び、兩國雙互の間に領土の保全を保ち、且つ清國の領土の保全を計り、以て東洋の平和を維持するに至りぬ。更に獨佛の關係は一八七〇年、普佛戰役以降常に解くべからざるの嫌隙を結び、エルザス、ロートリンゲンの方面には戰雲漠々として常に散せざるものあり。加ふるにモロッコ問題の起りし以來、兩國の紛争は愈甚だしきに至りぬ。幸にしてアルゼンチラスの和議は平和の間に時局の發展を見るを得たり。而も兩國間に蟠れる禍亂の淵源は決して根柢より一洗せられたるにあらずりき。クレマンソー内閣にして其如何なる政策に出づべきやは列國の注視して忘らざる所なりき。而もクレマンソーの就職以來、兩國の感情は日を重ぬる

に従ひて愈和ぎ來り、新任在佛國公使なるジュール・カンボンは獨逸皇帝ウイルヘルム二世の盛大なる歡迎を受け、カンボン公使は親しくビュロー親王をノルドネールに訪問するに至れり。クレマンソー内閣は亦露國との交情を失はざるに努め、二國同盟の持続に力を注ぎぬ。

斯くの如く彼の内閣は平和主義を標榜して各國争衝の巷に立ち、列國をして其政策の優秀なるを認めしめ、獨逸の新聞をして、クレマンソーは英國に對し親善なるが如く獨逸に對し反對の政策を行へるにあらず。斯くの如きの傾向は氏の個人的性格に於て之を認むべきも、内閣總理としての彼は、飽くまで獨逸に親善なるを期せり。と謂はしむるに至りぬ。

クレマンソーは共和左黨の偉人なり。彼が文豪ゾラと共に無辜の罪囚ドレフューを辯ずるや、ゾラは不幸にして竄流の中に死したりしも、クレマンソーの意氣は昂然として衝天の勢を示せり。之が爲め、ドレフューの冤罪は證せられ、上下を振撼せる大疑獄も茲に其終を告ぐるに至りぬ。之よりして君政黨の勢地に墜ち、共和黨の勢威大に昂り、其領袖クレマンソーをして遂に宰相の桂冠を戴かしむるに

至れり。今やクレマンソー自ら國事を宰するに當り、同志の偉人ゾラの靈を慰むるに至りしもの偶然にあらざるなり。

一九〇八年六月五日、ゾラの遺骸を改葬してパンテオンの堂内に配祀するに至りぬ。パンテオンの圓形堂は巴里市スフロア街の盡くる所に位し、ルイ十五世の時名匠スフロアに命じ設計せしめたるもの、一七九〇年を以て成れり。當時の革命政府は之を以て國家に偉功ある人の合祀堂となせり。屋上には、偉人に感謝する國民よりの文字を刻じ、ルソー、ヴェルテールも此中に祀られ、ヴォクトル、ユーゴーの英靈も亦此に安んぜらる。而も此中に合祀せられたる者は何れも舊教徒のみに限られたり。ゾラの如き猶太教の文豪は尙公然其中に加へらるべきにあらざりき。而もクレマンソー内閣起れるの日、舊時の親友にして一代の文豪たるゾラの英靈を冤罪の中に葬らしむるに堪へざりき。ゾラ改葬の議起れる固より其所なりと謂ふべきなり。

此日、大統領ファリエールを始め朝野の名士競うて場に聚り、數萬の學生はパンテオンの周圍に人の堵を築き、猶太教徒を罵るものゾラの萬歳を叫ぶもの轟々と

して場の内外を動がせり。式の漸く終らんとする比ひ、場に列せるドレフェーは狂漢の狙撃する所となりしも、幸にして其命を全うするを得たり。今や此盛儀を行ふに至りしもの、寔にクレマンソー内閣の一美舉たるに背かず。彼の自ら唱導する正義と自由とを完全に表白して餘蘊なきものと謂ふべし。

四 クレマンソー内閣の没落

一九〇六年、クレマンソー内閣の成れるより、星霜茲に三年、一九〇九年七月二十日を以て、俄然その崩壊を見るに至りぬ。實にこれ列國政治家の見て以て意外とせし所、人をして轉た佛國政界の變轉究まりなきに驚かしめたり。同内閣の没落せるはモロッコ問題の終局に至大の關連を有するが如し。今同内閣瓦解の真相を叙するに先だち少しく同問題の大勢を釋ねんとす。

モロッコ問題は近世に於ける一大政變なり。一九〇四年四月、英佛の間に英佛協約なるもの成り、英佛の二國は互に埃及並にモロッコに於ける優先權を認め、佛國はモロッコ領土の保全とサルタンの主權とを承認し、同地がアルゼリアに隣接する

の關係より、嘗に同地に於ける特別なる地位を主張し、且つ自己の指導の下にモロッコに於ける秩序恢復即ち平和的侵入を企つべきを揚言し、モロッコに於ける經濟的利權に關しては各國の平等に干與する所なるを公言せり。尋いで十月の初に至り、佛國と西班牙の間に西佛の協約成り、爾來西班牙はモロッコ北海岸の開拓權を有し、西班牙が前年モロッコより奪ひて更に還附せる土地をば自己の勢力範圍に屬せしむべきを公認せられ、佛國は英佛協約により獲得せる同一の權利を得たり。

斯くて佛國は英國及び西班牙と協定して其が平和的侵入を企てたりしも、効果の見るべきなかりき。一九〇四年五月、モロッコ、タンジニアにありし北米人ハーディーカリス並に其繼子なる英人ザアリーは土賊に襲はれて生擒せられぬ。是に於て英國並に合衆國は直ちに戰艦を遣はしてその罪を問はんとし、佛蘭西も亦モロッコに特別の地位を有するより、宰相コンブ、外相デルカッセ主として同問題に干渉し、モロッコ政府と英國、合衆國政府の間に斡旋せり。而も土賊の横暴は日を追うて益甚しく、タイムス通信員をして「歐洲諸政府は歐洲幾千の生靈を擧げ、一朝事

あらば掠奪を敢てすべき五百の無類なるムーア兵に委するに至れり」と言はしめたり。其後佛國の使節はモロッコの首府に赴き、同國の安寧を計らむ爲め、軍事、行政、財政の各方面に涉り革新を行ふべきを勧めたるも、王は言を左右に托して應せざりき。

之より先、英佛間に協約の成立するや、獨逸は毫も此事に與るを得ず。唯其成立後に至り、佛國外務の當局者より口頭もて其内容を傳へられたり。當時獨逸のビロ一伯はモロッコに於ける獨逸の利益は全然經濟的にして他國に侵害せらるゝの憂なしと公言し、英佛の協約を默認するが如くなりしも、其實英佛兩國が獨逸を度外視したりしを深く恨み、潛に報復の機會を俟てり。斯くて佛國がモロッコの内政改善を迫るに及び、獨逸は俄に外交的の干渉を試み、ウイヘルム皇帝のタンジニア訪問となるに至りぬ。一九〇五年三月二十三日、獨逸皇帝ウイヘルム二世は親しくブレメンを發し、タグスに至り、葡萄牙皇帝と會見し、居ること四日にして巡遊の目的地たるタンジニアに向ひぬ。帝のタンジニアに至るや、其歡迎は盛大を極め、帝は各國の外交官に謁を賜ひ、モロッコ國王の代表者と歡談し、モロッコの

現状維持門戸開放が獨逸の政策たるを示し、今日は未だ歐風の改革をなすの機にあらずと切言し、陰に佛國の干渉を悦ばざる國王を煽動するに至りぬ。是に於て英國及び佛國の民心は大に激昂し、兩國は互に相近づきて一致の行動を執らんとするに至りぬ。當時の佛國內閣はルーヴィーの率ゆる所にして、外相デルカッセ主として外交の衝に當れり。デルカッセは獨逸の横暴を制するが爲めには戦も尙辭せざるの決意を示せり。實に當時佛國の軍備は海陸共に全からず、之を提げて獨逸と争はんは極めて寒心すべきものありしなり。而もデルカッセは飽くまで強硬の態度に出でんとを期せり。獨逸の新聞紙は筆を揃へてデルカッセに烈しき攻撃を加へ、在佛獨逸公使等も激烈なる論議を以てデルカッセの失態を詰り、彼にして去らすんば戦方に開けんとするの態なりき。

ルーヴィー内閣は断然としてデルカッセを退くるに決し、彼が英佛協商の旨を獨逸に通告せざりしを咎め、之を閣外に退け、ルーヴィー代りて外相を兼ねるに至りぬ。ルーヴィー外相はデルカッセの對獨政策を一變じ、モロッコの保護權獲得の希望を捨て、獨逸と妥協するに意ありき。六月に至り、佛國及び獨逸の關係は益々融和に傾き

來り、別に國際會議を開いて事局の解決を計らんとするに至りぬ。斯くて一九〇六年一月十六日より有名なるアルゼンチラスの會議は開かれたり。地は西班牙の南端にあり。會するもの、英、佛、獨を始め、埃、匈、西、北米合衆國の使臣にして未曾有の盛況を呈せり。先づ密輸入禁止勳行案を議定し、尋いで税法改正案に移り、警察權の問題に至りて行惱みの形勢を示せり。佛國は西班牙と共にモロッコの警察權を掌握せんと欲し、獨逸は之を承認するの色なく、モロッコの警察事務は必ず之を列國の共同事業となさざるべからざるを主張せり。討議の結果、遂に佛國及び西班牙の優先權を認むるに至りぬ。更に國際銀行設立の件に就ては獨逸其主張を許され、銀行管督官はモロッコ國王之を任命し、官吏の資格を與ふる事に定め、佛國の同意を得たり。斯くて此會合は四月六日を以て終を告げぬ。此會合たるや、佛國先づ屈して外相デルカッセを斥け、以て協約を遂ぐるに至りしのも、其會の議定する所を見るに、警察權問題の如き佛國の主張を貫くを得たりしも、國際銀行問題に至つては、獨逸に一籌を輸するに至れり。且つ獨逸は直接自國に利益なき問題にあつても列國より度外視せらるべからざるを證せり。此會議たる決して佛國に

赫々たる光榮のみを持來せしにはあらず。其佛國をして此協約をなすに至らしめしは、實に軍備の完からざりしに因る。佛國は嘗つて海軍に於て英國に次ぎ世界海軍國の第二位にありき。而も近年獨逸の海軍勃興し來り北米合衆國、日本の海軍も亦其優勢を示すに至りしかば、爰にフランスの海軍は第二位より第五位に落ちたり。これ實に一九〇八年クレマンソー内閣の時、佛國議會にて海軍卿トムソンの容認したる所なりき。又近き過去に於て佛國の戰艦ダンドン號の進水式が不結果に終り、其船體僅に四十四米突を滑行せる後停立するに至れり。更に佛國の新聞紙がクルゾーシナイデル會社より同國海軍省に納附せる兵器の不完全なるを暴露せるより、同會社の匈牙利に於ける威信は著しく失墜せり。斯くて佛國議會は今春以來別に委員會を設け、主として海軍制の状態を調査するに至り、海軍部内(クレマンソー内閣)の浪費、懈怠等の醜態は續々として暴露せらるゝに至りぬ。六月二十四日の海軍調査委員の報告は、其腐敗の事實を暴露して餘す所なかりき。試に其一二を列舉せん。(一)佛國は過去十年間十二億圓の製艦費を投じたり。(二)目下製造中の軍艦以外一として新造の計畫あるなし。(三)佛國の

海軍は比較的僅少の經費を抛ちたる獨逸海軍の下位に在り。(四)製造中の戰艦艦は期限を過ぐるも竣工せず。(五)假令竣工するも其効を成さざるものあり。(六)新戰艦の武裝は數年の後にあらざれば完成せず。(七)改良砲を裝置せる等の軍艦に依然朽敗砲を据る附けたり。(八)彈藥は所要の數に満たず。(九)多量の無効彈藥庫中に堆積せり。(十)新戰艦を收容すべき船渠は植民地に在るのみにて本國に存せず。これ實に調査委員の報導せし所のものなりき。

一九〇九年七月二十日、佛國の代議院は此調査委員の報告に對する討議會を開けり。劈頭海軍卿ビカールは演壇に顯はれ、該報告に基づき、クレマンソー内閣の爲め充分の辯護を試み、海軍行政に不整理のものあるは全然之を否定すべきにあらざるも、俗間の批評は事の眞想を得たるものにあらずと。滿場拍手を以て之を迎へぬ。既に於て前外相デルカッセ(極左黨分離派領袖)は悠然として壇上に立ち、佛國の海軍の不充分なるを述べ、海軍現時の失墜を痛論し、論鋒一轉して首相クレマンソーを衝けり。クレマンソー氏は意志薄弱にして確固たる信念に乏し。海軍の失墜も彼に負ふ所尠しとせず。議院は宜しく其責任としてクレマンソー内

閣の信認を問はざるを得ずと。急電一閃して政界の雄クレマンソーを粉砕せんとす。首相(クレマンソー)は突如として壇に立てり。デルカッセ氏は何に基づきて是等の暴言を敢てするか。佛國をしてアルゼンチラスの屈辱に立たしめたるはデルカッセ氏自らにあらずや。氏は國防の充實に顧みずして徒に強硬の態度に出で、爲めに外交の失態を醸せり。如何ぞ國防準備の不完全に對し、現下の政府を漫罵するの權あらんやと。舌端火を發し、兩虎將に相搏たんとす。デルカッセは再び立てり、「現下の政策を論ずるに當り、余が在職當時の外交策を非難せんとするは暴も亦極まれり。余は英國と協約を結び、西班牙と條約を訂し、斯くて國際關係の融和を保てり。此盡力は現佛國代議院も前佛國代議院も親しく認めたる所なり。佛國を以て屈辱の地位に立たしめたりとは、果して何等の理由に基づけるや。翻つて卿等のなす所を見よ、卿等は海軍現下の不整理に對し決して其責任を免るること能はざるなり。卿は嘗つて海軍調査委員會に總裁たりき。卿は過去二十五年間に於て冷酷なる痛撃を當時の政府に試みたり。斯くの如き性格より見るも卿は海軍上の知識に於て決して缺く所あるを見ざるなり。而も卿は調査委員會の總裁と

して其責任を盡さざる所甚だ多し。議院は將に鼓を鳴らしてクレマンソー内閣の信認を問はざるを得ずと。一語は一語より鋭く首相に向つて肉薄せり。クレマンソーは深く心に決する所あるが如く、泰然として一矢を酬いぬ。デルカッセ氏は余の質問に答ふるに甚しく惱めるが如し。余の質問せしは他にあらず。往年卿は内閣の一員として大なる屈辱を佛國に蒙らしめたり。卿は危くも佛國を驅りて戦亂の渦中に投せんと欲せり。當時佛國の軍備が海陸共に不完全なりしは海陸兩相の公言せし所なりき。卿は海陸兩軍の不備なるをも顧みず、之を提げて、徒に頑強の態度を執り、遂に佛國をしてアルゼンチラス會議に賛するの止むなきに至らしめぬ。實にや卿は祖國を辱しめたり。余は佛國を辱めずと。暴に酬ゆるに暴を以てせんとする首相の此態度は著しく聽衆の同情を失へり。議院の大勢は滔々としてデルカッセの言ふ所に與せんとす。突如デュロト氏は壇に上り、政府の信認を問ふの議を出し、百七十六に對する二百十二の多數を以て政府の不信認案を可決せり。

秋風落葉としてクレマンソー内閣は此に終を告げぬ。彼及び閣僚の一同は袂を

聯ねて去れり。クレマンソーは即時大統領に謁して當日敗戦の顛末を告げ、特に其辭職を請へり。フリエール大統領は之を聽いて遺憾止み難き態なりしが、事茲に至りては亦如何ともするなし。即ち後繼内閣の成るまで政治を見るべきを囑し、クレマンソーも之を諾して別を告げぬ。

海軍行政の腐敗に對してクレマンソー内閣固より其責を分たざるべからず。而も多年積積せる情弊が事をして茲に至らしめたる者なれば、強ち同内閣をのみ咎むべきにあらざるなり。デルカッセ如何に過激の論句を用ひて政海に波瀾を起さん計るも、議院の大勢は依然として内閣に同情を表せしなるべし。而もクレマンソーは憤懣の餘事の先後を顧るに遑あらず。海軍問題の境域を脱して外交問題に入らんこと、暴に酬ゆるに暴を以てせしかば、爲めに議員の同情を失ひ、遂に其内閣の瓦解を促すに至りしなり。議政壇場の雄將にして内閣破壊の妙手たりしクレマンソーは、斯くの如くして大勢の趨く所を知るに由なく、敵に貸すに銳利なる武器を以てし、敢なくも無慚の最後を遂ぐるに至りしは惜みても尙餘ありと謂ふべし。

第三共和政の下に最も長壽を保ちたりしクレマンソー内閣は、斯くの如くして其終を告げぬ。自由と正義とを以て其主義たらしめし極左黨内閣は斯くの如くして滅びぬ。クレマンソーの爲す所や、往々絶對てふ主義を以て其旗幟となし、斷じて退讓を許さざりき。姑らく忍んで徐に時機を俟つが如きは其能くする所にあらざるなり。實にやクレマンソーは其主義によりて奮闘し、其主義の爲めに斃れたるなり。何ぞ必ずしも事の成敗を見て彼の人物を評すべけんや。

第十一章 デルカッセ

一 ガムベッタの門下

テオフィル・デルカッセ(Theophile Delcasse)は一八五二年三月一日を以て西班牙の境なる南佛のアリエジ縣に生れぬ。其家は此地の舊家なり。デルカッセの名は實に土語「擲」を意味すと云ふ。彼毎年議會閉會の後に於て夫人を携へて郷里に歸り、其美しき土言を繰りて清遊するもの日あり。其質素と温雅とは夫人と並び郷人の歡迎する所となる。其郷里に於ける名望の噴々たるは選舉に際し勞せずして郷人一致の推舉する所となるを以て之を知るべし。

普佛戰役後デルカッセは恰も其學業を了へけるも、貧にして家を成すこと能はざりければ、彼は遂に麵麩を得るの術を求めざるを得ざるに迫り、一時職を大學に求めんと欲して哲學の研鑽に其身を委ねたりしが、幾もなくして去つて巴里に赴けり。蓋し天賦の材能を有し、功名の念沸くが如き地方有爲の青年に向つては巴里は實に青雲の地たればなり。况や七〇年の屈辱はデルカッセに與ふるに甚深

の鼓勵を以てしたり。彼當時心竊に誓ふらく、冀くは自家の凡ゆる敵愾心と凡ゆる精力とを傾注して祖國の復興に捧獻せん。彼は熱心に外交界の事情を研究し、先づ此重要な諸問題に關する自家の意見を發表せんことを希望したり。即ち一の新聞紙、就中信用あり塾實なる一の新聞紙を得ん事を欲したり。ガムベッタの秘書サンドクックは彼を知れり。因りて介して之を此偉人に面せしむ。此時に當りガムベッタは「レビニブリック・ランセー」新聞の主宰者たり。ルー・ヅラ・シャウセー・ダンタンなる己が寓に之が編輯局を設けぬ。無名の弱々しき一田舎青年は斯くの如くにして一日此の佛國の愛國心と希望とを一身に體せる名士の居を叩きぬ。ガムベッタは其特有なる愛嬌を以て彼を迎へたり。恐らくは此面會は向後幾十年の秋を過ぎぬとも、永くデルカッセの腦裏に銘して忘るること能はざるものたるべし。ガムベッタは其手を伸べつと謂へらく、我友よ、足下の求むる所何事ぞと。デルカッセは感激して殆ど手を握るを忘れ、纒に二三の喞れる語句に初對面の挨拶を了へたるが、既にして主人の温乎たる言動に勵まされて、彼は眞摯の様を面に現はしつと明かに己が懷抱せる希望を開陳したり。師弟の關係は此處に結ばれぬ。デ

ルカッセは斯くの如くにしてガムベッタの門に入れり。

二 「レビニブリック・フランセー」の記者

「レビニブリック・フランセー」は發行紙數多からず、極めて僅少の讀者を有するのみなりき。然れども其ガムベッタの機關たる故に非常なる勢力を内外に有し、其記載する一言一句殆ど内外人の注目する所たらざるはなき程なりき。其記者中には青年あり。又二三の老人あり。皆有爲知名の士人にして能くガムベッタの事業を輔翼したり。即ち編輯主任のシャルメル・ラクルの如き、議會方面擔任のスピュレル・アラインタルヂ及びバイサム・ペールの如き、學問欄擔任のパウル・ペールの如き、將た植民問題擔任のトムソンの如き皆然り。而して事務の方面に於てはシューレル・ケストネル専ら之を主宰して内顧の患なからしめたり。當時ワルデック・ルーソーの如き記者の列にはあらざりしかど、又時を期して來り會し、以て直接間接に社務に努力したりき。凡そ此等の社員は毎夕必ず集會して各般の問題を論議研究し、外にありてはビス・マークが嫉心を拒ぎ、内にありては諸種の反動的陰謀を伐ち滅

ばさざるべからざりき。されば此時に當りて目を此ガムベッタの紙上に注ぐ者は、一目して共和政府現在の位地の何れにあるやを了知する事を得たりしなり。筆才あるデルカッセは其一種の觀察力を以て凡ゆる方面に涉りて日に月に其筆鋒を揮ひ、讀者をして其文を読むを樂ましめけるが、されど就中彼の最も得意とせし事は外交問題に關する事項にてありき。彼は熱心に斯界の事情を研究して傳記や地圖や、將た専門の著述に至るまで博涉多讀、忽ちにして歐洲の外交通となることを得き、是に於てか彼の勢力は漸くにして益加はり、彼は此方面に於ける堂々たる一専門家を以て目せらるゝに至りぬ。

ガムベッタ逝きて後、即ち一八八三年一月九日の紙上に於て「レビニブリック・フランセー」は一篇の宣言を公にしたり。これ此團體が有する政見と其方針とを明かにしたるもの、其何人の筆する所たるやを知ることは能はず。されど思ふにこれデルカッセ彼自らの草する所にあらずとするも、彼が其後に於ける行動を以てすれば、其衷心の思想の全く之を措きて他にあらざるを推知するに難からず。蓋し當時の「フランセー」社たる、在來の傳習に従ひて一社一團の主義を執り、各欄盡く匿名を

以て之を書きたり。故に個人としての記者の名譽の爲めに幾分の減殺せられたるありしを免るゝこと能はざるも團體としての合同的勢力は却つて益増長して雄然言論界に牛耳を握るを得るには至りしなり。且當時の宣言文に曰く「吾人の政略は極めて簡單なり。一言に之を盡す。曰く祖國曰く佛國と是のみ。吾人は最早内虚弱にして外虚榮を張らんとするが如き空望に走ること能はず。輕舉暴動、これ實に吾人の最も戒心せざるべからざる所なり。吾人は佛蘭西人なり。何時如何なる處たるを問はず。總ての機會に於て吾人は先づ自ら問はざるべからず。我佛蘭西の利害の何れにあるかと。然れども佛國は共和國なり。而して所謂革命あり。吾人自家も亦革命なり。自由と云ひ、進歩と云ひ、改革と云ふ、一として吾人を驚かしむるに足るものなし。唯要は其眞の改革、眞の進歩たらんことを期するにあるのみ。ガムベッタ教へて云はずや、實際的政治を作れ、理論的哲學に過たるゝ勿れど。政治に於ては苟くも實現せらるべからざる以上、如何に崇高美妙の理想と雖、何等の價値だもなし。如何に改革の法律の威嚴を以て行はるゝに至るとも輿論の味方を得ざる限りは永續し得べきものにあらず。經驗は吾人に示すなり。國民

にして一旦退歩に向はんか、其勞苦して得たる十年の進歩も曾一朝にして忽ち之を失ふに至るべきことを。故に吾人は須く徐ろに進行して我民主政治の勝利を遠き將來に期せざるべからず云々。

此後デルカッセは往々にして署名して諸種の問題を論じ、殊に三國同盟に注意して以爲らく、伊太利を加へて成れる此三國同盟は其根據決して爾く堅固なるものにあらず。假令分裂に了らすとするも、其早晚弛離するに至るべきは疑ふべからず。伊太利に於ける總選舉の後、即ち一八八六年六月に於て記して曰く「戰勝の獨逸をして伊太利の政界と結合するに至らしめたる其幻は、今や既に失せたり」と。年の九月に於て又曰く「伊太利にして獨行するの望あらんか、吾人は同情を以て彼の進歩を導き得べし。彼にして又進んで吾人と同盟するを欲せんか、吾人は彼の努力の吾人正當の希望と何處に於ても更に背馳することなきを發見せざる能はず」と。斯くて彼は三國同盟に對する平衡的權力の必要なるを認めつゝ一八八七年三月二十一日又述べて曰く「三國同盟は其實質上平和的なりと云ふ。然れども此同盟の外に戰爭に向つて猶一の聯合を組織するの必要ありとせば、

平和の友たる何れの邦か果して進んで其任に當り得べきかと。後果して露佛同盟成る。

三 代議士 植民大臣 外務大臣

一八八九年、彼初めて選ばれて代議院に出席し、外交に關する演説をなして曰く、三國同盟の勢力に對抗して新に露佛兩國の連結を組成するは我國今世の一大急務なりと。彼が南佛蘭西流の土音と其人と爲りの輕快なるとは忽ちにして人の愛好する所となり、其外交通の名は又普く世に知らる。是に於て一八九三年一月一日、リボーに拔擢せられて同内閣の植民次官となり、同年四月五日、デュビュイの内閣を組織するや、彼は依然として留りて同職にあり。翌一八九四年五月三十日を以て植民大臣に進めり。上ウバンデ知事リオタールの計畫せる冒險隊とマルシャン大尉の遠征軍との派遣せられたるは實に彼が此局に當れるの時にあり。内閣の瓦解するに及びて彼は又還つてブールボン宮に代議士の議席を占め、以て一八九八年に至りたるが、此年六月メリース内閣倒れてアンリ・ブリッソンの内

閣議長の職を負ふに會して、彼又起されて朝に入りぬ。當時彼は内閣に入るを辭し、外相の任の如きは寧ろ重きに過ぐとなし、若し止むを得ずむば、陸軍の何れかに倚らんと欲したりしが、ブリッソンは百方彼に懇請して強ひて彼を推して此至重至難の椅子に就かしめたり。

四 ファシヨダ事件

彼の就職と同時に驚くべき事變は猛然平和の世界を打ち破りて起り來れり。勇敢なる大尉マルシャンは一隊の佛兵を率ゐて遠く三色旗をファシヨダに樹てたるなり。而して佛人の此遠征隊成功の飛電に接して狂喜措く所を知らざりしに際して、英國は俄然抗議を唱へて頻に兵備を修め、佛國に脅すに戰を以てしたるなり。此時に當つて佛國の國內はドレフェー事件の爲めに紛々たる鬭争の修羅場となり、狹隘なる黨派的感情は正に極點に達し、世を擧げて鬱結せる憤怒の吐口を外に求めん事を欲せざるはあらず。佛國の政府たるもの果して如何の態度を執つて其間に處すべきか。内外の二大患は今や彼の前後に迫り來れり。即ち之を一方

にしては英國は汲々として戦争の準備をなし、佛國の海軍を一撃の下に挫碎して獨り自ら覇を世界の海上に唱へんとするにあり。戰機正に一髮の間に薄る。之をして爆發せしむる一點の火氣、茲に足る。單一なる激語、曖昧なる一片の電文、將た當局の不熟練以て和好を破るに於て餘あり。而して又他の一方に於ては佛國が英に求むる所を容れたる曉に於て、國民黨の反抗的運動の必ずや其激甚なるを致して、當に閣僚のみならず、牽いて大統領の運命を危うせしめ得べきあり。凡そ斯かる難境を脱せんとする必ずや非凡の手腕と非常の決心とに須つことなき能はず。思ふに當時デルカッセの憂苦を増したるのは獨り此等の事情のみならず、實に佛國が不幸にして未だ斯かる突遽の事變に應ずる十分の準備なかりしにあり。其國防の多くの點に於て不満足なりしにあり。ビゼルトの工事未だ成るを告げず。其一旦平和の破るゝに際し英人は殆ど及に軋らずして之を占領し得たりしならむ。假令佛國は一切を放擲して最後の瞬間に至るまで能く其戰鬪を持續し得たりしとするも、其結果の決して良好なるべきを必ずする能はず。何れの方面よりして之を観るも、其事情の頗る思はしからざるは疑を容るべからざる

ものありしなり。此多難の責を雙肩に擔へるデルカッセは社稷の將來を思念して輾轉反側、夜睡る能はざるもの屢、十二月に及びて駐佛英大使サー・エドワード・モンソンは彼と最後の談判を試みたり。世或は傳へ云ふ。當時モンソン大使は最後の通牒を齎したりき。吾人は其果して事實なりや否やを知るを能はず。雖兎に角に彼が當時に於ける態度の傲岸にして頗る和解し難きが如きものありしに反して、デルカッセは却つて周密鄭重の語を以て之を迎へて曰く、余は閣下が戦争を欲すと云ふが如きを信すること能はず。閣下の動もすれば之を口にせんとする、抑、余が常に之を避けんことを努むるが故に起るにはあらざるか。大使語なし。デルカッセ言を次ぎて曰く、吾人は之によりて果して奈何の利益をか收め得べき。戰若し勝たば吾人は吾人の植民地を廣むるを得るならむ。されど吾人のなすべき最近の義務は今、寧ろ其領地を利用し、之を防禦するに存せずや。閣下の國と雖、吾人の國と雖、互に其力を弱うし、互に貧するに於て更に寸毫の利益だもなきは閣下の明察せらるゝ所たるべし。吾人は元より公憤を發露するに於て萬已むを得ずむば戰を交ふるに至るを避くるものにあらず。されど之に向つて

は其責の歸する所は閣下にあるを承知せられよ」と。モンソン將に其間に於て一語を交へんとす。デルカッセ之を遮りて陳ぶるやう閣下よ、決して復た輕々しく取り返すべからざるが如きの語を發する勿れ。願はくは深く意を是に致せよ」と。大使は默せり而して此瞬間に於て危機は正に過ぎ去りたるなり。彼等は交和談し、調一したり。半ば抜き出されたる劍は今や又鞘に藏められぬ。デルカッセは是によりて英國及び本國新聞紙が非難の衝に立ちぬ。されど彼は能く是に忍び來りたり。何となれば彼の良心は毫も彼を尤めざればなり。彼は自己の義務を盡すに於て更に間然する所なしと信じたればなり。十一月四日、内閣交迭後始めて開會せし佛國下院議場に於てフッシュ事件に關する質問ありしが、デルカッセは今方に最も緊急の時期に際するを理由として之が答辯の延期を請ひ、多數の賛成を得たり。一八九九年一月に至りて彼は漸くにして口を開いて衝突の由來を語り、マルシャン大尉遠征の起原及び性質に就て其抑、如何なる事情の下に形成せられ、何れの日に於て發せられたりしかを明かにし、而して此事實の素とサー・エドワード・グレーが宣言の以前に於て既に起りたりし事にして、決して英國の感情を害す

る所以のものあるべからざるを示し、尙又若し當時佛國にして此不確實なるフッシュの權利を主張せんとする場合に於ては、果して如何なる難境を経ざるべからざりしかを詳述し、由つて結論して曰く、余にして若し佛國を代表し、其名に於て行動するの價值なかりしとせば、輕々しくも此名譽ある位に即きたる余は實に大なる罪人たらむ。嗚呼されど衆人の余を否認し、余を貶黜する、余に於て何かあらむ。余の良心、余が愛國心は毫も余を欺かざればなり。余は二大國民間に蟠りたる怨惡の情を排するに努めたり。余は東洋に於て我佛國が數百年來行使し來りたる其權利を主張したり。余は正當にクレイト問題を解決したり。余は伊太利との經濟的近邇を勉め、佛伊間の關係を恢復するに苦心したり。余は愛國正大の政略により佛國をして其四邊に信用及び尊敬を博せしめんとしたり。されど余が爲せし最も高貴なる事業は寧ろ世界の不幸を醸し得べき衝突に屈服したりと云ふの一事にあり。之を要するに、余の求めんと欲する所のものは余が佛國の外交政務を指導するに於て如何に造次顛沛にも曾つて自家の責任ある地位を度外視するなかりしかを公示せんことに外ならず」と。デルカッセは之によりて殆

ご自家の功業を指して事の已む能はざるものありしを明かにしけるが、此毫も蔽ふ所なき熱實の言辭は却つて大喝采を以て彼を迎へしめたり。

五 一八九九年に於ける彼の宣言

是より先、一八九八年十月、プリソン内閣はドレフネー事件の爲めに瓦解してシャール・デュビニイ新内閣を組織したるが、デルカッセは之に踏み留りて亦外政を指導せり。然るにデュビニイ内閣も愈、ドレフネー事件を再審するの策を決せしより、不人望となり、未だ一年ならざるに、翌年六月總辭職し、ワルデック・ルソー新に内閣を組織するに及びてもデルカッセ一人の位地のみは依然として更なる所なかりき。

一八九九年十一月、デルカッセは、佛國下院が外務省所管の豫算を討論するに當りて現内閣の執る所の外交方針を演説せり。演説の一半は極東に於ける佛國の政略に關し、他の一半はトランスヴァール戦争に對する佛國の地位を説くものなり。蓋しドレフネー事件の落着以來、復古黨及びブートランジエー黨の新聞紙の内閣を倒す爲め、頻にデルカッセの外交の柔弱なるを非難し、其ファシヨダに屈し、獨逸に詔ひ、支

那に許し、トランスヴァール事件に對して冷淡なるを責むるに答へたり。曰く「前略」支那に關しては吾人は殊更快濶の精神を以て言論することを得るものなり、何となれば吾人は敏速精勵を以て吾人の權利を主張し、廣州灣に於ける吾人の權利を認識せしむると同時に、他の一方に於て佛蘭西人の如く支那海岸に往來する外國人に關して毎度起る事件(外國人出殺事件)を都合よく結局せしむることを得たればなり。既往十五間に流行し、今尙世界の問題たるものは亞弗利加たると均しく支那も亦今日の時事問題なり。世人は支那にも開發すべき鑛山ありて而も其採掘は亞弗利加鑛山よりも容易にして且つ速に利益を生すべきものと信せり。狂熱は日清戦争より生まれり。獨逸は膠州灣を占領したり。間もなく英國は威海衛に手を下し、露國は旅順口に入れり。是に於て吾人も廣州灣に眼を縦ち、而して殆ど未だ其地勢を熟知せざる前に既に之を割取したり。又他の諸國も此熱心に倣はむとするものゝ如し。唯欲する所は他人に先を越されざるに在り。外國をして其爲さむと欲する所を爲さずに至らしめたる理由は敢て之を是非するの必要なし。他國の行爲にして苟くも佛蘭西の利益を害せず、佛蘭西の權利

を侵さざる以上は固より其間に猜疑を挟むの要あらず。例へば獨逸の所爲の如き誠に明白なる利益に原因するものなり。諸君も知る如く、獨逸の通商は就中極東に於て非常に發達せり。而して此發達に伴ひ益、海上設備の必要を感ずること急なるは自然の勢なり。何となれば獨逸の商船及び之を保護する軍艦はハンブルグを出づる上は薪炭補給及び修繕の爲めに外國の恩恵に依頼せざるべからざればなり。故に此の遑然たる商路の極端に於て港を得るは獨逸通商の發達の爲め止むを得ざるの必要なり。通商の航路に根據地を設くる點に於て、吾人は久しき前より此に注意したる英吉利人に或は一籌を輸すべきも、尙吾人は東洋及び極東に至るの路に於てビゼルト、オボック、サイゴンを有し、唯之を完成し、又は改良せば、以て我國船舶の修繕若くは薪炭補給に便すべきなり。但し尙此の上に支那海岸に一港を得るは不用にあらず。然れども吾人は果して吾人の明白なる利益を伸張するに最も善く適當したる所を選みたるや否、疑ふべきものなり。余は屢、世人が北京に於ける我國公使の行動に對し所要に應じて後援をなす爲め北直隸灣に海軍力を常設するの必要ありと説くを聞けり。果して此爲めにせむと

欲せば、吾人は廣州灣に據らすして英吉利及び獨逸の爲せる如く更に北に登らざるべからず。况や廣州灣は海底に障礙多き爲め噸數稍大なる船舶の出入に便ならず、隨つて我海軍に利益する所甚だ大ならざるに於てをや。但し他國は支那に於て何事を爲すも佛國は敢て關せずと云ふの無稽なるは明かなり。然れども他人の一舉一動を見て我と其地位の如何に異なるに拘らず、我も亦直ちに且つ必然爲す所なかるべからずと主張する如きは果して慎重なる政治家の本分なるかを疑ふなり。諸君は思はずや、支那及び其他の方面に於ける政界は何より先に佛蘭西の利益を考へ是に依りて決定すべきものなりと。佛蘭西の利益は果して、那邊に在りや。獨逸は膠州灣を占め、英國は威海衛に據るを見て、世人は問うて曰く、「吾人の略取する所は何處ぞ、獨り佛蘭西のみ手を空しうすべきか」と。此問を爲すものは吾人が支那に於て既に一大帝國を有することを忘るゝものなり。吾人は現に東京、安南、後趾、支那、東捕塞、ラオスを領有す。其面積は佛蘭西の二倍にして三千萬の人口あり。其資源極めて多種なるも唯僅に開發に着手したるのみ。之を十分活用せんには尙將來數十年に亙りて佛蘭西の通商上及び工業上の發動力の

大部分を沒收するに足るものあり。但し何人も此等の領地の境界は既に確定せりと云ふを得ず。然れども吾人は既に此等の領地を有する今日に於て總て不健全の侵略を戒めざるべからず。相當の所得なくして唯徒に既に過大なる吾人の負擔を更に増大せむとするの不可なるは、凡智を以てするも誠に明瞭なる所なりとす。佛蘭西の如く富強なる國は多少の贅澤品を有するを得べく、且つ必ず有すべきものならん。唯此贅澤品の増加せる爲めに収入の必要部を消費するを避くべきのみ。余は世人が如何なる議論を以て此膨脹熱を辯ずるかを知れり。彼等は云へり。列國は既に支那海岸に根據地を得たるを以て満足せず。尙亞弗利加に於ける如く、或は周圍地（シベリア）の理論を以てし、或は權威區域の名目を以てして各其據る所を定めむとす。是に於て數年を出でずして支那分割は既成の事實と成りたるべしと。夫れ然り。分割は紙面に於てこそ容易なれ、實際幾千萬を越えざる歐洲の國民を以て、幾億を以て算ふる支那民衆を併吞するは余を以て之を見れば甚だ便利ならず。孰れにしても切迫の事實にあらざるべし。然れども今試に勢力範圍を以て支那を分割するの理論は行はるゝものと假定し、且つ一國の占めむと

欲する所は、他の列國に於て容易に之を承諾すべしと假定せば、佛蘭西は果して何地を占有せんとするか。斯くの如きは固より一時の輕浮心を以て決定すべきの問題にあらず。例へば露國の如き不氷港に達する通路を開かざるべからざる所以の理由ありて、絶えず之を眼中に置き、又歐洲の共進國樞要の利益と相衝突するを避け、且つ一朝事ある日には、本國より軍隊を派出して直接進入するに便利ある地位を考へ、以て地を滿洲の一部分に選みたるものなり。是に於て二年以内に滿洲鐵道の完成する曉に於て露國は敏速確實に、兵員及び材料を本國より送致し、以て攻守に備ふるを得べきなり。若し同一の理由を以て吾人の據るべき地點を選まんと欲せば、依つて以て吾人の權勢區域を決定する者は印度支那帝國なるべく、其地帯は必ず東京附近に外ならざるべし。即ち雲南、廣東及び廣西是なり。然るに此地帯は不幸にして既に完全ならず。五十年前より歐洲の或る強國は廣東の一隅に據り計畫する所あり。雲南に至りてはこれ世人が吾人の未だ之を侵略せざるを最も激しく責め、未だ其果して有益なるや否をも確めずして只管吾人を促し、早く侵略せしめむとする所なり。然れども世人は失念せり。世人の

記憶力は餘に短し、一八九六年一月十五日の條約第四條に依り、佛蘭西と英吉利とは互に此地方に於て利益を専有せず。各種の特權又は専有權を占取すべからざるの約束あり。姑らく雲南の地位如何を考察せば、此約束を爲すに至りたる所以のもの明瞭ならむ。雲南は吾人に取りても英吉利人に取りても同様に楊子江上流に達する最も直接にして又殆ど他なきの通路なり。是を以て佛蘭西も英吉利も同様に此通路の他人の専有に歸するを默過すべからざると明かなり。仍つて均しく之を佛蘭西並に英吉利に開放するの規約を立て、又此規約を以て雲南に接續し、更に廣大にして人口も多く——六千八百萬の人口あり、楊子江沿岸地中最も豊饒なる四川省に及ぼしたるものなり。殘る所は廣西なり。余は旅行者が此地方に就き著せし紀行の多分を熟讀し、又其或る者と直接會談し、又彼地に駐在したる官吏に質問したり。而して彼等の意見は形こそ異れ、歸する所皆一なり。曰く、廣西は支那各省の中最も薄瘠にして天恵に乏しきものなり。此地は資源なく、獨り海賊のみ多し。即ち此等海賊は東京征伐の當時に於て吾人に大障礙を呈し、六年の久しきに互り鎮定を妨げたるを記憶す。夫れ然り、若し果して權威領域

の説に依るべきものこそせば、佛蘭西の地帯を組成するものは概ね斯くの如し。故に余を以て見れば、一部の新聞紙面に顯はれて單に政府攻撃の方便に外ならずと見做すべからざる熱心催促は其當を得ざるものなり。更に緊要にして我印度支那の安危に係はる直接なるものは、他の強國をして其境外の地に占據せしめざる一事に在り。然るに支那は印度に隣接する地方を他の何國にも割讓せざることを約束したり。故に唯此約束を守らしむるに勉め、時に必要に應じて監制を行へば、則ち吾人の第一任務は了れり。唯之と同時に支那帝國の他の地點に於ける佛蘭西の利益を保護するを怠るべからざるのみ。且つ此等の利益は微薄なるにあらず。精神到る處事業起り、貨殖の利は最も適當したる地方に於て自然に發達せり。余は佛國の工業家及び佛國の商人が益、廣く眼を海外の事業に注ぐを見て幸福に堪へず。其人員の年々増加するは歡欣措く能はざる所なり。何となれば——此點に於ては事を秘するは妄信を養ふと俱に不可なり——何となれば經濟上の利益を以て總て遠方の地に關する政治上の行爲の基本とすべき趨勢日一日よりも強く、之に反して唯紙面の權利たるに止まるものは、理論上の價值以外に

其用をなさざるに至れり。余の欲する所は資本家が其資本を稍、輕卒に外國の企業に用ふるに代へて、之を海外に於ける佛國の事業に注入するに在り。例へば現在外國の或る鑛山に使用する佛國の貯金の中より拾億乃至拾貳億を我植民地の築港若くは開墾採掘事業に轉用すとせむか、國民の家産は爲めに其價值を益すのみならず、利益の擔保も亦決して薄弱ならざるべきなり。要するに賀すべきは、佛蘭西が支那に於ける利益の競争に於て決して遠く他國の背後に落ちず。其外國に許可したる鐵道一萬吉米の中佛蘭西の有に屬するもの二千吉米にして、而も其過半は既に工事に着手しつゝあり。此外に吾人は佛蘭西人又は佛蘭西會社の爲めに多く工業上の特許を得たり。即ちアイナンチ、南京、及びクラチンの炭礦、キヤチンの石油鑛、貴州の水銀鑛、タインキの鐵鑛、福州の鉛山、チエンの硫磺山の如し。余は唯此等の佛蘭西人又は佛蘭西會社が初め特許を得むとするに際し著したる熱心を中途に於て衰失するなきを望まざるを得ず。何となれば吾人にして若し冷淡なる時は直ちに其隙に乗じて自ら利益せむとする者他に存すればなり。以上枚擧したる企業は皆若し吾人が地帶政略を取りたる場合に於て、佛國

の權威範域に屬すべき地方の外に存するものなり。是に依つて見るも、吾人は特に佛國の權威範圍を定めて尙此上に佛國の負擔を重するの主義を執らんよりも、寧ろ支那内部を永く全世界の智力及び資本に開放せしむるの方針を取るべきならずやと。

廣州灣事件に付いてデルカッセは左の如く明言せり。世間一般の不平家は到る所に佛蘭西の威力の減退せるを見ると、雖、其實佛蘭西は支那に在りて依然名譽ある地位を占めつゝあり。我政府は全く無爲なりしにあらざるは世人の了解せる所ならむ。既に述べし如く、吾人は廣州灣に根據地を占むるを得たり。而して此事件は追つて本院の議に附せらるべし。吾人の宗教に對する保護、佛國は古より支那に於ける各國の加特力教宣教師を保護する權利を有すは外國政府の感謝を得たり。吾人が本年の如き精勵を以て行動したる年はあらず。支那人の暴行は數百里以外に於て起りしものたりとも、我外交官の精勤と佛蘭西の威光とに因り速に之を鎮壓するを得たりと。

次にデルカッセは歐洲の一般外交に論及し、第一にトランスヴァール戦争に關し、佛

蘭西は不干渉主義を執ることを明言せり。曰く、さて特に吾人の注意を要するものは、即ち阿弗利加及び其南部に起りたる戦争なり。これ固より不幸の事なりとす。然れども果して讓許を速にせば避くるの途ありしや否を今より論究するも詮なし。或はヘーグ萬國會議の條約を指して吾人に干渉を促せし者あり。調停は可なりと雖、余は佛蘭西より之を發議するを正當と認めざりき。何となればヘーグ萬國會議に代表者を出せしは交戦者の一方のみにして、而も此一方は未だ其條約に調印せず。英國が調印したるは十二月なり。且つ其首相は斷然外國干渉を拒絶するの意志を明言したると諸君の知る如くなればなり。余は此論が國民の愛國心を濫用せむとする一部の政事家を満足せしめざることを知り、世の智者は佛蘭西が歐洲に於て甚だ強固ならむとを欲すると同時に、其何事にも手を出さん事を望めり。世の仁者はポア人に同情を表しつゝ且つ、英國が早晩トランスヴァールを占有したる曉に於て、佛蘭西も亦之に相當する領土を得むとを望めり。彼等は佛蘭西が既に亞細亞及び亞弗利加に於て本國に八倍乃至十倍せる帝國を領有する事を失念するものゝ如し。政府は斯くの如き論者の意見に依りて

進退を決するを得ず。政府は其義務の何たるを自覺して之を履行しつゝあり。政府は世界の何處に起る事件に對しても無關係なるべからざるを知ると同時に、火災に最も近き者(暗に獨逸を指すか)が水を運ぶに熱心ならざるに當り、却つて遠き者が過度の熱情を示すの不可なるを知れり。吾人の緊急の利益は那邊に在るやを考へ、吾人は既に盛に膨脹して亞細亞及び亞弗利加に於て廣大の帝國を有するを考へ、又佛蘭西の人口は最早増加せず。随つて佛蘭西の沒收力は無限にあらざるを考ふる時は、吾人は左の結論に達せざるを得ず。曰く、佛蘭西に取りて必要なるは新に遠方の領地を得むとするに在るにあらずして、寧ろ其既に有する領地を強固にして、外國の侵入を防遏して、成るべく十分に之を利用するに在り。政府が今より一年以前に佛蘭西國民の聰明に訴へて諸君の賛同を得たる所の主義は則ち上述の如し。爾來政府は普く此主義を行ふに忠實なりしを以て、自ら信するものなり。而して尙今後も此主義に依るべきことは、南阿事件にして苟くも佛蘭西の既得權を害するに至らざる以上は、吾人は唯默して其成行を見るべきなりと。

次にフッシュ事件に論及して、これ穩和共和黨内閣の計畫せし所なれば、急進共和黨内閣に直接の責任なしとの意を諷し、且つ一昨年政府が止むなく英國に讓歩したるは時開戦に便ならざりしに因ることを極めて婉曲に述べ、又後に幾分の報酬を得たるを明かにせり。曰く、抑現政府の外交上の實跡を觀むと欲せば、今日より一年以前を顧みざるべからず。恰も一年以前に於て吾人は一の見解を定めたり。即ち事の計畫は獨り其内包に依り取捨すべきにあらずして、善く其時機を考へ、並に之を實行する方便の有無を鑑みざるべからずと云ふ是なり。其場所即ちフッシュに於ける彼我の地位は明かに優劣あり。又或る犠牲(即ち戦争)をなすの必要と、之に因り生すべき効果の疑はしきことを比較して、當時の内閣——但し此計畫には直接の責任なき内閣——は名譽あるも甚だ慨歎すべき決斷をなせり。時に國民が一步步實利に依り動くの決心を以て示したる冷血は、國民の愛國心を濫用せんとする政治家が煽動したる熱情に比して頗る有益のものなりき。而して三月の後に至り、吾人は國會が全院一致を以て賛成したる一の條約に調印し、是に依りて植民黨の希望を超越する大地域を領得し、併せて亞弗利加に於け

る吾人の帝國を統一するを得たり。同時に吾人は伊太利と通商條約を締結し、第一に從來の不幸なる偏就を消散せしめ、彼我人民をして兩國の間に相侵すべきものなく、又互に他を恐るべき理由なきに因り、寧ろ親しく交際するに如かざるを確認せしむるの効ありたり。右に次でヘーグ萬國會議の事あり。諸君も知らるる如く、佛國の全權は同會議に在りて佛國の威光に背かざる役割を演じたり。而して現在の戦争あるも、爲めに此會議の眞價を減ずるとなし。何となれば原則を確定したると、仲裁審廷を設備したるとの二事は、光榮暉ある君主の嚴肅に唱道したる所の世界各國民の誠心に貫徹したる證據なればなり。更に近時に至りて吾人は合衆國と商業上の協定をなしたり。而して之を議事に對するの日に至れば、政府が佛國の農業上の利益を保守するに勉めたる事を證明する容易なるべし。佛蘭西と合衆國とは元と歴史に依り、並に政體の類似に依り良友たるべき國柄なれば、此協諾は從來の誤解を釋きて、彼我産物の交易に一層の活氣を添へむこと疑なし。斯くの如く佛蘭西は紛議を解き利益を調和し、成るべく衝突の原因を避くるに勉め、公明正大にして、輸達なる主義方針を執るに因り、或る諸國の友

好を得、並に各國の尊敬を博しつつあり。余は一部の新聞紙が此政略に反對して他の政略を唱道するを知れり。即ち空拳を振つて各人に敵對するの政略是なり。斯くの如き政略は佛蘭西の威嚴安全をして如何なる危地に陥らしめんとするやは之を見る易し。斯くの如き政略を許容するは諸君の分にあらず。大言壯語は未だ曾つて實力と意義を同ふせざるなり。佛蘭西は昔日の如く人口最も多きの國にあらずと雖、其資源と其貯蓄力とに因り、尙列國が其友誼を求むるの價値ありとする一等国たるを失はずと。

最後にデルカッセが露佛同盟に關し云々したる所は、歐洲一般の外交社會に於て此同盟の一旦其終止期限に近づき、一八九八年九月中に於けるムラウヰエフ伯の佛國訪問に依り、更に幾年間繼續せられたるを暗に吹聴するものとして解釋せられたり。即ち其言に曰く、今日の時に當り自己特立の政略を以て他國を制するを得る者何處にか在る。獨逸は戰勝の勢を以てするも、猶直ちに同盟を作るの必要を感じ、三國同盟を組織したるならずや。然るにこの同盟は之と權衡を保つ爲めにビスマークの語を以て言へば、地理上の關係に於ても、又政治上の希望に於

ても衝突するものなく、却つて自然の傾向に因り、互に同情を懷ける二國民(露佛)の間に一致聯合の必要を生じたり。請ふ思慮淺く、又は過分に聰明なる一部政事家と俱に此同盟の強固を疑ふを止めよ。余は唯一事の言ふべきあり。曰く、兩國民が雙方の福利の爲めに作り、而して時を緩化するに反し、却つて近頃更に緊括せられ、而して尙此後も益、養成せらるべき一致團結はこれ現時に於ける安固の擔保にして、又將來に對する有効準備なりと。二國同盟は最も遠大なる規模を容るの餘地あり。之を完成するは唯耐忍と持續と時間の問題なるのみと。

六 彼の對伊政策

一九〇一年四月下旬、デルカッセは露都を訪問してラムスドルフ外相及びウヰッテ藏相と會談する所ありたるが、同年九月には露帝の來訪に接して之をコンピエニニに迎へたり。

伊國と親近せんことはデルカッセの外交政策の一にてありき。一九〇一年七月、彼は一の公文を公にして、歐洲の耳目を聳動せしめ、三國同盟に對する伊太利政府

の新態度を明示したり。彼が佛國下院に於て宣言する所に云ふ、吾人は伊太利の政略の直接にも間接にも佛國に反して行使せらるるものにあらざるを確めたり。如何なる場合に於ても、即ち外交上の形式に於ても、又國際的軍事議定書に於ても更に吾人に對する威迫を意味する者にあらず。即ち之を要するに、伊太利は如何なる場合に於ても、將た如何なる形式に於ても、我國に反抗する聯合の器具にも補助者にもあらざるを確め得たり。彼が此宣言の主旨これ豈に彼が無名の記者たりし十有五年の古より懷抱し來りし主義にあらずや。一九〇二年七月三日の下院議場に於てデルカッセは又佛伊間の關係に就き述べて曰く、我對外政策は既に新内閣の宣言中にも述べられたるが如く、佛國の高等にして且つ永久なる利益の保護を以て其目的となし、露西亞國との同盟を以て其基礎となす。露西亞も亦此同盟を以て其高等にして、且つ永久なる利益の手段となすなり。斯くの如くして、吾對外政策は常に國際關係、殊に伊太利との關係の圓滑を増進せしめんとして止まざるものなり。されば吾既に永く繼續せられたる伊太利との關係税戰爭を止めて商業上の近接をなしたるは四年前の事に屬す。此事たるや依つ

て兩國の利益の増進せられたる所少からざるのみならず、斯くの如くにしてアルプス山の兩側は漸次政治上の近接を進めて既に雙方の政府は其協定の時機を認むるに至りたり。余が既に下院及び上院に於て公言したりし如く、此協定は兩國の主要なる利益が反對ならざるを得ざるの地位に在るものにあらずとの確定及び一時兩國をして疎遠ならしめたる地中海は兩國をして相接せしむるものたらざるべからずとの思想より來るものなり。されど此多幸なる協定が佛國及び伊太利の一般政策の上に影響を及ぼさざるを得ざるは言を俟たざる所なりとす。されど又勿論兩國の各方は其完全なる獨立によりて其政策を定むる所にして、誰人も伊太利の利益を知るに於て伊太利以上たることを主張し得る者なかるべく、又况や伊太利の利害關係の錯雜せること他の列國に劣るなきを明かにして、其將來の方針を指示するに於ては更に然らざるを得ざるべし。されど余輩は三國同盟の日ならず更新せらるべしとのとが他國の議會に顯はれたる時、此更新が伊太利と吾邦との間に生じたる利益と友情との關係と調和すべき方法を講ずるに痛心する所ありたりしを茲に報ずるも、強ち意外にあらざる

べし。余輩の痛心は實に事情の自然に然らしめたる所なり。されど余は直ちに附言せざるべからず。此痛心は永續せざりしことを。伊太利國王陛下の政府が事情を明白且つ精確にするの勞を取りたればなり。吾人に對して爲されたる宣言は吾人をして伊太利の政策が其同盟をなしたるも猶決して直接にも間接にも佛國に對抗するものならざることを確めしめたり。伊太利の政策は外交上の形式に於ても、軍事條約の形式に於ても、決して佛國を脅迫するものなかるべく、如何なる形式の下に於ても、伊太利は吾邦に對する攻撃の器具とも助手ともなるとなかるべし。此宣言は吾邦に對する伊太利の政策が確に平和にして且つ友情的なると及び兩國の關係が將來安固なるべきとに關する疑念を全く除去するものなり。此宣言は既に多大の結果を生じたる兩國の友情が將來益々發達すべきに就いて最早何等の障礙の存せざるを確信せしむるものなり。議會は此事實の報道に接するを以て、疑もなく多幸なりとせらるべしと。

官報はデルカッセ大臣の此宣言の終に「活潑にして且つ全院一致の喝采」の文字を附加したり。以て如何に議會が此演説に就きて満足したりしかを知るべし。

七 英國接近の政策

晩近に於ける英佛兩國の交際を尋ぬるに、前にはフシダ事件の葛藤あり、後には南阿戰爭に關し、佛國人のボア人に過度の同情を表し、英人に激甚なる嫌惡を示したるあり。兩國の關係は決して圓滑を以つて目し得べからざりしに、一九〇三年に至り、兩國元首の來往あり。即ち五月一日より四日に涉りて英皇エドワード七世は先づ巴里を訪はれて佛人の熱誠なる歡迎を受け、次いで七月七日、ルーベ大統領は答禮の爲め英國に赴き、其温良老實の人格を以て大に英人の迎ふる所となれり。元首の來往に次では英國議員の招待に應じて平和主義を唱ふる佛國議員の一群は英國を訪へり。蓋し此現象の起りたるは英國にありては、其獨逸の大敵を恐るゝの情よりして自然に醸發せられたるものなるべし。デルカッセは之に就て、フイガロ新聞の通信者にして曾つて日露戰爭に際し我第二軍に従軍せしゼオルジウリエールに語りし所を譯せんに、云く、ルーベ大統領のアルゼリアに赴くや、露、伊、英、西及び葡國艦隊は之を迎へて敬意を表し、其佛國に歸るや、又米國

艦隊は之をマルセイユに迎へて敬意を表したり。而して今又英皇エドワード七世陛下の訪問あり。是に於てか佛國外交主義の公明正大が全歐羅巴に依り鑑識せられつゝあるとは判然せり。所謂佛國の外交主義は極めて明白にして方正なるものなり。數日前代議士院に於ても演説したる如く、佛國外交の抜くべからざる基礎は露佛同盟に在り。これ吾人の全行爲の樞軸なり。然れども同盟の極めて強うして依頼するに足るが爲めに佛國は意を安うして歐洲各國の行害及び感情融和に勉むることを得る次第なり。佛蘭西は現に列國間の有形無形の權衡を維持する元素にして、且つ久しく此地位を保たんと欲し、此理想の爲め國力を提供するものなり。外國政府が此事を理會するに至りたるは、吾人の慶賀する所なり。今や經濟上の利益は日一日よりも重きを致し、各國政治上の問題も亦一に決を此に取らんとするの時に際し、英佛二國が善隣の關係を厚うして以て相互通商の利を計るの重要な言を要せずして明かなり。英佛二國の國民が約款を立つるに及ばずして常に相共に霽々和親の氣象中に生活するは最も希ふべき事に屬し、他日世界の或る部分に於て如何なる問題の起るに當りても、此親睦

は其解決を容易にすること明かなり。英皇の旅行が此霽々の氣象を作るに偉功ありしは余の確認するを喜ぶ所なり」と。

斯くて一九〇三年十月十四日には、英佛兩國間に仲裁裁判協定の調印あり。該協定は之に依りて仲裁裁判に附せらるべき將來の紛議を法規上又は條約上の權利義務に關するものに限り、且つ此種の紛議中に就きても兩締盟國の重大利害若くは其獨立名譽に關し、又第三國の利害に關係ある場合に於ては仲裁裁判に附するの限りにあらずとなせり。

英佛仲裁協定の調印せられし翌月英國議員及び其夫人の一行約二百名、佛國を訪へり。是より先、昨年七月佛國上下兩院議員の一團が英國國會商業委員の招待に應じて倫敦を訪ふや、非常の熱誠を以て迎へられしが、此度は佛國にて英國議員を招待したりしなり。此兩國接近は一九〇四年二月八日に至りて終に英佛協定を胚胎せしめぬ。

八 彼の退職

是より先、一九〇二年六月、ワルデック・ルソー内閣倒れてコムブ内閣成りてもデルカッセの位地のみは依然たり。コムブ内閣は二年有半の永きに持續し、一九〇五年一月瓦解してルーヴェイエ新に内閣を組織し、デルカッセ亦是に踏み留れり。

然るにモロッコ事件の難局は、デルカッセをして終に其職を去るの已むべからざらしめたり。獨逸使節タッテンバッハはモロッコ朝廷に向うて頻に佛國の信すべからず。獨逸の頼るべきを説き、佛國の改革案を退け、列國を招きてモロッコ問題を解決せんことを主張し、頗る國王の心を得たり。大英國はフエズにて獨逸の勢力の隆々たるに反し、佛國の外交日にく／＼振はざるを憂へ、英佛協商第九條の約を履み、之に外交上の援助を與へんが爲め、其使節ローサーをして急に結束してフエズに赴かしむ。獨逸使節は其入都前にモロッコ朝廷をして列國會議開催の議を決定せしめんと欲し、或は脅迫し、或は勸誘し、説くこと極めて急なり。元來其當路者は獨り佛國又は獨逸をして其勢力を擅にせしむるを好まず、列國互に相争ふに乗じ、巧に其間に處して有耶無耶の裡に事件を片付けんとする心なきにあらざれば、遂に其説を容れ、一九〇五年五月二十七日、或る一國をしてモロッコ國內の改革に當らし

むることは、民意の許さざる所たるを佛國に告げ、英國使節の入都の二日前、即ち五月三十日附を以て、一八八〇年のマドリッド會議に参加せし諸國に通牒して、モロッコの代表者とタンジールに會し、改革事業を討議決定せんとを要求せり。是に於て昨春英佛協商に依つて佛國がモロッコに獲得したる優勝の地位は全然獨逸に破壊され、デルカッセの苦心せるモロッコ經營は大打撃を蒙れり。六月六日、佛國內閣會議を開き、席上外相は單にモロッコ事件のみならず、一般外交の過去現在を説明し、自家の政策を辯護したれども、内閣議長ルーヴェイエ起つて其所信を開陳し、内閣大臣舉つて之と見を同じうす。デルカッセと同僚との不和は今日に始まるにあらず、端を現内閣組織の當時に發し、モロッコ事件はデルカッセ排斥の一口實に過ぎざるものゝ如し。彼今や孤立の窮境に陥り、位に留るべからざるを見、即日其任を辭し、ルーヴェイエ代つて臨時兼攝す。十七日、彼專任外務大臣となり、大藏次官メル、其後を襲つて藏相となる。デルカッセが七年間外務省に在りし事は佛國共和政治に前例なき事にして、此間に彼が英と近づき、伊と親み、西と和し、ビスマーク公の遺業を破壊して佛を孤立の地位より救出し、今日あらしめたるは、人々が偉

大の功績とする所。殊に英佛の關係極めて切迫したるとき外務の局に入り、爾來、非常の苦心を以て二國の融和を計り、遂に一步を進めて之を一九〇四年の協商としたるは功中の功にして、獨逸國の憎惡する所となりたるは専ら此にあり。獨逸皇帝及び大宰相は、佛國が埃及及びニューファンドランドを英國に譲り、交換的に得たるモロッコを其掌中より奪ひ去り、英佛協商より豫期の利益を享くる能はざらしめ、茲に英佛再び疎遠となるの因を作り、久しからずして進んで好餌を以て之を誘ひ、獨佛の接近を計らんとしたりしなり。兎に角に英佛親睦の楔子たるデルカッセを陥るゝを得たるは獨逸の成功の第一歩と云ふべく、皇室大禮の日、皇帝親しく大宰相を訪問し、之を普國公爵に陞叙せられたるは之が爲めなりき。

九 クレマンソー内閣を倒す

デルカッセは是より後、代議上院にあり、外交通を以て政府の政策を監視し、傍ら海軍問題に熱中したり。一九〇九年七月、彼は此海軍問題を以て、内閣破りを以て有名なる時の内閣議長クレマンソーを見事に撃破したり。此年七月二十日、佛國代

議院は特別海軍調査委員の報告に對する討論會を開き、佛國海軍が近年兎角に振はざるのみならず、其部内に腐敗の氣の鬱積せるものあるは打消すべからざる事實にして、佛國の上下は爲めに國防の不安を感ずること切なり。六月二十四日、海軍調査委員の報告は其腐敗の事實を曝露して剩す所なかりき。海軍行政の腐敗に對しては、クレマンソー内閣固より其責を分たざるを得ずと雖、多年來の情弊が積成せるものなれば、一にクレマンソー内閣にのみ其責を歸すべからざるは一般に之を認むる所。海軍卿ピカールは議政壇上に立ち、該報告に對し、政府の爲めに辯ずると數千言、殊に海軍行政に不整理のものあるは、余と雖遺憾ながら之を否定し難しと雖、議院の内外に行はるゝ批評は極端にして事の真相を隔つること甚だ遠しと云へるに對し、議場は拍手を以て之を迎へたる程なりき。然るに茲にデルカッセは突如として演壇に立ち、海軍現下の姿態を痛言し、特に首相クレマンソーが意志の輕浮にして薄弱なるを擧げ、代議院は其義務として當に進んで政府の責任を問ふ所なかるべからずと論到するに及び、議場は俄に色めき來りぬ。前外相の演説既に常軌を逸するかに思はるゝに、首相の答辯は更に

是よりも甚しきものありき。兩者の問答は擧げて前章に在り。首相は怒り、前外相は憤り、滿場の視線は此兩雄の上に集りぬ。前外相は再び立ち首相を攻撃し、一語は一語より鋭く、一句は一句より烈しかりしが、名にし負ふ議院政治家たる首相、如何ぞ黙して過ぐるを得ん。首相の舌端は焔々として火を發す。而も議場の大勢は首相に利ならず、之に背きて進行す。首相の席に復するを待つ間もなく、デュルトは政府の信任を問ふの案を提出し、案は多數を以て政府の不信任を決議しぬ。議長が採決の結果を報告するや、クレマンソー及び閣僚は一同袂を聯ねて去り、拍手は急霰の如く右黨及び極左黨より起りぬ。斯くて第三共和政治の下に尤も長壽を保持せしクレマンソー内閣は脆くも倒れぬ。

クレマンソー内閣は恰も落雷に打たれて不慮の最後を遂げたるに似たり。翌朝巴里の政黨間には、或は「クレマンソーは敗亡せるにあらず、椅子より離れたるのみ。或は如何に考ふもクレマンソー内閣は瓦解せり」とは思ふ能はずなど評し合へり。而も内閣の瓦解は事實なり。若しデルカッセにして政府攻撃の演説をなすことなかりしならんには、討論は技術に關する範圍を脱せざりしなるべし。デルカッ

セは野に下りてより多くの問題に對し沈黙を守るも、海軍問題に就ては熱心にして、政海に巨瀾怒濤を起すこと珍しからざりき。

一〇 海軍大臣となる

一九〇九年に成りしブリアンの社會黨内閣は、一九一一年二月を以て瓦解して、一九〇二年のワルデック・ルソーの内閣に司法大臣たりし元老モニーの新に内閣を組織するや、民間の人となりてより六年なりしデルカッセは又もや誘はれて入閣し、海軍大臣となれり。事の由來は左の如し。モニーは二月二十八日午前十時、ベルト（新陸軍大臣）と俱にデルカッセを其居宅に訪ひ、外交問題に就ては全く彼と意見を一にすることを明言して入閣を促し、デルカッセはモニーが斯くの如く彼に示したる名譽に對して直に承諾する旨を答へたり。然れども今直ちにデルカッセを外務の椅子に置く時は、獨逸との關係を害する恐あるを以て、先づ之を海軍に据え、機を見て外務に轉せしむる内約ありと稱せらる。されば新内閣の外相たるべき者は事實上デルカッセの指揮に従はざるべからざる次第なるを以て、何人

も此地位に就く者なく、モニーは初めリボー、次にポアンカレ、次にドセルグを試みたるにも皆辭退し、辛うじてクリッビーを得たるなり。されば新内閣の主力はデルカッセとベルトーとの上に在りと云ふべく、ベルトーは急進共和黨にして社會黨に忠實なるものなり。

デルカッセ入閣は大に世人の視聽を動かしたり。殊に獨逸反對の彼が閣員の一椅子を占めしてふ事は大に獨逸の注目を惹けり。是に就いて同國半官報の評論左の如し。曰く、ブリアンの前内閣にては海陸の二省何れも専門軍人を以て之が大に任じたりしが、新内閣は雙方とも之を議院政治家に委ぬることとなせり。陸相は、ベルトーに、海相は、デルカッセに是なり。尤も是等の中、ベルトーは陸軍には全く素人にあらず。彼は下院にては幾回となく陸軍省所管の豫算委員長たり、已にコムブ内閣の時にアンドレ將軍の辭任の後を引受けて大臣となりし經歷あり。次いでルヴィエ内閣に陸相の椅子に倚りたりき。彼は元來は理財家たり銀行家たるを以て、其初め陸相に任せられしときは、世人は多く彼能く何事をか爲し得べきとて密に之を冷嘲せし程なりしも、其實際に手腕を揮ふに及びて彼の

決して此位地に不適任にあらざるを知りたりき。デルカッセに至つては今や漸くにして彼が民間の人となりし其日より夢寐尙忘るゝこと能はず、凡ゆる手段方法を竭して追及したるなる海軍大臣の地位を得たるものなり。デルカッセは兼て排獨逸の外交政略が一九〇五年の危機を誘促し、此記憶の將來に彼が累の源をなすことと知りたれば、力を極めて此障礙を排除し、以て己れの進路を開拓せんを努めたり。彼は其れが爲めに一面に於てはクレマンソー内閣の運命危きに瀕せし一兩年前、己が政府に地位を失ひてより兎角に阻隔せし巴里駐劄獨逸大臣との交情の恢復を圖り、一代議士として之と往復し、これ見よがしに振舞ひたり。其狀恰も彼の國人に向つて、見よ、獨逸に對する余の關係は斯くの如くに至良なり。諸君亦何をか言ふやと言はんばかりなりき。彼は又他の一面に於ては一九〇五年に及び彼の外交政略の一蹟に歸したりし理由を以て、獨逸が此際佛を凌ぎ得たる所以のものはルヴィエその他のものゝ腰の弱きが爲めに外ならざりしを吹張し、傍ら彼は多くの初選出の乳嗅未だ夫せやらぬ代議士連に愛嬌を振り蒔き、己れは主として海軍の事に熱中して、終に昨年代議士院が海軍醜聞の調査

委員を設くるに當りては其委員長に推選せらるゝに至りき。好運兒たる彼は斯くて海軍今年の擴張豫算に首尾能くタントン級の戦艦二隻を編入せしむるに成功して、之と同時にブリアン内閣の瓦解するに及びて再び入閣の機會をば得たるなり。

佛國は調和と明察とを以て一九〇五年のデルカッセの政策を排斥したり。獨逸を孤立せしめて之が國際の政治上に於ける地位意義をなきものにせんとの企畫の愚なるを知れり。此管見は此後六年の星霜を経たりと雖、變り得べくもあらず。思ふに佛國の代議政治が政府の一員たるデルカッセの力を他の方面にも用ひんとすども、これ彼等が勝手なり。獨逸は之に對して是非の批評も憤懣をもなご得べき限りにあらざるなり。デルカッセ外交政略の危險なることは佛國民の忘れざる所なり。獨逸に向つては彼の再入閣は唯一つの疑問を喚起す。疑問とは何ぞ、曰く、モニール内閣に於けるデルカッセは佛國の外交政略の上に何程まで影響するを得べきやと是なり。吾人は絶対に此疑問の起るを拒む能はず。何となれば假令大臣クリッピールが外交事務を主宰し、その政策がデルカッセの流を追ふものとして

も、將た彼獨自のものに依ることとしても、兎も角其識見の據るべきありとは云ふこと雖、總て外交上の重大問題は悉く此外相顧問役の前に提起せられて其幫助を仰ぎ、且つ決議を待つものたるべければなり。されば之が爲めにデルカッセが一九〇五年の教に就て學ぶ所なかりしを斷ずるは早計なり。假令所謂獨逸の脅嚇なるものに對する彼の考案は變らざりしとも、彼の感情は夫れ或は變りたらんも計るべきにあらず。吾人は又クリッピール外相否モニール内閣其ものが前内閣よりも友誼的ならず、獨逸に對して妥協的ならずと信すべき理由を有することなし云云。現内閣に於けるデルカッセの一舉一動は方に世界の視聽を聳動しつゝあり。

第三 獨逸政治家

第十二章 獨逸皇帝ウイレルム二世

一 ウイレルム二世の幼時及び即位

現時世界の政治舞臺に於て重なる活動者と見做され世界治亂の關鍵を其掌中に扼するかの觀あるものは先づ指を獨逸現皇帝ウイレルム二世陛下に屈せざるべからず。古來幾多の英雄偉人中未だ皇帝の如く活動に富み多趣多方面なるものあらざるなり。見よ、歐洲の新聞雜誌は絶えず彼の人物を評論し、彼の言論政策を辯難攻撃し、毀譽褒貶の聲相半するにあらずや。蓋し彼は一面明敏にして機略ある政治家たると共に、又好箇武人の典型なり。博覽強記明晰なる頭腦、努力止まざるの天性を有し、内治外交財政宗教軍事より文藝科學に至るまで深き造詣を有し、躬親ら特種の問題に注意し、自ら一家の見解を有し而も非凡なる雄辯を以て其の意見を發表し、其精力多能驚くべきものあり。請ふ少しく吾人をして波瀾多き彼が經歷の一端を語らしめよ。

獨逸皇帝フリードリッヒ・ウイレルム・ヴィクトル・アルベルトはフリードリッヒ三世の長子にして、一八五九年正月二十七日、柏林に生る。母は英國の公主ヴィクトリアとす。抑、ホーヘンツォルン家の皇子は皆代々軍人として嚴格なる訓練を受けたる經歷あるを以て、ウイレルム二世亦六歳の幼時より最も嚴肅なる獨逸風の軍隊教育を受け、既に十歳の時に昔フリードリッヒ大王が任命せられし一聯隊の士官となり、之と共に特に母後の希望により、弟ヘンリーと共に家傳に反して教育を普通學校に於て受けたり。此學校は如何なる王公貴族と雖、特別の待遇を與へざる規約ありし爲め、皇帝は尠からざる辛苦を嘗め、節を折つて書を読み、各學科皆備るの機を得たりき。其學校長當時の彼を評して「其性は聰明鋭敏に、其情は温和優美なり。されど堅忍不拔如何なる困難をも決行せざれば、止まざるの氣概を有す」と。一八七四年九月より一八七七年一月に至るまではカッセルの學校に於いて學び、其後嘗て父王の入學したるボンの大學に二年の星霜を費せり。普通教育終れる後、數年間彼は専ら軍事を研究し、大に之に興味を有するに至り、一八八五年に

は近衛驍騎兵の大佐に昇進し、門地の高きに誇らずして、能く軍務を勵み、上官の命令に服従し、勇敢に著實に其職務に服したりき。此時彼は自然に軍人風の威化を受け、剛健叡智夙に祖皇ウイレム一世の赫々たる事業と功臣ビスマークの生涯を慕ひ、霸氣滿々、雄心轉た禁すべからず。私に前途の功名を夢みたりき。然るに時運は廻り來りぬ。一八八八年は實に獨逸帝國の爲めに大なる不幸と大なる幸福を齎し來りき。フリードリッヒ大王以來好戦勇武の賢王と呼ばれ、功勳赫赫一代に絶し、獨逸帝國の建設者として中外の重望を擔へるウイレム一世此年を以て崩じ、其墓木未だ拱するに遑あらずして、之に繼げるフリードリッヒ三世又溘焉箠を易へぬ。是に於て當年二十九歳の英氣勃々たる現皇帝は父王の後を襲ひて歐洲の中原に雄視せる獨逸帝國第三の皇帝として普魯西の王國第九の王を兼ねるに至りぬ。

彼の位に即くや、軍事上祖皇フリードリッヒ大王を理想の人物とし、歐洲の帝王を睥睨し、縦横の機略と武斷的の性質を以て政治を裁斷し、功名心燃ゆる如く、一種の我意を有するに似たり。故に彼を賞讃する者はフリードリッヒ大王の再現とな

し、非難する者はルイ十四世の亞流となさん。思ふに帝は飽くまで自信力名利心に富み、獨裁にあらざれば、以て國家を強うするに足らずと信じ、專制主義を以てその終始一貫せる主義となし、帝權は神明より授かりし者にして帝意即ち最高の法律なりと思惟するものゝ如し。而して一方軍事に熱中し、絶えず之に注意信任を拂ふことは、帝が嘗つて國民に向ひ、兵士及び軍隊は我獨逸帝國の基礎を鞏固ならしめたりき。朕は深く軍隊を信任すと宣言せられしによりても察することを得べし。

二 皇帝とビスマーク

一八八八年六月二十五日、ウイレム皇帝が初めて帝國議會をライヒスタグに開き、聯邦諸國の諸王、皇子彼を圍繞せる時、彼は莊嚴なる語調を以て獨逸帝國の基礎鞏固にして決して破壊すべからざる國家なることを述べ、尙語を續けてホーエンツォルン家の偉大なる歴史を語り、己れは國家無二の臣隸を以て甘んずるとを公衆の前に公言したりき。彼が即位後一年間は平穩無事にして、列國を

聳動するの言行なく、唯到る所に祖皇ウイレム一世の功業を歎美し、其政策を貶
 襲せんとするの希望を演説したりき。

聽て彼は歐洲の重なる宮廷を訪問し、殊に露國及び英國と親交を結ばんとせり。
 然るに時の宰相ビスマークは皇帝の此訪問が外交上失錯に歸すべきことを豫想
 したりしが故に、口を極めて其不利を説き、其計畫を中止すべきことを奏請せり。然
 れども皇帝はビスマークの言に従はずして諸國を訪問したりき。これ皇帝とビ
 スマークとの間に起りし第一回の意見の衝突なりき。

次に皇帝は多方面なる性質として外交上に於ても精確なる知識を有すと自ら
 信じ、ビスマークに諮らずして獨斷に思ふ所を専行せり。外務省に於ては、ビスマ
 ークの政策に賛同を表して、新皇帝の突飛なる意見に同意する者少かりしを以
 て皇帝は悉く是等の徒を免職し、之に代ふるに己れの好む人物を以てせり。故に
 ビスマークの仇敵なる參謀總長ワルデルゼー等は皇帝に進案する所ありて皇
 帝と帝國建設者との間に自然軋轢を生じ、ビスマークの桂冠を促すに至りぬ。
 抑、獨逸に於ては帝國政府の取締頗る嚴重なるに係らず、社會黨の勢力次第に盛

となりビスマークは一八七八年發布の社會黨取締法實施期限を延期し、且つ之
 を修正補足して更に峻嚴ならしめんとしたり。蓋しビスマークは姑息温和なる
 政策は到底斯黨の撲滅を圖るに足らず、政府の威力を以て嚴格なる鎮壓をなす
 の方法を講じたりしなり。然るに是まで國民自由黨と聯合して合同黨を作り政
 府を援助せし保守黨が、突然左黨に投じたる爲めに其法案も廢棄せらるゝに至
 り。皇帝も亦同法案の廢棄を望まれしこの風聞ありしも、事實未だ判じ難し。世
 人往々此法案を以て兩者衝突の直接原因なりと斷定し去るは不可ならんも、唯
 皇帝とビスマークとの意見相背馳せしことは十分に推測することを得べし。

兩者の意見感情は斯くの如く相衝突せり。一八九〇年の初め、寒氣凜烈たるの時、
 ビスマークは僕麻質斯の爲めに苦められ、首都を去りて一時田園の閑地に靜養
 をなしけるが、皇帝は之を好機會とし、宰相の署名を除きて、二月四日、勞働保護の
 詔勅を發布したり。此詔勅は社會黨の主義に同情を表し、其政策を是認したるも
 のにして、ビスマークは之を見て大に怒り、部下の大臣に向ひて、今後帝國の官吏
 は宰相の許可を得ずして猥に皇帝と政治上の事件に就き交渉をなすべからず

と訓令を與へ、兩者感情の融和は到底望み得べからざるに至りぬ。
 雖て總選舉も行はれしが、其結果は合同黨の失敗に歸し、國民自由黨は其半を失ひ、勢力頗る失墜せしが、ビスマークは其獨得の手腕を弄し、皇帝に圖らずして私邸に於て中央黨の一議員にして彼が多年の政敵たるウインドホルスト氏と私に會見を遂げたりき。此會見の始末を耳にしたる皇帝は、宰相が中央黨に左袒し、其首領と密議を凝らすものなりとし、三月十五日の早朝、車駕突然首相の邸を驚かし、倉皇辱を排せしビスマークに對し、滿面怒氣を含み、眼を瞋らし劇しく口を開いてウインドホルストと會見の不都合なることを詰問し、激論數刻に亙り、歸邸せられしが、翌々十七日、ビスマークが、余は余の辭職が獨逸の前途を誤るものなりと信するが故に、政治的生涯を離るゝ能はずと辯護せるにも拘らず、侍從武官フョーシ・ハンケ將軍を差遣し、強ひて辭職の奏請をなさしめたり。斯くの如くにして今や獨逸帝國第一の功臣帝國の建設者としてカールレム一世の無比の寵臣たりし鐵血宰相ビスマークは、今や若き主權者に棄てられ、深怨を含んで其長き政治的生涯を終り、再び廟堂に立ちて快腕を振ふの機なきに至り、年少氣銳の新皇帝は

行動の自由を得、萬機を親らし、獨逸の歴史に一新時代を劃するに至りぬ。
 然れども翻つて思ふに、ビスマークの退隱は獨逸の外交に大なる損害を與へたりき。皇帝は、外交上の才能周到なる注意、老練なる懸引に於て遙にビスマークの下風にあり、其政略曖昧模糊にして、旗幟の鮮明を缺き、而も其神經質なる性格は時々刻々變轉して一定の主義なく、時々不謹慎なる言論は奇禍を買ひ、爲めにビスマークの退隱と共に獨露秘密條約は滿期となりて、又再訂せられず。波蘭に對する政策も其反感を招くに過ぎず。露西亞の惡感情は日に益加はり、歐洲外交場裡に於て贏ち得たる外交上の首位は遂に露國の爲めに奪はるゝに至り、之に加ふるに佛蘭西に對する政策として成立せし三國同盟は有名無實となり、露西亞は佛蘭西と同盟して獨逸に對して危険多きに至りぬ。
 ビスマークは退隱後ハムブルグに近きフリードリッヒスルに住居したるが、老雄の末期こそ悲惨なるものなれ、彼は時々公開の演説に於て又ハムブルグ新聞に於て發表したる評論は皇帝の忌憚に觸れて益、其感情を惡くしたり。此以後に於てもビスマークは猶政治を斷念するに至らず。彼は嘗つて譬喩を以て此事

を説明したり。

一日訪問者食事の際、ビスマルクに向ひ、公は何故に狩獵に對する熱心なる嗜好を棄て、顧みられざるかと問ひけるに、公答へて曰く、わが庭園の池中に多數の鱒魚棲みたりしが、一尾の鱒次第に他を食ひ盡し、最後に至り唯一尾の肥大なる鱒を餘する至りたり。わが嗜好も亦斯くの如きのみ。余の政治上の嗜好は凡ての他の嗜好を併呑するに至りたり。又六月十四日、彼の居處を訪へる温和黨の委員に向ひ、余は四十餘年の間奉職したりき。今や公共の生活より隱退したり。雖、政治上の趣味を棄つること能はず。之あるが爲めに余は他の嗜好をも犠牲に供したるのみと言へり。

又一八九〇年七月二十二日、彼は悲しげにノヴァ・ウレミアの通信員に語るらく、「人々は余の存命中、死者に等しき名譽を與へ、マルボローの如く余を埋歿し去れり。世人はマルボローが再び蘇生せざることを望むのみならず、又彼が實に死するか又は老後沈黙に終ることを望めり。世人は余を疫病者の如く遠ざけ、余を訪ふものは余の悪疫に傳染すとの恐怖を抱くが故に、余は時々妻をして代りに接待

せしめたりと。

然るに其後一八九三年に至り皇帝とビスマルクとの反目は調和せらるゝに至りぬ。然れども彼は政治上の權力を付與せらるゝ事なかりき。思ふに彼が晩年は頗る悲惨なるものありき。彼は晩年に至つても尙政治上に對する欲望を棄てざりき。孤獨蕭條の生活に慄らず、歐洲の外交舞臺に折衝して得意の快手腕を弄せし當年の光彩ある歴史を追想し、頭を垂れ、手を拱き、油然として晩年の轆轤不遇なるを歎ずるの情、想像するに足るものあり。斯くの如くにして一代の俊傑は一八九八年七月三十一日、享年八十三歳を以て、溘焉として白玉樓中の客となりぬ。

三 皇帝と新宰相

ウイレム二世と其他宰相との關係を記する。又興味なきにあらざるべし。帝が老宰相ビスマルク公を如何に遇せしかは前章に詳記したるが、此一事を見ても皇帝のなす萬事略、推知するを得べきなり。

兩雄並び立たず。ウイレム二世の下に宰相たりし、ビスマルクは終に斯くの如く

にして罷免せられ、其繼續者カプリヴィー將軍は從來政治上の閱歴なかりし單純なる一介の武辨にして、自己の見解を有するにあらず。ビスマークの政策を踏襲し、唯々諾々、皇帝の命令を奉じ、其官僚を規律正しく統御し、皇帝の意見と衝突する機會を生ぜざりしなり。元より眞摯なる彼は皇帝と協力して職務に精勵したりと雖、重要な支配權は皇帝自身の手に收めて之を臣下に委ねざりき。彼は自己の意志によりて國家の政策を指導せんことを渴望し、而して集會及び公開演說等によりて忌憚なき言論を敢てし、政治上の論争を惹起するに至り、之に依りて普魯西君主の性質を一層明白となさしめ、且つ皇帝の職務を一層勢力あるものとならしめたり。

然れども之に伴うて皇帝の言語行動を批評し、自由に皇帝の政治を論議する風益、盛となり、皇帝は之を鎮壓する方針として唯帝國の官報にて公に出版せられたる皇帝の演說を論議する事のみを許容せらるゝことなれり、又皇帝は他方に於て新聞政略を利用し、機關新聞を利用して人民の惡感情を除去するに勉めたり。次に皇帝の獨裁によれる新局面時代の内治如何を見るに、ビスマークは自己

の計畫を實行せんが爲めには如何なる反對をも意とせず、毫も寛假する所なかりしが、新内閣は之に反して極力退嬰の主義を取り、各政黨に對しては能ふだけの讓歩をなし、凡て之を國民的たらしめんとし、成るべく懐柔の策を取りしが故に、初め國民はビスマークの政治よりも寧ろ帝の政治を歓迎するの風を生じ、ビスマークに反對したる黨派は今や皇帝の政府と相接近せんとする新傾向を生ずるに至り、ゲルフ黨を調停せんとする計畫始められ、從來不倶戴天の仇敵を以て目されたる波蘭黨も獨逸が露國と政策を異にし、十分の恩惠を以て故國に臨むに感じて之より政府黨となり、社會黨も亦其勢力の發展せしに係らず、却つて其鋒鏑を收めしが如し。然れども斯くの如きは一時的の現象にして帝が總ての黨派を結合せんとする計畫は恰も外國に對し一視同仁の政策を施せると同じく、聽て失敗に終れり。之が爲めに彼は自然に社會的改革に精力を集中するに至り、永く逡巡躊躇したる工業法案の制定を斷行するに至りぬ。一八八七年及び翌年には僧侶及び保守黨の大多數帝國議會によりて婦人及び小兒の勞働を制限し、且つ日曜に勞働を禁止する法案を定めたりしが、此法案は聯邦議會にて採用

せられざりしと雖、一八九〇年の萬國職工協會の集會により營業法に修正を加へて有効ならしむるに至りしは、社會改良の上に於て頗る注意すべきことなりとす。又カプリヴィーが款を通せんと欲したるは帝國議會中第一の大政黨たる中央黨にして、彼は是に依りて軍事費増加の政府案を通過せしめんが爲め、五月法律を廢し、僧侶に種々の恩典を與へ、以て其歡心を結びたりき。

一八九二年、普魯西政府の小學校法案は兒童教育に於ける僧侶の勢力を擔保せしを以て舊教的中央黨及び新教的保守黨に歡迎せられしと雖、之が爲めに世上の物議を喚起し、其結果カプリヴィーは普魯西國總理の印綬を解きて之をオイレンブルグに譲らざるべからざるに至り、小學校法案廢止の後は政府の後援たる政黨なく、之が爲めに一八九三年の議會は解散の不運に遭遇するに至れり。是を以てカプリヴィーは新議會の協賛を以て軍備の充實に着手するを得たりしも、ビスマルク以來蛇蝎の如く嫌惡せし社會黨の進運目覺しく、新議會に既に四十四名の議席を有するに至り、皇帝は其迅速なる發展に駭きて之が撲滅策に腐心し、斯黨に對する鎮壓法案を起草せしめしが、此時端なくもカプリヴィー及びオイレ

ンブルグの衝突を惹起し、一八九四年十月、兩者共に其職を退くに至れり。

皇帝がカプリヴィーの後繼者としてクロードウィヒ・フォン・ホー・ヘンローへを得たるは專制を好める皇帝に取りて幸福なりき。ホー・ヘンローへは公爵にして模範的貴族なり。彼は一國の政治を左右すべき地位にあるも、其年若くして政治的手腕に乏しく、前二者の如く激しき活動力を缺き、其君主の欲する所を低調なる聲にて天下に告示するを以て己れの任とせるが故に、能く帝に奉仕するを得たり。彼が諸務を處理する間に外務大臣ビーベルスタイン男及び其後ビロー伯は政府の代表者となれり。而して新宰相は何事にも秘密を好み、帝國の政策を決定する爲め皇帝と人民との間に公にすべき通牒すらなすことを避け、宰相の此行動は世論の反抗を惹起するに至り、兩者の間に板挟みとなり、其位置も可憫なりしなり。上に專斷を好める皇帝あり、下に反覆定めなき政黨あり、之を操縦すること又頗る困難なりと謂はざるべからず。

次に地所等分論者は普魯西に於て漸次優秀の地を占め、直接間接に農業の利益を侵害する如き議案に反對する勢を示し、彼等は皇帝が海上に雄飛せんとする

政略に深く疑念を抱き、工業及び商業を盛ならしめんとする行動には、全然反對するに至り、加之彼等は外國より穀物輸入を容易ならしむるの理由に基づきて、ウエストフリアよりエルベ河を通じ、運河を開鑿せんとする計畫には甚しく賛同せざりき。

次に獨逸第四の宰相フォン・ビローは流暢なる辯を振ふ演説家にて、其人物圓轉滑脱皇帝と衝突すべき機會を有せず。唯々諾々機敏に皇帝の意嚮を察して其希望を充たすに就て其全力を盡したるが故に、逆鱗に觸るゝが如きことなく、彼は能く其位置を抱持せるのみならず、益々皇帝の信任寵遇を得たり。

此皇帝の下に此宰相あるは深く恠むに足らざるなり、然れども曩に彼は著しき獨逸軍備の擴張の爲めに政府の財政に巨大の缺陷を生じ、その填補増税案の帝國議會に提出せらるゝや、世論の囂々を惹起し、政府黨の反對分裂に逢ひ遂に骸骨を請ふの止むを得ざるに至り、新宰相ベトマンホルエヒ之を繼ぐに至りぬ。彼に就きては吾人未だ多くを聞く所あらざるなり。

四 社會黨の鎮壓

ウイレルム二世は即位の初め社會主義及び平民主義と親密なる關係を有し、獨逸をして内には社會主義を行ひ、外に向つては膨脹主義を遂行する帝國たらしめ、労働者と資本家との間に調和的關係を保たしめんとせり、故に即位の初め萬國労働者大會を伯林に開き、各國より労働者の代表者として社會黨の有力者集まり、諸大家の演説は世界の注目を惹きたりと雖、其結果は唯労働者をして資本家と争ふに有力なる後援を得たるを感せしめたるに過ぎざりき。

皇帝は萬國労働者大會に於て社會主義に従ひ、其政策を遂行すべきことを盟ひ、其進むべき道を公表したり。而して一八九〇年六月二十日、クルップの工場に於て演説して、社會主義の政策を以て天下に臨むは朕が確定せる方針なりと言へり。然るに一八九一年の初め、其方針俄に一變じ、殊にウエストフリアに於て大同盟罷工の行はれし時、帝は、社會主義は余の觀る所を以てすれば、我國家及び我帝國の仇敵なりと叫び、社會黨員は又皇帝陸軍寺院等凡ての物は全く政府の器械のみと

譏り、互に相反目するに至り、皇帝の鎮壓も効なく、社會民主黨員の増加著しく、皇帝の政策に反對するに至れり。

爾來社會主義黨員は非常に増加し、社會主義の新聞の購讀者は多數となれり。一八九〇年、帝國議會に於て社會黨の議員は三十五人に過ぎざりしが、一八九三年には四十四人となり、一八九八年には五十六人となり、一九〇三年には八十一人となれり。斯くの如き増加の趨勢は之より後益甚しからんとす。サクソニア州の如きは其の選出議員二十二人中二十一人まで社會黨員にして、獨逸帝國の大都伯林、ハムブルグ、ミュンヘン、ケーニヒベルヒ、ライプツヒ、キール等は社會黨の議員のみ選出したりと云ふ。

彼等は二八九〇年の初秋、社會黨の代表者の集會を開き、毎年續きて獨逸に之を開くとせり。一方伯林に於ては國會議員の議長を襲撃したるユンゲンと稱する小黨派あり。二八九一年、エルフルトに於てウエルネル及び其服従者が此黨派より放逐せられて無政府黨に加担したる者ありき。他方に於て大なる黨派あるが、其總理はヘルフォン・フォルマルにして社會の革命を以て不意に起らんとして漸次の

發達ならんと思へり、彼等は勞働者社會の繁榮及び自由を進歩せしむる救治的方法として、政府と協力するも不可なしと思惟するものあり。若し法律制定に依り且つ警察の監督に依りて此黨派を破壊する如き普國政府の計畫あらざる場合には、彼等の位地は先づ安全ならむか。然るに一八九七年にサクソニア王國に於てサクソニアの議會より社會黨を放逐すと云ふ目的を以て其法律を變更されたる事は將來眞面目なる意味の前兆なり。是に於て社會黨員も其位置の不安を感じ、他方に於ては帝國政府の商業政策に反抗し、古き敵たる自由黨と協力する事をば希望するに至れり。是に於て皇帝は之を鎮壓せんとする計畫は益困難となるに至り、帝の政治に不平を抱ける自由主義論者は相率ゐて社會民主黨に投じ、今や議會に於て侮るべからざる勢力を有し、皇帝の政府と激烈なる衝突を惹起せんとするに至れり。是に依つて見れば、帝の鎮壓策は多く失敗に終れりと云ふべし。

五 植民地の増加

獨逸の陸軍が世界に於て精銳無比なる事は今更言ふまでもなし。而して獨逸皇帝は之が熱心なる統率者にして、絶えず之を鼓舞獎勵し、絶えず之を改良指揮することを怠らず。殊に一八九三年以來、兵制の改革をなし、三年の兵役制度を廢して二年制度となしたるが爲めに、今や立ちに戰時には百八十萬の大軍を戰場に出すことを得しむるに至りたり。之と共に彼は又深く意を海軍に注ぎ、その設備を十分にし、國民の海事思想を鼓吹するに努力して止まず、以て獨逸の海軍が今日あることを致したり。蓋し帝が海を好むの念は其天稟に基くと雖、又其抱負とせる商業を盛にし、植民地を得、世界的雄飛を試むるには海軍に依らざるべからずと思惟するが故なり。帝は此理想を實現せんが爲め、即位の初め銳意戰艦の數を増し、多くの武装したる巡邏船を作り、先づ北門の要地へリゴランドを占領し、エルベ河口に新しく海軍根據地を設け、一八八七年、ビスマークの計畫により開鑿に着手せしキールよりエルベ河に至る運河は、一八九五年に至り落成するに至りたり。此運河は其長さ六十一英里餘、深さ二十九英尺半、水面の幅二百二十英尺にして、如何なる巨艦大船も之を自由に通過することを得るが故に、獨逸は之が

爲めに軍事上非常なる利益を得、帝は落成式に臨み極めて盛大莊嚴なる儀式を以て其壯舉を祝したりき。

又獨逸建國二十五年祭に於て皇帝の演説は帝の野心を尤も大膽に表はすものなり。曰く、獨逸帝國は世界の帝國なり。これ帝の心事を知れる者の耳には毫も恠むに足らざる言にして、此新しき世界政策の主たる觀念は獨逸が既に大陸地方に於て勢力を有するに満足せざることを示す。蓋し獨逸國內に於ける年々人口の増加は國民に生計の困難を感せしめ、従つて海外に販路を求め、輸出品によりて生計をなすの必要を生せしめ、其計畫着々成効すると共に更に他の欲望を満たさんとするの希望を生せしめしなり。而して此國民の思想を看取し最もよく代表し指導するものは皇帝自身なりとす。

獨逸が亞弗利加の方面に植民地を得たるは帝の時に始まるにあらず。既に一八八四年、亞弗利加のトゴランド及びカメロンの地を得、又同洲の西南部、東部の地方には夙に獨逸國旗の翻々たるありと雖、其領土は孤立せる狭小の部分に限られ、未だ獨逸の偉大なる勢力を土人に知らしむるに足らず、頗る危険なる状態に

てありき。一八八八年、ウィルヘルム陛下即位の年、東亞弗利加の獨逸領に住める亞刺比亞人は先づ叛旗を起し、獨逸會社の支配を免れんとして盛に亞刺比亞人を煽動し、獨逸の占領せる海岸の侵略を始めたり。蓋し彼等は獨逸が東亞弗利加の海岸を占領したる故に、自己の利益ある奴隸賣買は阻礙せらるべしと思惟したりしなるべし。此報獨逸に達するや、新皇帝の明快なる頭腦は斯かる廣大なる植民地の經營は之を一會社の管轄内に置くよりも政府に於て處置せざるべからずとなし、最も亞弗利加の事情に精通せるウイスマンを將とし、陸軍及び軍艦を率ゐて之を征定せしめたり。

此の時東部亞弗利加にてはブシリなるもの叛軍を指揮し、勢猖獗なりしが、十二月、獨逸の艦隊は海岸地方を封鎖し、ブシリを攻撃し、翌年遂に之を擒にし、次で之を死刑に處し、九〇年に至り叛亂全く戡定するに至り、ウイスマンは戰勝の名譽を負うて凱旋し、皇帝深く其功を賞し、之を優遇し、位階を與へて深く成功を喜べり。

然るに皇帝の満足は瞬時なりき。其翌年には又東部亞弗利加に一事件起り、獨逸

の守備隊は不意に盜賊隊の襲撃を蒙り、非常の損害を受けしが故に、皇帝は翌年シエーレ中佐を遣はし多年討伐の後之を平定するを得しも、其統御法宜しきを得ず、爲めに一八九五年、再び皇帝の信任せるウイスマンを總督に任命したり。彼は深く内地に探検を試み、獨逸の版圖を擴張し、勢力を發展せしむるに心を用ひしが、翌年病弱の故を以て職を辭するに至りぬ。東部亞弗利加植民地建設の功は確に彼を以て第一とせざるべからず。

次に西部亞弗利加の植民は一八八五年に始まるも、皇帝の時に著しき發達をなすに至り、一八九〇年及び九三年には帝は英國と協商をなさしめ、兩國の境界を確定し、アダマウアの大部分を確實に獲得するに至りぬ。此外に皇帝は尙西南部亞弗利加植民地の問題を解決したり。此植民地は帝即位の時代までは極めて憐れむべき状態にあり。四圍の蠻人は絶えず領内に攻撃を試み、領土内の土人は獨逸の有たることを拒むに至り、隣國ケープ植民地は嫉妬の眼を以て其進歩を咒ひ、兩國の境界は一八九三年まで不定の状態にありしが、皇帝は此年守備隊の長官としてルートワイン少佐を簡拔し、之を征伐せしめたり。彼は敵壘を襲ひ、奮戦

力圖して賊將を敗り、恩威を以て土民を懐け、獨逸の勢力を固定するに努め、今や獨逸の勢力は牢として抜くべからざるものあるに至れり。次に皇帝の時代に又南方蒼溟の地に植民地を得るに至れり。濠洲中カイゼル・ウイヘルム・スランド及びビスマーク群島は一八八九年ニューギニア會社の私有となり、煙草及び綿を出すを以て有名なり。此外にマーシャル島、ソロモン、サモア兩群島の一部を得、獨逸の植民地として豊富なる供給を母國に向つてなすつゝあり。次に皇帝は亞細亞の方面に向つて拓殖を試みたりき。

抑、世界主義の流行は十九世紀後半に於ける最も著しき現象にして、世界の強國互に其實行に急はしく、獨逸又其競争の渦中に投じ、ウイヘルム二世皇帝銳意之が實行に苦心し其經營に着手せしも、此時既に世界中の良植民地は多く歐洲の先進國によりて占領せられ、餘す所は僻遠未開の地に過ぎざりしが故に、其獲得したる地方も亦其範圍を脱するに能はざりしなり。炯眼なる皇帝は是に於て東亞の方面に深き注意を怠らず、密に其機會を待ちしが、偶、支那山東省の暴民二名の獨逸宣教師を殺戮するに會ひぬ。此報を聞くや、皇帝は直ちに東洋にありし海軍

少將デーデリヒ將軍に命じ、兵を率ゐて山東省に上陸せしめ、虐殺の復讐をなさしめんとしたり。將軍は直ちに命を奉じ部下の兵士六百人を引率して膠洲灣に至り、砲臺を占領せしめぬ。之と同時に皇帝はヘンリッ公をして軍艦三艘を率ゐ、獨逸を出發せしめしが、恰も皇帝誕生の祝日に膠洲灣に到着し、盛に示威運動を試みし結果、清國政府は大に驚き、其辨償として膠洲灣を所謂九十九年間獨逸に租借せしむることとなり、獨逸は是に於て東洋に於ける商業の中心地を得、海軍を置き、更に鐵道を内地に延長して限りなき支那の財源を採掘せんとし、又最近に至り大學を立て、支那人を根本的に教化せんとし、皇帝の亞細亞に對する抱負測り知るべからざるものあり。支那に於ける獨逸人の數は日々増加し、英人の減退せる機に乗じ支那人の歡心を求めて、英人に對する惡感情を刺戟し、英人の勢力に代らんとするものゝ如し。然れども獨逸の極東に於ける眞勢力は未だ甚だ熾なりと言ふこと能はず。其前途猶到る處に障礙の横れるを見る。

要するに皇帝の時代に於て獨逸の領土は擴張せられたり。新進の勢を以て亞弗利加、南洋、亞細亞の大陸に開拓遠征を試み、昨年植民局を擴張して新に植民省を

置き、植民局長官デルンブルヒを以て大臣となし、亞弗利加の事情に精通せるフョ
ンリンデクイスト氏を次官に任命するに至りし如き、如何に皇帝が植民事業に重
きを置くかを知るに足る。然れども此植民政策が國家經濟の上より論究して果
して如何なる程度まで有利なるや否やは頗る疑問に屬す。現に一九〇四年南亞
弗利加は年々暴民起り、時に之が討伐の費用として一億五千萬弗を費せし的事
實あり、又皇帝の熱心なる勸告あるに拘らず、面積十九萬英方里を有する亞弗利
加洲カメロンの廣大なる植民地に一九〇三年までの移住者五百餘人、一八九六
年七萬英方里を有する濠洲のウイルヘルムスランドに僅に九十餘人の移住者を
生せるを見ても、亦思半に過ぐものあらん。植民政策に失策の歴史を重ねたる佛
國政府の轍を覆むなくむば幸なり。

六 獨逸皇帝の近狀

吾人は既に獨逸帝國は現皇帝の時代に大なる膨脹をなしたることを述べたり
き。而して膨脹たるや、常に土地人口を増加せしのみならず、陸海軍備の充實經

濟社會の進歩、國際的關係の發展等、凡て國民的生活の進歩向上を意味す。而して
獨逸皇帝は率先して之を指導し、萬事皆彼の經綸に基く。
今翻つて支配せらるる帝國現時の狀態を觀るに、帝國の廣袤二十萬九千方哩、
人口六千萬陸には六十一萬の常備兵を有し、海には精銳なる艦艦を泛べ、帝國の
生産購買力の發達著しく、輸出入總額一九〇六年には無慮七拾六億萬圓を算し、
加之百萬方哩の植民地と、絶東に於て膠州灣を獲得し、國勢の進運隆なりと言ふ
べし。而して帝は外國に向ひては聯邦を代表し、宣戰、媾和の布告、條約の締盟等の
全權を一身に集め、獨裁の權力を掌握し、また一方に於て獨逸帝國をして文明的
活動に於て覇を稱せしめんとする皇帝の理想は着々實現せられ、文運の旺盛宇
内に比なく、二十一の大學を有し、世界の學生を收容し、大家碩學彬彬として輩出
し、獨逸は今や文藝科學の中心地となり、學問の淵藪となり、假令獨逸は外交植民
事業に於て他の先進國に一步を譲るとするも、此點に於ては疑もなく覇者たる
の名譽を壟斷することを得べし。
然れども吾人は此賢明なる皇帝の支配する新進帝國の前途に聊か杞憂なき能

はず。一八九六年一月十八日、皇帝は其信任する軍隊に向ひ聲を鋭くして「我等は必ず一神一帝國一國民を有せざるべからず」と言へり。皇帝の理想蓋し此點にあるべし。雖精細に其帝國內部の状態を観察するに、獨逸國民が眞正の意味に於て一國民と稱せられ得べきものにあらざるを知るに足るものあり。惟ふに獨帝國を巧に結合し、之を打ちて一九となし、毫も聯邦的痕跡を留めざらしむるに至らんことは、夙に獨逸國經世者の希望する所にして、ビスマルクが半生の心血を濺ぎしも、亦之に外ならざりしなり。

ウイルヘルム二世即位するや、更に其政策を継ぎ、聯邦國の結合力を鞏固ならしめんとし、各邦の君主に親交を結び、帝國の事件に關しては此等の君主に諮り、以て帝國の一員たるの念を鼓吹したるが、天性武を好める性質とフリードリッヒ大王を欽慕するの熱情は遂に帝をして益武斷主義に傾かしめ、他の聯邦諸國の利益を犠牲に供してまでも、普魯西の利益を計り、其有力なる階級に歡心を求め、以て全獨逸をして悉く普魯西化せんと勉めつゝあり。是を以て普魯西に反抗する中央黨は漸次勢力を擴張し、殊に帝が武斷主義に傾けるを見て、其宿敵たる社會共和

黨は日に勢力を得、一九〇三年には驚くべし既に八十一名の議席を占むるに至り、相率ゐて皇帝の政策に反對し、議會に於て堂々として皇帝の所置を非難し、其失言を攻撃し、其權力を殺がんとするものあるに至れり。豈にこれ皇帝の爲めに悲むべきの現象にあらずや。

次に又吾人は皇帝の領内にエルザス、ロートリンゲンの二州あることを忘るべからず。此二州は本來獨逸人種の作りし所なるも、長く佛國の支配を受け、佛蘭西風の感化を受けしが、普佛戰爭の結果として再び獨逸に割讓せらるゝに至りしかば、州民の怨恨甚しく、佛國に移住するもの多きを加ふるに至り、帝國政府も反省する所あり、一八七四年以來、之を懷柔するの得策なるを感じ、幾分の自治權を與へ、獨逸議會に代議士を選擧する權を許したるも、獨逸を憎惡すること甚しく、反抗の氣運頗る高まりしを以て、ビスマルクも深く其處置に窮し、現皇帝の即位以來、再び壓抑主義を實行したるが爲めに、人民の不平は其度を増し、歐洲の禍機猶其裡に伏在せりと言はざるを得ず。皇帝の之に對する所置頗る慎重を要するものあることは云ふまでもなし。

吾人は更に進んで皇帝の對外政略を概説すべし。獨逸皇帝の滿々たる野心と、燃ゆるが如き功名心と明快なる頭腦、凡ての方面に激しき活動を演せしむるも、唯彼が不謹慎なる言論と神經鋭敏にして眞に激怒し易き性質とは、時に奇禍を買ふことなきを保せず。帝は時に熱慮の遑なく、神速に事を決する故に、時に失敗を招くことあるは惜むべき事なりとす。

前世紀の末期に當り、亞弗利加トランスヴァールの國民が英國の壓制を憤り、反抗の氣勢を示すや、ウィルム皇帝は時の大統領クリューゲルに祝電を送り、暗に其獨立を煽動し、以て甚しく英の惡感情を買ふに至りしは、世人の耳に尙新なり。爾來皇帝は極力之を辯解するも、何等の功を奏せずして、其恨今日まで解けず。昨年十月獨逸皇帝がエドワード七世の誕辰を賀せんが爲めに英國に赴きし時にも、タイムス新聞は其社説に於て南亞戰爭の際獨逸皇帝の處置の惡むべかりしことを述べ、今や獨逸皇帝は其地位孤立となりしが故に、我國に歡心を求めんと欲するなり。我國民は獨逸皇帝の罪科を忘却すること能はずと酷評を下すに至れり。斯くの如く英國は獨逸の行動に慄らざるものあると共に、獨逸も將來英國の好

敵手たることを知るものゝ如し。今や獨逸は商業の發達、人口の過剰より領土を要すること益々急なり、而して此要求を満足せしむるには英國の版圖を蠶食するの外なく、獨逸皇帝は常に英帝國の盛大を見て之を羨望すること甚しく、獨逸帝國をして斯くの如く膨脹せしめんとするの念を絶たず。故に之と拮抗せんが爲めに海軍を盛大にし、蘇格蘭侵入を以て其目的となす。頃日、倫敦デーリー・メール社主ノースクリップ卿は、英獨戰爭及び日露戰爭の避くべからざりしが如く、到底避け得べからざる者なり。獨逸の海軍擴張計畫の完成を告ぐると共に平和は破らるべしと論じ、最後に至つて、獨逸皇帝はナポレオン一世の如く、天下の公敵を以て看做さるべきものなりと論せり。

次に獨逸皇帝は常に「獨逸の將來は海上にあり」と絶叫し、絶えず其實現に努む。而して英國の艦隊が優勢なる艦隊を利用して獨逸人民の生活に必要な穀物の輸入を防止することあらば、困難頗る大なりと言はざるべからず。故に皇帝は白耳義及び和蘭を併呑せんとするの念切なり。然れども皇帝が此等の二國を併有するにせば、佛國は政治上頗る困難を受くるが故に、極力獨逸の野心を防遏する

に力を用ひざるを得ず。此時に當り獨逸皇帝は此二國が野心の敵なりとの故を以て、其後援を三國同盟に求むること能はず。何となれば三國同盟は最早有名無實のものとなり、何等權威を有せざればなり。最近に至り同盟國の一なる伊太利は態度一變じ、却つて英佛と相提携するの傾向を示したることは、一九〇六年のモロッコ事件に於て獨逸に與せずして獨立の態度を取りしに依りても察することを得べし。アルゼンチラスの會議に於て獨逸は佛國の勢力を除去せんことを、英國が佛國に助力するありて其計畫實行せられず、又露佛同盟は獨逸に取りて危険なる政策となり、南洋に於ける獨逸の侵略的政策、南米に於ける絶えざる勢力の扶植は合衆國をして益、疑惑の念を起さしむるに至り、今や皇帝の位地孤立となりしが故に、近來力めて歐洲の宮廷を訪問し、其歡心を求むるに汲々たるに至り、皇帝が外交上に於ける得意の時代は既に去りたるを謂ふべし。然れども今や皇帝齡漸く知命に達し、前途尙春秋に富む。若し躁急功を急ぐことを避けて靜に政治をなすの道を悟らば、光榮ある獨逸の前途は多大の希望に滿つべけん。

第十三章 ビスマルク

一 その成長

蓋世の英傑、鐵血宰相ビスマルク(Otto Eduard Leopold von Bismark)は一八一五年四月一日、有名なるウーターローの戦に先つこと殆ど二ヶ月半、父フェルデナンドの莊園、ブルデンブルグなるシェーンハウゼンの邸に生れたり。

シェーンハウゼンのビスマルク家は頗る舊家にして、古來多くの名將、外交家を出せり。或は三十年戦争に於て獨逸皇帝に抗したる者もあれど、佛國に對してはユーグノーの戦以來、或時は宗教上の自由の爲めに、或時は政治上の自由の爲めに、戈を握つて厥起せざる者一人もあらざりしとは、ビスマルク公の誇なりき。其母系を辿るに、曾祖母の如きはフリードリッヒ大王が太子たりし時、太子と水魚の交を結びたるカッテ中尉の近親なりき。而して母系に依つて名元帥フォンデルフリンガーの血を享けたり。其父系を原ぬるに、ブランデンブルグの小貴族にして、祖先或は狩獵を事とし、或は軍事に干與し、或は耕耘に従へり。母をメンケンと云ひ、賢

明温雅、事務の才を具へたる中流官吏の女なりき。
 ビスマークが伯林の中學を卒へて、ハノヴァー大學に入るや、常に飲酒に耽り、決闘に雷名を轟かせしが、此頃彼は米國人モトリーと深交を結びぬ、後年一は十九世紀の最大なる花形となり、一は十九世紀の最大なる史家となる、奇縁と云ふべし。
 ハノヴァー在學中、彼は試験に合格したるとなけれども、二十八回の決闘中、月桂冠を得ざるとは稀なりき。伯林に歸るや、當時の碩學サビグニーの法律學を聽講したれども、彼は之に慊焉たらず、聽講僅に二回にして、復たサビグニーの學識に頼らざりき。遮莫歸來ビスマークの勉學は驚くべきものにして、嘗つては懶惰なりし彼も、こゝに大學三ヶ年の學得を半歳の間に復習し、先づ第一次の國家試験に合格したりき。

彼が外交家たるの天資を發見したるは彼自身にあらずして、實に彼の母なりき。初め彼は行政事務に與はり、一生を田舎紳士として過さんとし、伯林裁判所の陪審官となり、後エークス・ラ・シャール裁判所に轉じたりしが、同地に在つては彼は上官の命に従はず、頻に行政事務を學びたり。

彼が普魯西近衛兵狙撃隊一年志願の役務を終るや、グライフスワールドに赴き、農業其他の實科を聽講せり。父の浪費は家庭を殆うしたりしかば、父はボメラニアに於ける資産の管理をビスマーク兄弟に托して、シエーンハウゼンに隱退しぬ。此時彼が家産恢復に當れるは、蓋し後年獨乙帝國復興の大任を負ふ彼に取つては、最も相應じき修養期なりき。地方生活を以て其天職なりと信じたる彼は、只管に家務に執掌し、或は市場に羊毛、穀類を鬻ぎ、或は木材を検査し、或は地代を集め、傍ら地方議會に一席を占めたり。終日勞苦して家に歸り、一椀の澁茶に疲憊を醫するが如きは、彼の趣味にあらず。薄暮馬に鞭つて二三十哩の遠き村里の夜會に列するは、其好む所なりき。酒はその最も嬉める所、或時三樽の酒を積みたる荷車洪水に押し流さるゝを見て、愛んで措かざりしと云ふ。彼は能く喇叭を吹奏し、小銃を發射して、田園の寂寞を破り、或は近隣の營舎より豪者を招きて宴を張り、遂に彼等輜達放縱なる一群の牛耳を執るに至れり。彼はシャンペンと黒麥酒とを混合して、鯨飲飽くを知らず。或は賓客の耳邊に拳銃を放ちて喫驚せしめ、或は應接室に狐を入れて家人を恐怖せしめて、打ち興じたり。斯かりし程に衆彼を渾名し

て「狂のビスマーク」と呼べりと云ふ。

されど斯くの如きは彼の半面に過ぎず。新刊の書籍は酒樽と共に常に彼の許に達せりき。彼はスピノーザを熟讀し、マキアヴェリイを涉獵し、壯健彼の如きも、讀書三昧に入る時は、心氣興奮して顔色蒼然たること珍しからず。而して之が解毒劑たりしものは軍隊生活なりき。嘗つて槍騎兵隊にありける時、彼の從卒が馬に水飼はんとして誤つて川の深みに陥り、將に溺れんとするを救うて危難救護褒章を授けられたるが、これ彼が得たる最初の勳章にして、其生活を通じて最も尊き恩賞なりき。彼は軍隊生活を愛したれども、天下平和の時に在つては徒に精力を浪費するものなるに想到するや、彼は退いて一向に農事に従へり。彼が不安、疑惑、失望より心を轉せんが爲めに、佛、英、和の諸國を漫遊したるは此間なりき。

一八四五年、父歿り、兄と遺産を分ちて、彼はボメラニアの三所領の一なるクニ―ホフとシエンハウゼンの祖先傳來の邸宅とを得たり。後二年間、或は訴訟事件に當り、或は山野に狩獵し、或は護岸工事を經營して、尙地方生活を營みたりき。彼がエルベ河堤防工事の地方監督者に擧げらるゝや、其名譽職なりしに拘らず、用意

周到事務敏活、身骨を愛まず、私事を顧みざりき。

一八四七年七月二十八日、彼は豫て相愛せる卿士の女ヨハンナと華燭の典を擧げぬ。彼女はビスマークより若きこと九年、獨逸に稀に見る良妻なりき。

一八四七年二月三日、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世王國八地方議會より成る國會の建設を裁可し給ふや、ビスマークはボメラニア地方より選ばれて代議士となり、伯林國會に入れり。時に年漸く三十二、既に人生の盛期なり。而して彼や軀幹長大、舉止放膽、眼光炯々、これ眞個の偉丈夫なりき。

二 國會時代

憲法とビスマーク 千古の英雄ナポレオンが配所エルバ島を脱するや、普魯西も他の歐洲諸國と同じく之が討伐に腐心し、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は成文憲法の發布をば約して國民の忠節に訴へぬ。是に於てか國民は狂喜して王命を奉じ、さしものナポレオンをセント・ヘレナに流して復た起つ能はざらしめたるも、而も國民は誓約の實行を見ず、舉國失望に沈みぬ。一八四〇年、フリードリヒ

ウィルム四世位に即くや、努めて胸襟を披瀝し、寛仁大度を粧ひ、以て大に國民の囑望する所となりたれども、憲法を以て臣下に不適當なるものなりと宣言せらるゝに至つて、國民の意氣は再び沮喪したり。後國王英國に遊びて親しく國會を觀、又ヴィクトリア女皇の來遊に際して國會開設の忠告を受け、密に覺る所あり、會國內議論沸騰して形勢不穩なるものありしかば、王は時局に察し、國內八地方議會より成立する國會の開設を裁可し、一八四七年四月、伯林、聖ゼームス宮殿に開院式を舉行せられたり。

ビスマルクは選ばれて此代議士たり。而も彼は國王のこの大讓歩を慷慨し、大權回復に努めき。而して彼と志を同じうする忠節の士は普魯西の武士階級なりき。國民は新に一大勢力となりて、種々の要求をなし、王が爲めに逆鱗し給へば、ビスマルク亦怒り、奮然として國民と戦ひ、國王の忠臣たる彼が演壇に現るゝや、痛罵冷評、妨害、喧噪到らざるなかりき。

彼が爲政家として顯はるゝに至りしは、猶太人開放の討議に於ける其政治的宗教的告白に在り。彼は斯かる急激なる社會上の大變革を以て時機尙早なりとて、

頑然として曰く、然り、予の意見は暗黒にして時代後れなり。而も所謂我偏見は母より享けたるものにして、又如何ともする能はずと、而して反對黨の猛烈なる攻撃に對して彼は、議會の多數が猶太人の解放は進歩を意見するものなりと承認するも、予は之を承認せずと斷言し、十一日間の論争の後、國會は閉ぢられたり。爾來國王は憲法を制定せんとしたれども、國民の期する所常に王の希望に越え、兩者相容れず、普國を擧げて紛擾の巷と化した。時恰もビスマルクは新婚の夢圓にして、新婦と相携へて南歐を遊歴したりしが、王亦國政を皇太弟に託して伊太利に遊び、ゆくりなくもヴェニスに於て彼に遭ひ給へり。一日彼は王に招かれて午餐を共にし、彼が平生懐く所の憲法論及び獨逸統一論を吐露し、論議縱横、敢て憚る所なかりき。これ彼が後半世を定むべき一大事件たりしなり。

此秋に當り、普魯西の國狀は亂麻の如く、政治的離反は社會的困難と共に益甚しく、殊に巴里に於て、ルイ・フィリップ王廢位せられ、共和國建設宣言せらるゝや、獨逸國內は動搖して風雲暗愴、國王と國民との紛争は愈劇しく、遂に一八四八年三月十八日、伯林市中に劍戟閃き、鮮血迸るの慘劇を生じぬ。此前年新婚の旅路より歸れ

るビスマークは、伯林の慘劇を聞きて憂苦して以爲らく、慘劇の原因は唯竊盜が欲望を満さんとするに過ぎず。而して凡ゆる大都市は欲望と革命の温室なれば、地球上より是等大都市を除くに若かずと。これ所謂ビスマークの都市破壊論なり。

國王は熱狂せる國民の爲めに暫時に蒙塵し給ひ、宮殿には國民の所有と彫付けられ、或る旅舎の如きはウイレム親王の肖像を其窓より投棄したり。大赦せられたる波蘭人、猶太人は固より掠奪を逞うする囚人すら、自由民權を叫び、國內隨所に波蘭の國旗、革命黨の三色旗は翻れり。是に是てかビスマークは決然起つて國會に赴きたるが、議會は紛亂喧擾、動もすれば争鬪し、六ヶ月の開期も何等決定する所なくして終り、國會の讓歩も正當なる國民の要求に比しては唯蒼海の一粟に過ぎず。内閣は交迭又交迭、毎に益、寛大宥和に努めたるも、而も議會の容るゝ所とならず、否更に徒に議會をして佛國革命に倣うて立法部たらんとするに至らしめたり。爲めに伯林は再び擾亂し、國王は此民主的恐慌より脱れんが爲めに議會をブランデンブルグに移すに至れり。勿論此時多大の反對ありしも、兵力を以

て之を敢行し、伯林を追はれたる議會が再びブランデンブルグに集合するや、國王は斷然として之を解散し、同時に頗る寛大なる憲法を發布したり。一八四九年一月、國會を召集したりしが、代議士は普通選舉權に依つて擧げたり。

ビスマークは此間祖國が時勢の渦中に捲き込まれて、全國民主義の絶叫に満てるを見て痛心に堪へず、統一せる保守黨を組織せんと試みたり。而して彼は革命を防遏し、普國及び獨逸の進歩發展の爲めに機關新聞「クロイツツァイツング」を設けたり。其主筆の言に依れば、議會中一日としてビスマークの自ら起稿せる論文を見ざることなしと云ふ。

彼はサンズ・シーシーに於て國王に召されたるを屢なりき。或る時王は彼に憲法政策の可否を諮ねたるに、彼は憚る所なく、其承認すべからざるを應へたり。王問ふらく、然らば卿は朕が凡ゆる寛大なる改革事業を援助するものにあらざるか。答へて曰く、陛下よ、始終悉く助くること能はず。王が卿は忠良なる臣下として爾か答ふるかと反問し給ひしに、彼は俄に緘黙し、勃然として色を作しぬ。王其真情に感じ、信任愈、深く、爾來彼は禍福共に忠良なる臣として國王と進退を共にした

之を要するに、ビスマークは憲法の發布を悔みたる一人なりしなり。而も憲法の發布は天下の大勢なり。唯彼は憲法が承認したる國王の權利上に削減縮少せらるゝを防ぐに努めたりき。第二次の國會（一八四九年八月七日—一八五〇年一月二十六日）にも亦彼は選出せられ、寢食を忘れて王權を擁護して曰く「國家の運命は暗愚なる民主主義に託せんよりは、賢明なる專制主義に託するを以て安全なり」とす。而して憲法の運命を良好ならしめんが爲めに、彼は上院の組織を更めて、土地所有者の代表者に代ふるに、世襲貴族を以てすべしとの意見を抱持したり。

獨逸統一問題　自由民權と獨逸統一、憲法と獨逸諸邦の聯合、これ十九世紀前半に於ける獨逸民族の翹望なりき。二月革命の起るや、國民舉つて全獨逸議會を要求するに至り、斯くて一八四八年五月十八日、第一次國民議會は開かれ、憲法の制定と、フリードリッヒ・ウィリム四世及び其子孫を世襲の獨逸皇帝に推戴せんとを決議したり、議會は委員を派して帝冠を捧呈すること三度、普國王之を拒むこ

と又三度なりき。普國王が國民の輿論を斥けて帝冠を受けざりしは、諸王侯及び自由黨の意嚮を慮りてなり。而もこれ決して普國王が獨逸統一に冷淡なるが故にあらず。サクソニー及びハノーヴァーと同盟したるが如きは、埃太利を除きて獨逸諸邦を堅固に結合せんが爲めの準備に外ならざりしなり。

一八五〇年二月、エルフルトに於て第二次國民議會は開會せられたり。ビスマークは又其一議員たりしが、年少の故を以て議長の書記たりき。エルフルト議會の事業はフランクフルト議會の事業と等しけれども、開期は後者が一年以上たりしに反して、前者は僅に一ヶ月に過ぎず。憲法問題に關しては、フランクフルト議會が決議したる憲法は人民の慘憺たる苦心に成りたるものなれども、諸王侯之を拒み、エルフルトにては諸王侯之を起草し、人民之に協賛したれども、諸王侯之を空ならしめたり。而も獨逸國民の大多數は固よりエルフルト議會を重視せざりしかば、其憲法の空文に歸するも敢て失望する事なく、自由黨の機關紙は普魯西貴族黨が偏狹なる愛國心を以て自黨の利害を維れ思ひ、聯邦の成立を失敗せしめたりとて、貴族に對して罵詈訕笑を極めたり。

翻つて埃太利は他の諸邦の賛成によつて多年中止せる聯邦會議を復興し、普魯西にて出席を勧め來りしが、普魯西は之を拒絶したるより、端なくも埃魯兩國の眞意は暴露せられ、果ては干戈相見えんとせしも、露帝ニコラス兩國を牽制し、兵火の危を轉じて談論の間に局を結びぬ。これ即ちオルミツ條約なり。結果は普魯西をして獨逸統一の宿望を棄て、埃太利を首席とし、聯邦會議を承認せしめたり。爲めに普魯は憤怒の情に堪へず、埃國は意氣揚々たりき。ビスマークは此條約の辯護者なり。蓋し他日の光明を期して一時堪へ難き屈辱の苦痛を忍ばんとせるなり。

オルミツ條約締結後一ヶ月半にして、埃國主宰の下に聯邦會議はドレスデンに開かれたり。獨逸國民が幾星霜の奮闘と鮮血とを以て成せる事業も、國王の誓約も、愛國者の努力も、哲學者の夢想も將に悉く沙上の樓閣と化したんぬ。當時ビスマークは統一問題を以て時勢上未だ良果を得ざるべきを思ひ、却つて結合力薄弱なる昔の聯邦會議に歸り、依つて以て革命を根絶するを得ば、斯くの如き服従も寧ろ喜ぶべしとなせり。而して彼はフランクフルト駐在普國公使フォン・ローへ

ンの書記官に舉げられ、ビスマークの議會生活は此に終を告げたり。彼は極めて獨創的にして、敢て雄辯ならざるも、能く敵を壓し、引證豊富、攻撃激烈、答辯剴切、機智に巧に、諧謔を弄し、加ふるに憲法及び軍隊組織に精通し、歴史古典に明かに、各國語に通達し、資性剛健高尚、愛國の情熱烈なる偉人なりき。

三 外交官時代

一八一五年、維納會議の結果設けられたるフランクフルト聯邦會議は素と帝國會議と異り、一面獨逸聯邦の行政會議にして、一面獨逸聯邦の攻守同盟なり。一八五一年五月、聯邦會議再設せらるゝや、ビスマークは普魯西の代表者として外交の舞臺に現はれたり。彼がフランクフルトに赴くや、反對黨は冷評と嘲笑を以て迎へ、或は彼を以て外交界の黃口兒となし、或は無知無識の無謀者となせり。而して彼自身は此會議を目して衆愚の集合となして曰く、會議は暗愚なる輩の集合にして、予自身は恰も胡椒の如しと。

斯くて與黨が彼の性格を領解するに先ち、彼は與黨の人物を觀破し、其與黨に多

大の缺點あるを見たり。即ち彼は其手腕を振ふに先ち、四圍の外交家を研究したり。態度の冷靜、科學者と異らざりき。而して彼がフランクフルトに到りて未だ一旬ならずして、伯林の君主に對して、任地に於ける「主要なる人物」に關して報告を奉れり。其描寫の精緻、文彩の秀麗、斗筭の文人の遠く及ぶ所にあらず。即ち彼は未だ會議の演臺に上らざるに、其與黨と談笑諧謔し、青年時代の放縱耽溺を語りて秋毫も藏さず、胸襟を披ける間に、頻に其犀利なる觀察を恣にせり。

資性果斷にして、舉止禮に適ひ、交際に巧にして、諸般の知識を具へ、言語を用ふるに周到にして、事務の才あるものこそ、實に外交官の資格と云ふべけれ。普王明鑑を垂れて幾多の愛國者中より選拔し給へる國士ビスマークは、蓋し此資格に間然する所なき外交家なりき。彼は實に忠君愛國の權化、普國武士道の花なり。

王弟ウイレルム親王は兄國王に比し、聰明にして鑑識に富み、王の神經質なるに反して、親王は寧ろ膽汁質なりき。王は詩人、大學教授、法科學者と交はりたるも、親王は將軍に親み、軍事改革以外考慮を費す所なかりき。親王深くビスマークを信任し、後日相協力して祖國の爲めに大事を成すべき此二人の交は、實に水魚の如かりき。

フランクフルトに於けるビスマークを知るべきものは、唯其報告と彼の私信とに據るの外なし。而して彼の書翰に至つては奇智と諷刺、情操と想像とに豊富にして、觀察明敏、行文簡勁、多くは忙中閑を盗みてものしたるに拘らず、其妙は神に入り、彼の書翰は彼の自然の反照なりき。其書翰に依つて察するに、彼はオルミュツの屈辱を辯護したりと雖、これ政治的動機より出でたるものにして、彼は私に他日の復仇を期し、決して普國を以て埃國の臣妾たるを以て甘んじたるものにあらず。即ち他日時運の熱するに及び、埃國と絶たんことを最も激烈に主張したるものは彼なりしを以ても知るべし。

由來外交文書ほど世に平坦無味なるはあらず、而もビスマークに至つては然らず。觀察は銳利徹底し、行文は精巧獨創的に、常識は圓滿熟達し、諧謔は津々趣味あり、諷刺は鋭さも害悪なく、頓智は輕妙極りなく、論證は確實、一として彼の偉大を表せざるなく、實にパーマー、ストーン卿の通俗にして力強き文體、ウエリントン侯の簡勁なる叙述、サリスベリー卿の曲折せる文彩を兼備せるものなり。而して彼

の用意の周到なる、其見聞は之を報告するに巨細一として漏らすことなく、斯の如きを以て特色とする米國外交官等の遠く及ぶ所にあらず。宜なり、彼が使臣として完全なるものなりしや。

彼は普國國會に於て新聞の自由を制限せんことを主張したりしが、フランクフルトに於て之を實行するに至れり。同地に民主主義の一新聞あり。聯邦會議場に掲げたる聯邦會議旗を侮辱して止まざりしが、彼は嘗つて同新聞が彼の國體を惡罵したるを含み、彼はフランクフルト行政官廳に對して、之が取締をなすにあらずんば自由行動を執るべしと通告し、同時に同地駐在の普國守備隊に對して、彼の命令を受くると同時に、惡德記者を縛し、其新聞社を占領すべきを要求せり。軍隊は之を諾し、且つ同自由黨元老院議員をも捕縛し盡すべきを誓ひたるより、市當局者は直ちに惡德記者を撲滅し、以て幸に事なきを得たり。

フランクフルトに於ける彼の使命は、聯邦會議に於て普國の勢力平衡を保つに在りき。普國の勢力に及ばざる三十有餘の諸小邦が、其投票十五を以て普國の一票に相當するものと見做さるゝに至れるは、ビスマークが第一の成功なりき。彼

同地着任後數月ならずして、當時の状態に於て、普國兩國間に大なる懸隔あるは聯邦會議全體が塊國に左袒するが故なるを觀て、傲然として曰く、「若し會議てふ衆を待みて普國を壓迫するが如きことあらば、干戈に訴ふるも尙敢て辭せず」と。而して當時普國の最も憤慨に堪へざりしは、塊國が會議の議長席を占め、支配權を握りて專横極りなかりし事なりき。然れども其横暴に苦むこと尙一年以上、而も其間に彼が會議の組織を論じて、普國及び他の諸小邦の權利を主張し、頑然として寸毫も譲らざりしかば、私に諸小邦の感謝を受けたりき。

彼がフランクフルトに赴きて未だ幾も經ざるに、全世界を震撼せる大事件は起りたり。時は維れ一八五一年十二月二日、佛蘭西共和國大統領ルイ・ナポレオンが腕力處分を行ひて佛國の實權を握りたることは是なり。都市破壊者たるビスマークは、巴里市民が街衢に城壁を築きて戰へるに同情せざりしが、嘗つては普國に於て議會組織の發達を憂ひたるビスマークは、佛國の國會が暴力に依つて沈黙せしめられたるを見て苦痛を感せざりしか。

塊太利は宿年の仇敵と相和せんことを欲したりしことは云へ、ナポレオンの皇帝

たるを承認したるは早計なりき。埃太利のナポレオン三世承認と共に、佛字雜誌はフランクフルトに發刊され、熱心にナポレオンの辯護に力めたり。ビスマークは其記事の直接維納外務省より出でたるべきを信じ、一日該新聞所有者にして埃國外相の義弟なるフリント男に會し、大膽にも男が新佛帝に關係を有せりとして祝賀せしに、男は此諷刺を聞きて勃然として怒り、其無關係なるを辯せんが爲めに、其記事の維納より來るを告げたり。是に於てビスマーク(當時代理公使なりき)は巧妙に佛帝の承認に關して錯誤せる協商を遂げ、埃國と共に「歐洲の平和を保障し、相互間に現存せる條約を尊重すべき」と約せしめ、以て巴里に大使を派遣するに至れり。

ルイ・ナポレオンは佛に於ける民主主義を壓服したるものなれば、埃普二國が之を援くるは當時の共和的運動を防碍し、或は之を滅亡せしむるに大なる力あるは論を俟たず。斯く革命思想の撲滅に就ては二國一致したれども、其手段として新聞抑壓、政黨制御等に關しては、各意見を異にし、北海艦隊新設に關しては全く其主張を異にせり。即ちビスマークの云へるが如く、埃は過去及び將來に於て特

別なる犠牲を支拂はずして、直接間接に艦隊の司配權を握らんとし、普は極力之が破棄に盡したりき。而して國防問題以上に兩國が其意見の氷炭相容れざるに至りしは商業政策なりき。普國は關稅同盟なる此商業問題に於て秋毫も譲らず。一八五二年、ビスマークが維納駐劄代理大使として埃國に駐ること數週日、彼は此間に埃國が其主張を固執する程度を知るに怠らざりき。埃帝は聰明英邁、事理に通せる年少有爲の君にして、ビスマークに對して極めて懇篤なりき。帝は全獨逸國民に關稅統一の制を布かんとし、ビスマークは埃太利を關稅同盟以外に置かんとせり。兩者固守して下らず。乃ちビスマークは普魯西主導の下に關稅同盟を設けて、埃太利と通商條約を結び、埃太利の圏外に於て獨逸國民の商業的團體を設け、以て、獨逸帝國統一の基礎をなさんとせしなり。一方に於て維納の新聞は悉くビスマークの若輩なるを嘲り、一方に於て彼が正當なる協商を遂げて埃太利の期待の如くなきは、最高の勳章を授けらるべきを勸告したりしも、彼は頑として動かざりき。

當時彼の地位は比較的高からざりしも、彼の意見は其所屬長官の重んずる所な

りき。東方問題に對する普魯西の態度は頗る譎詐を極め、公明正大と云ふべからず。而も其政策は露國の憤怒を買はざらんことを望み、埃太利に屈服せざらんとして劃策したるものなりき。ビスマルク以爲らく、此二動機は密接の關係を有するものにして、國王は只管過去の恩顧を徳として露國と隙を開くを恐れたれども、過去と未來とは比較すべきものにあらずと。即ち彼の胸中已に露國の爲めに嚴正中立を宣言するの計劃ありしなり。ビスマルクは佛國が自國の爲めに利害の關係なき普國に戰爭の悲酸を嘗めしめんと威嚇せるを見て憤り、縱令巴里會議より除かるゝとも、決然として西方諸國の侵入を禦がんと言明せり。彼がクリミア戰爭に對して採れると同じく、普國否獨逸は何等利害の關係なきの故を以て嚴正に中立を守りしなり。當時白耳義王は英國王の傀儡なりしかば、レオポルト王は英王の意を受けて、普國王フリードリヒ・ウィルヘルムに埃太利と提携せんことを勸告し、且つ威嚇して曰く、普國にして其東方政策の結果として、佛國の攻撃する所となりたらんには、英はライン川左岸の領有をナポレオンに許すべしと。ビスマルク之に應へて曰く、ライン河畔の領有者は即ち白耳義の所有者たるべ

し、英國王と白國王とは須らく是に想到せらるべからずと。斯くの如くにして普國は屢諸國の強迫と懷柔との爲めに危うせられんとしたれども、變幻出沒端倪すべからざるビスマルクは能く之を支へたりき。而も此頃歐洲の形勢がビスマルクの手に依つて業に已に劃定せられつゝありしとは何人か能く夢想したりしものぞ。誰かクリミア戰爭に於ける普國の中立が、他日獨逸統一の大業の伏線たりしを先見したりしものぞ。

セヴストポールの陥落と共に、局面は轉じて外交の舞臺は展開しぬ。普國も他の列強の如く政治的獲物の分配に與からんとして平和會議に列し、巴里條約調印後、ビスマルクは時局に關する意見を纏めて報告を發したり。其堅實なる論據、徹底せる議論、通俗なる叙述他に之が匹敵を見ず。彼は此時既に普國が埃太利を驅逐すべき二戦役を豫言したりき。即ち彼は普國の存立の爲めに、獨逸統一の爲めに、普埃戰爭の避くべからざるを見たるなり。

普國はクリミア戰爭に於て埃國を制肘したりしかば、埃國は之が復仇を企て、一八四八年に根蒂を生せるノイシヤタル事件に之が機會を捕へたり。ノイシヤタルに

於て、一八五六年の夏國內の王黨は奮起し、一舉共和黨を覆さんとして、反つて其破る所となり、或は捕へられ、或は遁れたり。普國は瑞西に對し、捕へられたる王黨の解放を迫りたるが、ベルンに於ては其斷崖重疊の中に在るを待みて之を拒み、獨逸聯邦の決議も、列國の勸告も、將たナポレオン三世の強迫も、山間の住民を動かす能はず。應て列國會議の開催となり、最後の通牒となり、動員となり、普國は兵力に訴へても、其要求を容れしめんとせり。埃國は普軍の聯邦通過を妨げて昔の仇に報いんとし、瑞西も亦普國が瑞西征討を實行し得ざるべきを思ひたるが、此際ビスマルクは斷乎たる態度に出でんことを政府に勸告したりき。普軍未だ動かざるに先ち埃國はノイシヤタル問題の解決の爲めに瑞西中立條約に關係ある列國の會議を促し來りしかば、普國にして之に反せんか、遂に連衡せる故に當らざるべからざるを以て、ビスマルクは止むなく軍事的行動を中止し、普國は賠償金を受けてノイシヤタルの主權を捨つるに至れり。

斯くて幾ならずしてフリードリヒ・ウィルヘルム四世は精神に異狀を呈し、一八五七年、ウィルヘルム親王攝政となり、越えて一八五九年一月二十九日、ビスマルクを露國

公使に任じたり。攝政親王國政を繼はすに至り、茲に普國の政治は一新紀元を劃したり。時や全歐洲に亘りて低氣壓に加ふるに低氣壓を以てし、風雲轉た急にして、既に佛國は有名なる新年通知を發し、埃太利は佛國とサルデニアとの聯合軍と兵馬の間に相見んとしたり。ビスマルクは普國をして永久に埃國の羈絆を脱せしめ、獨逸統一の大業を成すは方に此秋に在りとなす。極力政府をして埃國を援くるが如きとなからしめんとし、臆病なる國務大臣の爲めに謬られたるウィルヘルム一世(一八六一年即位)に、諄々として王が埃國の爲めに調停の勞を執るの不利なるを説き、飽くまで自己の意見の正當なるを信せしめんと努めたれども、王は既に佛國てふ侵略者に對しては、全獨逸を舉げて埃國を援助せざるべからずと云ふ輿論に左袒し、ビスマルクの切言に耳を貸さず。一代の英傑ビスマルクも遂に暗流に押し流されて彼得堡に赴くに至れり。彼は伊太利戰爭前、外交界の風雲暗澹豪雨將に來らんとする時、フランクフルトを去れり。彼は前後八年、奮勵能く成功したりき。彼は其地位を去るに當り、該地に於ける經驗の結果を報告し、埃伊露の國狀より觀て、普國をして獨逸聯邦を鞏固にせしめ、而も三國の羈絆を脱

するを得べきの好機は方に今日に在りとし、今にして決然たる態度に出でずんば、須らく今日に於て聯邦を解散すべしと極言し、獨逸統一の大問題を解決するの途、唯一に鐵と血とを以てするに在りとしたりき。

ビスマルク露國に在ること三年、其間露國の國情、人物、其他萬般の研究に怠なく、社會各方面の寵兒とあり、皇室の御覺え殊にめでたかりき。狩獵は彼の最も興味を覺えたる所にして、常に毛皮、長靴等に身を堅め、晝猶暗きスラボニアの森林を道ひき、彼曰く、舞踏會又は演劇等に赴けば、忽ち寒胃に罹りて食慾進まず、熟睡するを得ざれども、狩獵に出づる時は身心頗る爽快なりと。出遊して莫斯科に在ること數年にして、マゼンタの戰報を聞き、外交事務の多端ならんことを思ひ、蒼皇として彼得堡に歸任せしが、埃軍のマゼンタに敗るゝや、普國は時を失せず、動員して緊急の事變に備へたりき。

是より先、一八五九年四月、埃國の大公伯林に來り、共にサルヂニアを侵略せんことを慫慂せしも、攝政親王之を拒絶したるを聞き、ビスマルク大に悦びたり。されど戰局の進歩と共に、普國の人民は、佛國が勝に乗じてライン左岸を掩有し、且つ

ライン同盟を再現せざるやを憂ひたり、當時普國の態度は、武裝的調停に在りき。これ時の外相シュライニツ男がソルフブローノ一戰争の夕、ビスマルクに送れる通牒の結果に見るべし。曰く、適當の時期に於て大閱兵式を行ひ、以て平和問題を列強に附議すべく、我政府は伊國に於ける埃領の保全を以て主張すべしと。同時に露國駐在公使ビスマルクをして露政府に英國駐屯公使ベルンストルフ伯をして英政府に埃國の主權と伊太利に於ける埃領内の伊國人の希望とを調和せんとする普國の企圖に賛同せんことを勧誘せしめ、露國は之を諾したるも、不幸にして英國の容るゝ所とならず。ビスマルクは普國が斯くて戰爭の渦中に投ずべきやを恐れたれど、彼の憂慮は七月十一日を以て締結せられたるヴェイフランカの和約に依つて消失したり。埃國は豫て普國の隆盛を妬み、普國が動員出帥の準備をなせるを見て之に備ふる所ありしが、攝政親王は嚴として動かす、其態度恰も聯邦軍の總司令たる以上に強固なるものありしかば、自から普國は獨逸諸小邦間に重視せらるゝに至るや、埃帝フンシスジョセフ帝は屈辱を忍びてナポレオン三世の媾和條件を甘受せざるを得ざりき。蓋し埃國に在つては、佛國に對する

屈辱は聯邦會議に於て普國に譲るに優り、伊國に於ける所領一州の割譲は、獨立に於ける優越權を失ふに優りしなり。而して佛國も普國の強硬なる態度を見て其兵を收めたるが、これヴァフランカの和議を講ずるに當り、佛國は埃國と約するに、兩國同盟の下に、普國に當らんことを以てしたるに因るものゝ如し、而も此講和は一見普國の術中に陥りたるの觀あり。即ちビスマルクは獨國が安全を得たりしのみならず、反つて埃軍の缺點を知り、一朝機に乗せば、埃國を全獨逸より除外するの極めて易々たるを覩、心私に慰め且つ期する所ありき。

伊太利の統一運動は獨逸國民を刺戟すること少からず。國民は舉つて獨逸統一の問題に熱注するに至れり。而して普國は獨立再興の承認を得んが爲めには、ナポレオンに對してライン河左岸の地を割與するも尙辭せざるべしと疑はるゝに至り、即ち佛露協約を基礎として斯かる提言をなしたりとせらるゝや、ビスマルクは答へて曰く、我を陥れんとするものは佛人にあらずして獨逸人なりと。又曰く、我斯かる提言をなしたりとの實證を有するものあらば、我直ちに千金を彼に與ふべし、我は生を獨逸に受けて以來、祖國の危急存亡の秋に際し、唯其國力に

依頼すべきを論じたる外他に意見を述べたることなしと。ナポレオン三世がラインの地に垂涎し、如何にもして之を領有せんとしたるは事實なり。一八六〇年六月、之が素地を作らんが爲めにバーデンに赴きたるが、普國攝政王は二三聯邦君主と共にナポレオン三世に會見し、獨逸國民は此會見を以て獨逸領土保全の確證なりとせしかば、流石厚顔のナポレオンも獨の領土に手を觸るゝに躊躇せざるを得ざりき。これナポレオンがウイレム親王に一籌を輸したる第一歩なり。次で攝政親王はテブリッツに於て埃帝と會見し、ビスマルクは此會見が第二のオルミュツに終らんことを慮りしが、幸に事なきを得たり。テブリッツの會見の後數箇月露埃の二元首及び普の攝政は歐洲時局問題を解決せんとしてワルソーに會し、ビスマルクはゴルチャコフと共に露帝に従ひ、ホーヘンツォルレルン公は攝政に伴はれ、レヒベルヒ公は埃帝に隨ひぬ。當時普國宰相ホーヘンツォルレルン公は其意見ビスマルクと一致し、彼と共に時局に就て懇談夜を徹したると珍しがらざりき。公はビスマルクの偉材に驚嘆し、此恐るべき大膽なる政治家に普國の外交を託せんことを攝政親王に薦めたるも果さず、而もビスマルクが他日の大宰相

たるべき能力を認めたるものは實に公を以て第一人とす。
一八六一年一月二日、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世易簣し、攝政親王大統を傳承してヴィルヘルム一世と稱す。獨逸統一の曙光之より露る。ビスマルクの信任愈々厚く名は駐露公使なれども、實は大宰相と異ならず。一八六一年の夏、バーデン・パルデンに召されたるも蓋し之が爲めなり。十月八日、ゲーニヒスベルヒに即位の大典を擧ぐるや、ビスマルクは歸りて盛典に列じ、王は彼に贈るに閣下(Excellency)の稱を以てせり。

獨逸統一は民衆の悉く一致する所なれども、之が平服に就ては區々其意見を同うせず。普國下院の大勢力たる進歩黨過激自由黨は王の陸軍改革(兵員の數と組織の)に要する豫算を承認したれども、反對黨は劇烈に之を否認し、此に六星霜の間、紛争に紛争を重ね、内憂外患並び起らんとしたり。初め國會の爲めに豫算の却けらるゝや、王は固く執つて動かさず、爲めに一八六二年國會を解散し、内閣は總辭職となれり。時の宰相ホーヘンツォレルン公はビスマルクを推薦し、王も心動いて彼を召喚し、切に懇請したりしも、彼は斯かる重職に身命を捧ぐるに先ち、閣を

得て先づ巴里を研究するの要ありとこし、固辭して受けず。斯くて新内閣はホーヘンツォレルン公を宰相として組織せられたるも、國會に王意を強ふる能はずして休みたりき。

ビスマルクは一八六二年六月、駐佛大使として巴里に赴きたるも、久しからずして其國に歸りぬ。滞在數日に過ぎざりしが、彼は此機會を利用して能く英國の勞働社會を研究し、或は政黨の領袖と會見し、獨逸統一問題に非常の注意を拂ひし。皇配アルベルト親王の後繼者にして、熱心なる普國稱贊者たるパーマーストン卿と胸襟を披ひて語りたりき。又露國大使館に於て當時の在野黨の首領ディズレリと相知り、共に腹心を吐露し、肝膽相照したり。後年伯林會議に席を同うするに至りても、互に心情流露の意見を闘はしたりき。

彼の巴里に在る僅に半歳國王の親電に接して蒼皇伯林に歸りぬ。これ普國國會が王の陸軍改革を紛擾喧噪の裡に葬り去り、内閣も亦其意を貫く能はず、王は之をビスマルクに託せんとしたるが故なり。是に於て彼は大命を拜して普國宰相の印授を帯びぬ。

四 國會に於ける衝突時代 附丁抹戰爭及び普埃戰爭

ビスマーク宰相に任せらるゝや、異數の拔擢を受けたるビスマークとは何者ぞや。とは、普國民多數の疑問なりき。自由黨の新聞は直ちに「彼は腕力處分を敢てしたる怪物なり」と答へ、傲然不遜の青年貴族黨、ナポレオン三世の崇拜者、都市破壊者と叫んで痛罵惡評を盡したりき。十年前、かの革命時代に於て彼に對つて發せられたる冷言酷語は再び驟雨の如く彼の頭上に降り、然れども王は此不人望に顧慮せず。斷乎として彼を新首相に登用したるなり。

當時ビスマークは其劃策の失敗を恐れて其祕密計畫を漏らさず、爲めに國會は外交の機密を知らざるが故に、一見必要な軍隊の經費に協賛を與ふる能はず、常に彼の政策を制肘したり。彼は代議士の不明を冷笑し、臺閣に入りて數日ならずして言明して曰く、時局の大問題は當に國論と大多數とを以て解決すべきにあらず。これ一八四八年及び一八四九に於ける失敗に鑑みて明かなり。今は唯鐵

と血とあるのみ」と有名なる彼の鐵血政略は是に濫觴す。

ウイレム王の陸軍改革案は實に唯一人ビスマークに依つて支持せられたるなり。如何なる勢力も彼を拘束すること能はず。全國民の反抗彈劾も、全歐洲の憎惡強迫も、ビスマークに在つては一些事に過ぎざるのみ。縱令爲めに王位を危うせんも、彼は決して逡巡躊躇する所あらざりき。縱令絞刑に處せらるゝとも、絞臺の繩を以て堅く新獨逸を陛下の王位に結び付くるを得ば、予が本懐なり」とは、彼が常に王に對つて言明せし所なり。

國王と議會との紛争は前後三年に亙りぬ。ビスマーク宰相となるや、初めは和衷協同の念を以て折衝せしも、改革案に對して協賛の得難きを見、遂に強硬なる高壓手段に出づるに至り、其結果は政府の原案施行となりぬ。舉國政府の非立憲的行爲を憤り、縱論橫議國內の形勢暗憊たるものありしが、ビスマークは嚴として動かざりき。彼が國會に於て辯難論争するや、冷笑することも憤怒を面に現はすことなく、痛切皮肉なるも粗野亂暴なるもなく、加ふるに社會的教養を有したりしかば、敵黨と戦ふに當つて利する所少からず。且つ高等教育を受けたるが故に、猛烈

なる攻撃に會つて神色自若たりき。彼は如何なる場合に於ても、傲然として「予は國王以外何人の拘束をも受けず」と言ひ、自からにして國會に於ける増悪の中心とはなりたるなり。嘗に國會の激烈なる攻撃を受けたるのみならず、新聞の最も厭ふ所となりたり。

新外相として立てるビスマルクが就任未だ數週ならずして、彼が其職に堪ふべき偉材たるを示すの機會に遭ひぬ。時は一八六三年、波蘭に一揆の蜂起するあり、其俄然として突發し、而も勢猖獗を極むるや、爲めに聖彼得堡を震駭し、當局者は周章狼狽して筆の施すべきを知らざる有様なりき。周匝冷靜なるビスマルクは遙に伯林より露國當局を鼓舞し、冷靜能く事に處せしめんとしたるが、而も謀反の焰は西方列強の同情に煽られ、燎原の勢を以て隣接ポーゼン地方に迫り來りぬ。

當時ビスマルクの態度は新聞記者の誤解を招き、普國を以て露國の強迫に屈服して其傀儡となれりせられたれども、事實は然らず、露國政府は反つて伯林政府の願使する所となれるなり。

波蘭蜂起鎮靜に歸して、普露兩國既に危險なきに至るや、一八六三年一月、ビスマルクはゴルチャコフに提言して、露國と協約を結び、露國政府は兩國軍隊は逃亡叛人追捕の爲めに、必要に應じて相互の國境を越ゆることを得て、協約に調印せり。此協約は普國領土に於ける波蘭人が露國領土内の同胞と合同するを虞れ、之を豫防せんとしたるなり。

ビスマルクの豫防的政策は國會をして憤怒せしめしが、彼が這般の問題に對する態度の眞意は、普國將來の政策に對して好結果を得るに在りしなり。然れども普國々内に於ても多數黨なる急激進歩黨は極力其政策を非難攻撃せし以上、西部諸列強が不幸なる波蘭人に同情したるは又決して異むに足らず。當時英國はビスマルクに對つて「貴國の不正なる干渉は英國々内の憤怒と擾亂を醸したり」と謂ひ、波蘭に關して協約を結ぶ所あらんことを要求し、他方に於て英國は佛境の外交上の後援の下に、露國に迫るに波蘭改革を以てしたるも失敗に歸し、ビスマルクは冷然として之に對したりき。

波蘭の叛徒は鎮壓せられ、是に歐洲列國は今や普國がフリードリヒ大王以來の

獨逸聯邦中の主導國とは全く異なる勢力となりたるに喫驚しぬ。之よりビスマルクは其精力を獨逸の發展にのみ用ふるを得るに至り、其技倆未だ全歐洲人の認むる所とならざりしも、其態度は斬新奇警にして世人の意表に出でたり。實に彼は憎惡反對の中心となり、自由に於てすら猜疑の眼を以て見られ、君主を除きては一人の友人もなかりしに拘らず、歐洲の大國に對して毫も屈從する所なく、斷乎たる態度を以て決して結果の如何を顧みざりき。

ナポレオン三世に對して彼は埃太利に關する意見を明瞭に告白して憚らざりき。而して彼はナポレオン三世が波蘭事件に容喙し、幾許の要求を普國に申込みし際、却つて之を甘受してナポレオン三世の意を迎ふることに努めたり。波蘭事件と云ひ、ナポレオン三世に對する此政策と云ひ、何れもビスマルクの慣用手段にして、暗に露佛と相提携して、埃太利に衝らんとする準備に過ぎず。當時埃普の間柄は犬猿も管ならず、隙を伺つて獨逸聯邦の盟主たらんと、互に鋒鏑を磨ぎつつあり。ビスマルクが埃國公使カロリー伯に向つて、普埃二國は互に今日の關係を持続する能はず、善惡孰れにか變化せざるべからず、善き方に向つて變化せん

とは勿論政府の望む所なるも、若し貴國內閣にして善に移るべき必要なる處置を執らざる限りは、普國は其反對の方面に眼を注ぎ、其準備をなさざるべからず。てふ豪語を發せしむるに至りたるを見ても、如何に兩國が水火相容れざる關係に在りしかを知るを得べし。而して埃太利は種々の改革案を出して、聯邦の國情を調和し自ら獨逸の覇權を握らんとすの素志を貫かんとし、一八六三年夏、列國は埃國の呈出したる此改革案を議せんとて、フランクフルトに聯邦會議を開きたるが、普王は獨り出席せざるより、埃太利先づ立つて普國排斥運動を試みんとし、茲に一騒動を起さんとせし際、他の新事件惹起して局面を他に變向したり。

一八六三年十一月十四日、丁抹王フレデリック七世崩御す。丁抹王はシュレスウイック・ホルンシュタインの公を兼ねぬ。此兩公國は地理上獨逸に入るべきに、其實丁抹王の統御の下にあり、其地方に在る人民は何れも祖先傳來の觀念より丁抹に隸屬するを欲せず、却つて獨逸のアウトグステンブルグ公フリードリッヒを仰がんとすを熱望しつゝありしが、一八五二年の倫敦條約に依り、丁抹國王は此兩公國內に在る人民の權利及び自由を侵害するを得ざるに決定したり。然るに丁抹王フレデリック

ク七世は密に倫敦條約を蹂躪し、シュレスウヰグとホルシュタインを分離せしめ、國會をしてシュレスウヰグを以て永久に丁抹王國の一部となすことを議決せしめたるが、事の始末を見ずしてフレデリック七世は崩御したるなり。茲に於て何人が其王位を繼承すべきかは當時歐洲の疑問なりき。然るにフレデリック七世に繼いで即位せるクリスチャン九世は、自國民がシュレスウヰグ合併に心動けるを見て、假令獨逸の擾亂を惹起するも自國民の信任を失はんことを恐れ、且つ英國及び瑞典は必ず丁抹を助くべしと早合點して、議會に於て可決したるシュレスウヰグ合併の新憲法を裁可したり。獨逸民心は此報を得て激昂の頂點に達せり。早急聯邦會議は開催せられ、フリードリッヒ公を以て、シュレスウヰグ・ホルシュタインの正當の主權者と認むべきか否かに就て議論せり。議論紛々として未だ決せざるに、突然普埃兩國は此事件に就て他の聯邦の干渉するを避け、直接兩國の問題たらしめんと企てたり。これビスマルクの深大なる計劃に依るものにして、彼は普魯西亞をして、シュレスウヰグ・ホルシュタイン二公國に對し勢力を得しめざる可からずとなし、且つ斯くの如くにして普國の地歩を鞏固ならしめ、以て次第に埃太利の勢力を

獨逸以外に驅除せざるべからずとしたるなり。然らば彼は何故に埃太利と提携して事に當らんとせしか。これビスマルクの外交的手腕の存する處にして、彼は初めより此事件に就て埃太利が他國と同盟せんことを恐れたるが故に、自ら走りて之と締盟し、一方にはシュレスウヰグ・ホルシュタイン問題を以て、歐洲問題たるを避けしむると同時に、他方に於て彼が是まで一身に受けし獨逸及び歐洲の怨惡の幾分を埃太利に分配したるなり。彼は二重政策を行ひたるなり。

普埃兩國はクリスチャン九世に對して有害なる新憲法の撤回を要求したり。而してクリスチャン九世が之を肯んせざるに及んで、普埃の新同盟軍は組織せられ、ホルシュタインの境界に進軍せり。時にフランクフルトの聯邦會議は同盟軍のシュレスウヰグに侵入することに反對し、普國々會は政府の提出案に賛成せずして、軍費の支出を承諾せず、且つビスマルク不信任の動議を可決せりと雖、ビスマルクは少しも屈せず、其計劃を斷行して憚らず。一八六四年二月一日、同盟軍は終にアイデル河を横り、丁軍到る處に連戰連敗して、終に四月十五日、同盟軍はデッセルの城壁を陥れき。此報倫敦に達するや、ビスマルクが佛露二國と締盟せるを知り

て久しく忍耐したる英國は、遂に黙する能はずじて抗意を表し、一八五二年の條約に調印せし列國を再び倫敦に會せんとせしが、ビスマルク一言の下に之を斥けて曰く、「一八五二年の條約は既に交戦國間の凡ての一致平和を抹殺する戰爭に依つて、全然無効となりたるにあらずや」と。英國終に黙して干涉せず。同盟軍は尙進んでアルゼン海峽を渡り、丁抹兵の最後の根據地たるアルゼン島に上陸せり。茲に於て國王クリスチャン九世使を維納に派して和睦を乞ひ、ビスマルクは公國を永久に丁抹より分離せしめ、シユレスウイグ、ホルシュタインの讓與を求めて此に漸く葛藤の解決を見るに至れり。此事件に於けるビスマルクの功績は、彼が政治的生涯を通じて看過すべからざるものあり。彼が後年、余が公爵に叙せられし時、國王陛下はアルサス・ローレーヌを余の徽章となさむと云ひ給へり。されど余は寧ろシユレスウイグ、ホルシュタインを望む。何故なれば、そは政治的意味に於て予の最も誇とする處なればなり」と。是を以て見るも、彼が此問題の解結に如何程力を用ひしかを知るに足るなり。

然れども次にビスマルクに取りて、最も困難なる問題は生じたり。即ち丁抹より

其主權を奪ひたるシユレスウイグ、ホルシュタインを何國に屬せしむべきやてふ問題なり。丁抹との戦雲漸く收まりてより、兩公國の政治は一時普墺の權勢の下に行はれしが、素より相容れざる兩國の野心は争を生せずして已むべくもあらず。終には墺國政府も、普王ウイレルムすらも最初より大に公國の主權を得んとを熱望しつゝありしアウグステンブルグ公の願を容れて、其主權を公に委ねんかどさへ思惟するに至りしも、唯一人ビスマルクのみは豪然として之に耳を傾けざりき。時に墺太利は公國と面積を同する土地例へばシレシア、グラーツの如きを普國が墺國に與ふれば、墺國は普國の公國合併を默認すべしと云ふ交換的案を提出せしも、ビスマルクの心は少しも動かす、斷然之を拒絶したり。茲に於て兩國の風雲頗る急を告げしが、幸に一八六五年八月十四日のガスタイン條約に於て、シユレスウイグは普國之を領し、ホルシュタインは墺國之を有し、又ローエンベルグに於ける墺國の諸權を、普國は五十萬弗を以て買受くることとなり、騒ぎ立ちたる民心は一時收まることを得、ビスマルクは功に依り伯爵に叙せられたり。

さるにても最初より強硬の態度を執り、一杯の土と雖、墺國には譲らずといふ堅

き決心を有するビスマークが、何故に奥國と斯る手緩き條約を結びたるか、これ當然發せらるべき疑問なり。蓋しビスマークは此時勿論此條約を確守する心なく、奥國と戰を交ふる前に、伊太利及び佛國と結びて必勝を期する要ありし爲めに、彼は一時の手段に條約を供したるに過ぎざるなり。

ビスマークは先づナポレオン三世を説きて佛國と結び、伊太利と締盟して外憂なからしめ、二度までも中議會を解散して十分なる軍備を整へ、開戰の準備おさおさ怠りなかりき。ガスタイン條約以後六ヶ月を経ずして、奥國公使カローリー伯がビスマークに向つて、閣下はガスタイン條約を破棄する覺悟なるか、てふ奇問を發せしに、彼は即座に、否、然れども縱令余が之を破棄すると決せしも、閣下は余が之を閣下に語ると思惟するか、てふ奇問を發してカローリー伯の荒膽を抜きたりと云ふ。

兩政治家の此問答を見ても、普奥兩國が既にガスタイン條約を確守するの意なく、互に機を見て事を干戈に決せんと企てつゝありしは極めて明白なる事實なり。此時ビスマークは既に伊太利と締盟して、普國が奥國に對して戰端を啓く際

には、普國の爲めに援軍を出すべきことを密約せしが、權謀諂詐極なきナポレオン三世は、彼が日夜渴望せるライン左岸を得んが爲めに普國と結び、一方に於ては奥國とも手を握つて、若し奥兵普國を破れば、奥はシレシアの地を佛に讓るべしとて締盟の密約を結びぬ。而して此の奸政治家ナポレオン三世が巴里に開きし平和會議を、奥太利が拒みたるを機として、ビスマークは終に奥國に向つて最後の通牒を發し、茲に幾度か燃え上らんとして燃えざりし普奥戰爭は實現せらるゝこととなれり。

一八六六年夏、普國の勇將マントイフルは軍を率ゐて、アウグステンブルグ公及び奥兵を境外に驅逐し、シュレスウイグ・ホルシュタインを占領せり。六月三十日、七十歳の普王ウイレム一世は、ビスマークを從へて戰地に行幸し給ひぬ。戰勝の報は日を繼いで伯林に達し、宰相ビスマーク、陸軍大臣ローン、將軍モルトケの名は、戸毎に喧傳せられ、嘗つて狂人と罵られ、壓制宰相と酷評されしビスマークは、茲に比類稀なる名宰相として、普魯西國民の救世主として、榮譽ある凡ゆる賛辭を冠せらるゝに至りぬ。奥軍は到る處に連戰連敗してなす所を知らず、豫て普國の

敗北を期し、其敗北を利用してライン左岸の地を得んと企てつゝありしナポレオン三世は、案に相違して普軍勝を占めしかば、周章狼狽して一計を作り、埃軍がサドワに破れし翌日、ヴェロナの野に於て伊軍は埃軍の爲めに敗られて退き、埃國皇帝はベネチアをナポレオンに割與したり。故に巴里の皇帝は今後の慘劇を防ぐ爲めに大膽なる仲裁を試みざるべからずと云ふ電報を普王に送り、唯南部にのみ勝ちし埃軍をしてボヘミアに敗北せし味方の軍を助けしむる時間を與へんとせしが、此奸計は直ちにビスマークの看破する處となり、ビスマークはナポレオンの此電報に對して、佛蘭西は固より貴國の仲裁に對して反抗するの意なし、唯埃太利より平和の擔保を得たる後休戦せむてふ皮肉なる返電を與へたり。然るに狡猾なるナポレオン三世は飽くまでも普國の發展を妨害せんと欲し、凡ゆる手段を盡し幾度となく普國若しメーエンス市とライン左岸の地を割くならば、佛國は普國の土地占領に對して決して決して異存を唱ふるとなかるべしと説きぬ。此際列國中の形勢を見るに、英國は丁抹戰爭の際と同じく英斷をなす能はずして踟疑逡巡し、露國は前に述べし普露秘密條約を履行して普國の行動に關し

て少しも干渉せず、唯厄介なるはナポレオン三世の制肘なりしが、ビスマークは少しも之に煩はされずして遂に七月二十六日、ニコルスブルグに於て休戦條約を結びき。茲に於て埃太利は四千萬ターレルの償金を拂ひ、普魯西はシユレスウイグ、ホルシユタイン、ハノヴァー、ヘッセ、カッセル及びフランクフルトの自由市を其領地に加へ、面積凡そ舊領地の四分の一を増加しぬ。六月三十日に伯林を去りたるビスマークが、八月の四日、普王と共にブラーグの條約を手にして伯林に歸るや、佛國公使ベネデッチはビスマークを訪ひ、彼を促して曰く「メーエンスを讓るべきか、然らざれば宣戰を布告すべきか」と、ビスマークは「我等をして戰はしめよ」と即答せりと云ふ。普埃戰爭は斯くの如くして終を告げたり。茲にビスマークは新領土を統一し整頓することに其全力を注ぐこととなれり。

五 獨逸北部聯邦の建設

ビスマークが普埃戰爭に於てなしたる成功は、克く普國議會に於ける彼の政敵

を屏息せしむるを得たり。而てビスマークはボヘミアの勝利を以て、單に奥大利を聯邦の外に驅逐したるのみならず、三十二の北部諸邦を統合して主權を掌握し、且つ進んで獨立の國際的位置に在る南部諸邦をも併合せんとする野心を起せり。一八六七年二月、普通選舉に依りて成立したる日耳曼議會は伯林に於て開かれたるが、ビスマークは此新議會に於て國民自由黨を籠絡し、保守黨の後援を假りて、遂に聯邦君主に適當なる憲法を制定することを得たり。此新北部日耳曼聯邦は立憲政府を有する聯邦にして、立邦議會として上下兩院を設け、下院議員は普通選舉に依つて選舉せられ、上院は聯邦會議にして、各聯邦とも人口の多寡に應じて代表者を選出し、議員の數は四十三人にして、その中普魯西は十七人を選出し、普王は聯邦會議の議長即ち聯邦の統領となり、ビスマークは聯邦大法官の地位に上り、茲に始めて鞏固なる行政制度を有する真正の獨逸政府は建設せられたり。されば獨逸統一てふ事をして事實たらしめんと欲せば、唯南部諸州を此聯邦に結合せしむれば足るなり。之を要するに紛糾錯雜の時代は既に經過し、新構造は確乎たる形を備へたるなり。

此國運の隆盛旭陽の上るにも似たる普魯西の狀勢を見たる佛帝ナポレオンは、ボヘミア戰役後ベネチチ公使をして(一)佛國は普魯戰爭の結果を承認したる報酬としてルクセムブルグを其領地となす事、(二)獨逸南北統一の運動に敢て異存を唱へざるが故に自耳義を佛國に與ふべき事、てふ二箇條の無法極まる要求を普魯政府に齎らしめたり。此ルクセムブルグと云ふは地理上より見れば獨逸の一部にして和蘭王の統御の下に在り、和蘭王は此土地を有するが故に獨逸聯邦會議にも出席せしが、普魯戰爭の結果、舊獨逸聯邦が形の上に於て消滅し、普王を推戴する新獨逸聯邦の現はるゝや、和蘭王は此新議會に出席せずして、挑戰的に普魯西に向つて其守護兵を撤退せんとを要求せり。此要求に對してビスマークの肯んせざるを見て、例のナポレオン三世は和蘭に使を派し、若しルクセムブルグを佛國に讓與すれば、佛國は之に對する償金を拂ひ、且つ普魯西の和蘭攻撃に際して援助を與ふべしと談判せしめたり。而してナポレオン三世は斯くの如き舉に出でしは、南部獨逸聯邦が此爭議に關しては必ず局外中立を守るべきことを確信したるが故なるに、ナポレオンの此魂膽を知り居りしか否かは分らねど、ビ

スマークは此時既に南部獨逸諸州と攻守同盟を密約し居りしなり。此報を聞知せしナポレオンの失望や如何に。和蘭王の彼の談判に對する快諾も、最早彼を悦ばすには足らざりしかど、兎に角彼は和蘭に向つてルクセムブルグ讓渡の談判を持続し、遂に其地を占領せり。獨逸の國民は甚しく憤激し議會の輿論は佛蘭西の專横を憤りて、之を黙視するに忍びずと、ビスマークも亦佛蘭西を屈服せんとするの意志強く、終に最後の使をヘーグに派し、和蘭の佛蘭西ヘルクセムブルグを讓與せし事を以て、開戦の理由を認むる旨を通知せり。茲に於て一八六七年五月、倫敦に於て列國會議は開かれぬ。あはや普佛兩國の間に戦端は開かれんとせしが、此時ビスマークは時未だ戦をなすの時にあらざるを思ひ、外國と戦争をなす前に國論を統一すべき必要生じたるのみならず、埃太利の首相ボイスト伯は南北獨逸攻守同盟を以て、明かにブラーグ條約を破棄したるものと見做し、ビスマークがルクセムブルグ問題の落着するまで同盟せんと要求を拒絶したるを以て、ビスマークは例の強硬談判を倫敦會議に於て發揮するを得ざりき。斯くして會議の結果、五月十一日、ルクセムブルグを以て列國保證の下に中立を保

つべきものと決定せられたり。後社會黨の一員が、ビスマークの倫敦會議に於ける主張の腰弱かりしを非難するや、ビスマークは之に答へて曰く、我等はルクセムブルグを保護する權利を棄てたり。如何となれば舊獨逸聯邦の潰敗と共に、此權利の我に存するや否やを疑ひたればなり。然れども假令權利を失ひたりとも、我等はルクセムブルグ公國を失はず。同公國は以後永く獨立國として存在し、決して我等の隣國の占領する所とならざるべしと。

ビスマークの此政策が失敗なりしか否かは兎に角、何物かを得ん爲めに事を起して結局何物をも得ざりし佛帝ナポレオン三世こそ最も憐れむべき地位を取りたるなれ。彼は最初にライン左岸の地を得んとして果さず。白耳義計劃に失敗し、今又ルクセムブルグ問題に失敗し、九ヶ月の間に三度普魯西と協議して三度屈辱を蒙る。而して是等の擧は一面に於て彼が起せし墨西古遠征の失敗を補ひ、以て國民の譽望を得んとの計劃に出でたるものにして、一面に於ては其隣國普魯西の專横と隆盛を羨む嫉妬心より出でたるものなり。ナポレオン憤慨して曰く、ビスマークは三度余を玩弄物となしたり。苟くも佛國皇帝たるものは、他人

の玩弄物たる能はずと即ちニールを以て陸軍大臣となし、銳意軍隊組織の改造、兵器の改良、軍需の集合をなして、普魯西に復仇する機會を俟てり。

斯くの如くナポレオンの外交に拙にして、再三佛蘭西が國辱を受け、普魯西の膨脹を止め得ずして却つて佛蘭西の東隣に強大なる敵國を作るに至りしことは、大に佛蘭西國民の憤慨する所となり、ナポレオン三世を攻撃する者漸く多きを加へ來り、大ナポレオンの崇拜者たるチエールの如きは殊に慷慨悲憤の辭を叫んで皇帝の無能を痛罵しぬ、而してナポレオン三世と雖、固より普魯西の膨脹專横を惡み國威の侮辱を怖るゝ心に於ては斯かる政客に少しも劣らず、彼は裏心悶々の情を拂つて晩年の平和を計ることに維れ努めたり。

ルクセムブルグ問題落着の年、即ち一八六七年、巴里に世界大博覽會開かれ、巴里市街は前古未曾有の盛觀を極め、露皇及び普王も亦此地に來遊せられたるが、此時普王と共に參觀したるビスマルクに就て巴里の一新聞紙は、巴里は政治上の宿敵たることを忘れてビスマルク卿を國賓として待遇せむと論じたり、又流石の鐵血宰相も此巴里行に就ては頗る危惧の念を抱きたりと云ふにても、如何に

普佛兩國が相敵視し、相軋轢せしかを知るに足るべし。

一八七〇年二月、バーデン州遂に北部獨逸聯邦に加入するに決し、其案國會に現はれしかば、佛國は之を以て獨逸各州の獨立を認めし、プラグ條約の違反なりと論じ、ビスマルクを攻撃せしが、ビスマルクは其機關新聞をしてプラグ條約は決して南北獨逸の合同を妨ぐる者にあらずと論せしめ、益、佛、英、普兩國國民の激昂を惹起せり。然れども元來、英、普兩國は飽くまで佛國と締盟を固くするの意なかりしかば、佛國內閣は一先づ戰爭を斷念し居たりしに、茲に端なくも消えなんとする火に再び油を注ぐとも云ひつべき新問題現はれ、之が爲め終に普佛戰爭は曝發するに至りたり。

六 普佛戰爭

是より先、西班牙の女王イサベル政を失して國治らず、將軍プリム革命を起して女王を廢し、假政府を設けて國王たらんとする人を求めたるも、西國の内政紊亂して統御の極めて困難なるを知て、何人も之に應ずる者なかりしが、プリムは終